

読書悠々日記

(2015年)

久恒啓一

目次

2015年1月	6
竹村公太郎「土地の文明」(PHP研究所)	6
佐藤優「読書の技法」(東洋経済新報社)	7
佐藤優「人間の叡智」(文藝春秋)	7
滑川海彦,アーキ・ヴォイス「2015世界はこうなる」(日経BP社)	9
宮家邦彦「語られざる中国の結末」(PHP研究所)	10
宮家邦彦「哀しき半島国家・韓国の結末」(PHP研究所)	13
嶋聡「孫正義の参謀」(東洋経済出版社)	14
2015年2月	15
吉村昭「海も暮れきる」(講談社文庫)	15
坪内稔典「一億人のための辞世の句」(展望社)	16
イケダハヤト「新世代努力論」(朝日新聞出版)	16
伊集院静「無頼のススメ」(新潮新書)	17
城山三郎「少しだけ、無理をして生きる」(新潮文庫)	18
沢木耕太郎「敗れざる者たち」(文藝春秋)	19
2015年3月	20
青山一郎「栄光と孤独の彼方へ 円谷幸吉物語」(ベースボール・マガジン社)	20
浅田次郎「日本の『運命』について語ろう」(幻冬舎)	20
外山滋比古「知的生活習慣」(筑摩書房)	20
メイソン・カリー著・金原瑞人・石田文子訳「天才たちの日課」(フィルムアート社)	21
竹内洋「革新幻想の戦後史」(中央公論新社)	22
沢木耕太郎「敗れざる者たち」(文藝春秋)	25
宇沢弘文「社会的共通資本」(岩波書店)	26
伊東豊雄「あの日からの建築」(集英社)	27
2015年4月	28
森村誠一「祈りの証明—3・11の奇跡」(角川書店)	28
大村はま「新編・教えるということ」(筑摩書房)	29
村山富一・佐高信「『村山談話』とは何か」(角川書店)	29
薬師寺克行「村山富市回顧録」(岩波書店)	32
公文公「やってみよう—子供の知的可能性を追求して」(くもん出版)	32
ヘミングウェイ「キリマンジェロの雪」(角川書店)	33
童門冬二「なぜ一流ほど歴史を学ぶのか」(青春新書)	33
佐藤優「沖縄評論」(光文社)	34
鳥越皓之「沖縄ハワイ移民一世の記録」(中央公論社)	36

鳥越皓之「琉球国の滅亡とハワイ移民」(吉川弘文館).....	36
2015年5月.....	37
荻阪哲雄「リーダーの言葉が届かない10の理由」(日本経済新聞出版社).....	37
大田昌秀・佐藤優「徹底討論 沖縄の未来」(芙蓉書房出版).....	38
八木哲郎「19世紀の聖人 ハドソン・テラーとその時代」(キリスト教新聞社).....	39
大久保潤・篠原章「沖縄の不都合な真実」(新潮新書).....	41
童門冬二「江戸の怪人たち」(童門冬二).....	42
森鷗外「高瀬舟」(新潮社).....	42
森鷗外「『青年』—日本文学全集(池澤夏樹監修)13巻」(河出書房新社).....	43
金子兜太「語る兜太——わが俳句人生」(黒田杏。岩波書店).....	43
大江健三郎「沖縄ノート」(岩波新書).....	45
森鷗外「高瀬舟」(集英社).....	46
黒田杏子「金子兜太養生訓」(白水社).....	46
岡本かの子「老妓抄」(新潮社).....	47
2015年6月.....	47
高良倉吉「琉球王国」(岩波新書).....	47
長谷川智恵子「鴨居玲 死を見つめる男」(講談社).....	49
久米信行「ピンで生きなさい」(ポプラ社).....	49
夏目漱石「道草」(新潮社).....	50
松島泰勝「琉球独立論—琉球民族のマニフェスト」(バジリコ).....	50
大城立裕「小説 琉球処分」(上)(講談社文庫).....	51
夏目漱石「門」(Kindle版).....	52
石川文洋「フォト・ストーリー 沖縄の70年」(岩波新書).....	52
大城立裕「小説 琉球処分」(上・下)(講談社文庫).....	53
深川英雄「キャッチフレーズの戦後史」(岩波新書).....	54
石田修大「『私の履歴書』—昭和の先達に学ぶ生き方」(朝日新聞出版).....	55
瀧口範子「にはほんの建築家 伊東豊雄・観察記」(筑摩書房).....	55
2015年7月.....	55
堤未果「沈みゆく大国アメリカ 逃げ切れ! 日本の医療」(集英社新書).....	55
曾野綾子『沖縄戦・渡嘉敷島「集団自決の」真実』(ワック).....	58
寺島実郎「新・観光立国論」(NHK出版).....	58
渡辺豪『「アメとムチ」の構図—普天間移設の内幕』(沖縄タイムス社).....	59
宮沢章夫「NHKニッポン戦後サブカルチャー史」(NHK出版).....	60
2015年8月.....	60
外山滋比古「50代から始める知的生活術「人生二毛作の生き方」」(大和書房).....	60
佐藤優「知性とは何か」(祥伝社).....	61

桐野夏生「抱く女」(新潮社).....	62
琉球新報社,新垣毅「沖縄の自己決定権—その歴史的根拠と近未来の展望」(高文研) ...	63
村上龍「オールド・テロリスト」(文藝春秋).....	64
森嶋通夫「なぜ日本は没落するか」(岩波書店).....	65
百田尚樹「大放言」(新潮新書).....	67
むのたけじ「99歳 一日一言」(岩波新書).....	67
2015年9月.....	68
大田昌秀「これが沖縄戦だ—写真記録」(那覇出版社).....	68
中野剛志「世界を戦争に導くグローバリズム」(集英社新書).....	69
水戸岡鋭治「あと1%だけ、やってみよう 私の仕事哲学」(集英社インターナショナル).....	70
水戸岡鋭治「鉄道デザインの心—世にないものをつくる闘い」(日経BP社).....	71
宮崎康三「シェアリング・エコノミー—Uber, Airbnbが変えた世界」(日本経済新聞出版社)	72
村上龍「おしゃれと無縁に生きる」(幻冬舎).....	73
細川あつし「コーオウンド・ビジネス—従業員が所有する会社」(築地書館).....	74
山崎豊子「大阪づくし私の産声山崎豊子自作を語る 2 (山崎豊子自作を語る 2)」(新潮社)	74
山崎豊子「作家の使命 私の戦後—山崎豊子自作を語る 作品論」(新潮社).....	74
野上孝子「山崎豊子先生の素顔」(文藝春秋).....	74
2015年10月.....	76
町田康「宇治拾遺物語 (日本文学全集第8巻)」(河出書房新社).....	76
寺島実郎「二十世紀と格闘した先人たち—1900年 アジア・アメリカの興隆」(新潮文庫)..	77
大前研一「大前語録」(小学館).....	78
森嶋通夫「なぜ日本は『成功』したか?」(TBSブリタニカ).....	78
森嶋通夫「学校・学歴・人生」(岩波書店).....	79
荒俣宏監修「知識人99人の死に方」(角川ソフィア文庫).....	80
大城立裕「レールの向こう」(新潮社).....	80
川島勝「井伏鱒二 サヨナラダケガ人生」(文芸春秋).....	82
2015年11月.....	83
周恩来,矢吹晋,鈴木博「周恩来『十九歳の東京日記』」(小学館).....	83
マイケル・ブース・寺西のぶ子訳「英国一家、日本を食べる」(亜紀書房).....	84
佐々木俊尚「自分でつくるセーフティネット」(大和書房).....	85
若新雄純「創造的脱力」(光文社).....	85
姜尚中「悪の力」(集英社).....	85
山極寿一「京大式 おもしろ勉強法」(朝日新聞出版).....	86
佐藤秀明(編)「三島由紀夫の言葉 人間の性」(新潮社).....	86

池井戸潤「下町ロケット2ーガウディ計画」(小学館)	87
2015年12月	88
萩原英雄「美の遍路」(日本放送出版協会)	88
古市健寿「誰も戦争を教えられない」(講談社)	89
新田次郎「富士山頂」(文藝春秋)	89
勝小吉「夢酔独言」(講談社)	90
青山南「作家はどうやって小説を書くのか、たっぷり聞いてみよう!」(岩波書店)	91
佐藤優「日本でテロが起きる日」(時事通信社)	91
白井聡「永続敗戦論ー戦後日本の核心」(太田出版)	92
高橋源一郎・SEALDs「民主主義ってなんだ?」(河出書房新社)	94

2015 年 1 月

竹村公太郎「土地の文明」(PHP研究所)

日本文明の姿と本質を明らかにしなければ、21 世紀の難局には立ち向かえない。そのためには未来を生き抜くための文明論が必要だ。それは日本とは何か、日本人とはなにか、という問いに答えることである。

この著者は、建設省の河川局長などを歴任した社会資本整備の論客で、土地や河川という下部構造から文明を論じて注目を集めている。

著者は徳川家康を評価する。今年は徳川家康のことを調べたい。

「半蔵門の由来は本能寺の変の時の命の恩人・服部半蔵が近くに居を構えた門。半蔵門は甲州街道と江戸城を結ぶ門であり、裏門ではなく正門。天皇家が半蔵門を使うのは公式行事だけ」

「吉良家抹殺は徳川が 100 年かかった復讐劇だった」「1603 年に征夷大將軍になってすぐに家康は隠居し秀忠に譲っている。その意味は、征夷大將軍は世襲するとの宣言だった」「江戸幕府は文明のエネルギーを日本列島全体へ広く薄く分担させた」

- ・ 北海道。穀物争奪の切り札となる。温暖化によって 100 年後は 4-5° 上昇し今の東北から関東の気温になる。日本は新しい穀倉地帯を手に入れる。
- ・ 鎌倉。背後の山々、遠浅の海という鉄壁の守り。京都は劣悪な衛生状態だった。平安京は東西 4.2 キロ、南北 4.9 キロの人工都市。20 万人以上が住んでいた。人口密度は 1 平方当たり 4900 人。(平安京の二倍の範囲に居住と考えると、現在の東京 5500 人、大阪 3700 人)。スラム化した平安京は疫病の宝庫。家康は歴史に学んだ。頼朝に学んだのは権威と権力の分離だった。(多摩ニュータウン: 開発面積は約 2,892.1 ヘクタール、計画人口は 342,200 人で、東西 14km・南北 1~3km。現在の人口は 21.6 万。)
- ・ 新潟。新潟も江戸も洪水の土地だった。水を抜いて湿地を乾かし広大で肥沃な土地を生み出す。洪水から守るのではなくて国土を生み出す。(攻めの政策)
- ・ 京都・滋賀・奈良。交流軸の都市は栄える。水運、幹線道路、高速道路、自動車、新幹線、。高速道路という交流軸は都市を榮させる。神経網。高速道路ネットワークを張り巡らせておく必要がある。
- ・ 大阪。五十日の混雑は人との交わり。人と会うことで信用と新しい知を生み出す。異質の人々の住むところが都市。
- ・ 広島。征夷大將軍の「夷」とは両手を広げて弓を射る人、つまり狩猟民。文明は農耕民族が狩猟民族を圧迫していく物語。毛利は狩猟系だったが、海の中の広い島に城を建設し干拓と塩田の拡大に勤しんで農耕の人となっていくた。
- ・ 福岡。面積 340 平方キロに 140 万人。無理をした巨大都市。大きな川がない。ユーラシア大陸から日本列島にたどり着く世界文明の大交流軸の上の都市。

- ・ 北京。文明の自壊か、遷都か。
- ・ ソウル。600 年前の古都の清溪川(チョンゲチョン)の復活。交通渋滞はソフトで解決。時間短縮と空間の有効利用を失い、歴史と文化と自然を得る事業。李明博ソウル市長の公約。

佐藤優「読書の技法」(東洋経済新報社)

現在 4 万冊。7 万冊まで大丈夫な場所を確保。

以下、参考になったとこと。

- ・ 新しい情報のインプットは日に最低 4 時間から 6 時間。
- ・ 新刊 70-80 冊。古本 120-130 冊購入。献本 100 冊。(毎月)
- ・ 速読(30 分から 2-3 時間) 50-60 冊。超速読(5 分) 240-250 冊。熟読 4-5 冊。(毎月)
- ・ 基礎知識「岩波講座 世界歴史」。「岩波講座 日本歴史」。
- ・ 積ん読は常時 5-6 冊。
- ・ 読書後 30 分で補強作業。ノートし簡単なコメント。(私の場合はブログに書くこと)
- ・ 「小説・琉球処分」(大城立裕・講談社文庫)
- ・ 自宅の本棚 6 つ。1000 冊。今仕事に必要な資料。
- ・ カシオ電子辞書 EX-Word(XD-SF700)
- ・ 自宅、自宅近くの 2LDK の仕事場、箱根仙石原。

佐藤優「人間の叡智」(文藝春秋)

通勤の往復を中心とした移動中に 6 時間弱のオーディオブック「人間の叡智」(佐藤優)を聴き終わった。読了というのかどうか。これは聴読という。

メッセージは頭に入ったが、大事なところに線を引いたりメモを書くことはできないので、kindle で電子版を買って、気になったところに線を引く作業を終えた。このスタイルは復習にいい。結局、紙の本は買っていない。

佐藤優という稀有な能力の持ち主の知的生産性は極めて高い。その能力で現在の読書界を席卷している。

鈴木宗事件の国策捜査に関連して背任にあたると起訴されて、2009 年 6 月 30 日に最高裁で懲役 2 年 6 か月(執行猶予 4 年)の有罪判決が確定した。その結果、外務省職員の身分を失い、2013 年 6 月 30 日に執行期間が終了した。この間ほぼ 10 年の歳月が経った。佐藤氏は 2005 年の「国家の罫--外務省のラスプーチンと呼ばれて」(新潮社)でデビューし職業作家となった。そして 10 年が経った。

2012 年 7 月に書かれたこの本は過去 20 年にわたって構造的な停滞の中にある日

本の生き残りのための考え方を示そうとしたものだ。

新帝国主義下にある世界の中では、インテリゲンチヤー(知識階級)は、断片的な知識をつなげて「物語」にする力が必要だという。

新しいストーリーを生み出す能力である。

佐藤氏は膨大な蓄積とその上に立った思考力に支えられており、ズバッと本質をえぐりだした言葉を並べることができ、読者は腑に落ちていく快感を得ることができる。

10年ほど前からこの人の著作に親しんできたが、今回の「人間の叡智」にも感銘を受けた。

- ・ 日本の官僚は恐ろしく低学歴。博士号や修士号を持っていない。後進国型の教育システムになっているからだ。
- ・ 社会の真ん中より少し下のくらいの層がどんどん貧乏になっていく。それはグローバル時代の反映だ。不況や雇用の問題はなかなか解決しない。正規雇用、派遣労働者、外国人労働者、就職難民という4つの労働者階級ができて、賃金の下方柔軟性ができてしまった。
- ・ 帝国は、国民国家を超えている。格差と差異が必要だ。日本には沖縄という地域が民族を超える原理で統合できていない。普天間問題を強行すると国家が割れる可能性がある。
- ・ TPPは自由貿易ではない。保護主義だ。アメリカと日本を中心とするブロック経済で中国とは壁をつくるしくみ。
- ・ 中国は中華民族というネーションビルディング(民族形成)をしている最中だ。それには敵が必要であり、日本を選んだから次から次へと問題が出てくることになる。これはうまくいか。たぶんできない。
- ・ 西欧近代は実念論(みえないが存在するものがあるというリアリズム)から唯名論(目に見えるものしか存在しない)に移行している。
- ・ 民主主義の起源は良きものを選ぶのではなく、悪しきものを排除することにある。陶片追放。
- ・ サンフランシスコ講和条約で日本は南樺太と千島列島を放棄している。千島列島には国後、択捉の南千島も含まれると吉田全権は言っている。1956年の日ソ共同宣言では「歯舞、色丹を日本に引き渡す、平和条約の締結後に引き渡す」となっている。国後、択捉は交渉する。二島プラスアルファ」。1993年の細川・エリツインの東京宣言では「四島問題を解決して平和条約を締結」となった。歯舞、色丹を係争地にして譲歩してしまった。これでソ連も逆に国後、択捉も係争地として認めた。
- ・ 北方領土で緊張関係があると津軽海峡や宗谷海峡を使えなくなるそうすると北極海航路を商業に使えない。北方領土の日悲軍事化という選択肢もある。
- ・ イランやサウジなどが核を持つような時代になると日本も持たざるをえなくなる。た

だし核不拡散体制を最初に崩す国になってはならない。やるならやむをえずという形をとる。

- ・ 日本の国体は日米安保。だから保守派は親米保守になった。日本語をローマ字にという考え方があった。それまでの当座用いるという意味で字数の少ない当用漢字があり、また常用漢字に戻った。
- ・ 日本に天皇陛下は絶対に必要。ないと日本は崩壊してしまう。
- ・ 知的エリート、パワーエリートが国際基準のインテリになり、ノブレス・オブリージュを果たせるか。
- ・ 自由と民主の折り合いとして友愛(博愛)がでてきた。仲間意識を育てるのは中間共同体がいる。
- ・ 帝国主義は収奪のために常に「外部」を作り出す。外国と国内の差異も必要。国家という枠で守らなければ富は国外に流出する。金儲けに成功したものは外国に出ていく。
- ・ 民主党は約束はしたがそれを守るとな約束していないというルールを導入した。
- ・ 読書人階級が必要。総人口の5%。日本では500万くらい。古典に二つは親しめ。ファウスト。
- ・ 言(論理)。心(良心)。力(実現)。行為(行動)。
- ・ 新帝国主義の時代に必要なのは小説的な教養。読書階級は小説、歴史書などの物語、思想書や哲学書などの古典を読む人。
- ・ すべては成長の問題になる。ゼロ成長で安定するためには身分を固定しなければならない。資本主義ではできない。

滑川海彦,アーキ・ヴォイス「2015世界はこうなる」(日経BP社)

英国エコノミストの「ワールド イン2015」の日経BP社による翻訳本「2015世界はこうなる」が届く。

英文版には「アベノミクスの限界」という日本に関する項目があったそうだが、日本版には削除されている。

その理由をどう書いているのか。

編集長によると「Asia のセクションには日本に関する記事もあったのだが 2014 年の総選挙実施が決まる前に執筆されたものであったため割愛した」という書きぶりだった。

かわりにかどうか、このムックには「日経BPセクション」を儲けて12のテーマで経営者やコンサルタントに予測と対策を寄稿させている。やはり、そのまま載せて欲しかった。

「The World in」は 30 年近い歴史があり世界 40 カ国で出版されており、ヨーロッパの目線を理解するのに役に立つ。

冒頭ののエコノミスト編集長の言の中では「2015 年は有権者がアベノミクスに愛想を尽かす年となるかもしれない」と書いている。

これが欧州の見方だろうか。

まだ読んでいる途中だが、以下ポイントをピックアップ。

- ・ 右派は政治家をナショナリストに接近させ、左派は富の再分配を要求するだろう。
- ・ 欧州銀行と日本銀行は 2015 年位に金融政策をさらに緩和する。
- ・ ドルとユーロ交換比率は同額になる。
- ・ アラブでは国境再編の動きが出てくる。
- ・ 国家の分離独立を避けるためには地方移管と分権が賢明。分離には苦痛と後悔が伴う
- ・ オバマケアは大きすぎて廃止は困難になる。
- ・ 金利は平常に戻り始める。
- ・ ビジネスは資本集約ではなくなったかもしれない。今後 10 年間の成長率は相当低くなる
- ・ TPPは安倍首相の経済改革を国外から応援するものとなる。
- ・ 2015 年に中国は購買力平価で世界一になる。日中韓FTAと東アジア地域包括経済連携(10か国)の交渉に力を入れる。中国財政は大荒れ
- ・ 「尖閣」は現実的には妥協を見出す見込みが高い。
- ・ ビジネス環境ランキング(2015-2019年)。トップはシンガポール。欧州が多いがアジアではオーストラリア 3 位、香港 4 位、台湾 14 位、日本 22 位、韓国 28 位、中国 50 位、、となっている。

宮家邦彦「語られざる中国の結末」(PHP研究所)

現代中国を東アジア・西太平洋の新たなパワーシフト(力関係の変化)という観点からとらえて中国の将来シナリオについて大胆に予測した本だ。米中衝突の可能性とその結果としての中国の結末はどうなるのか、。

中国発展モデルの 4 類型。こうした欧米式政治学的アプローチ分析には限界。

- ・ 繁栄は民主化を促進する: 熟柿モデル。希望的観測。このシナリオは早晩、破たんする。
- ・ 繁栄は独裁を強化する: 反中派唱えるモデル。中国軍事大国モデルと現状継続モデルに分化、共産党独裁の統治能力に過大評価はできない。いずれ説得力を

失う。

- ・ 独裁は長続きしない: 失政、衰退で混乱。民主化進展モデルと無政府状態モデルに分化。中国批判勢力のシナリオ。やや現実離れの見方。
- ・ 結局、独裁は続く: 一種の北朝鮮モデル。長期間続く可能性は低い。

アメリカと中国はそれぞれ軍事衝突を起こそうとする意図は低いですが、それでも誤解や誤算によってサイバー空間や宇宙空間での先制攻撃が発生する可能性はある。戦争や戦闘は起こりうるが中国の敗北で、短期間で終わる。

衝突後の中国の結末に関する予測。

- 中国統一
 - ・ 独裁温存シナリオ(共産党独裁モデル)
 - ・ サブ: 覇権争いに中国が勝利。第一列島船が境界線に。実現性は低い。
 - ・ サブ: 引き分け・敗北。ほぼ現状維持。情報コントロールができるか。
 - ・ サブ: 政治責任をとり新たな強硬な独裁。可能性はあまり高くない。
 - ・ 民主化定着シナリオ(米国主導の民主化、中国超大国モデル)
 - ・ 中産階級が民主化の担い手になる。党内民主制。香港・台湾・米国の中華系主導。世界最大の民主国家。日本はアジアに周辺に、アセアンは中国南部経済圏に吸収。これは実現不可能。
 - ・ 民主化失敗と再独裁化シナリオ(ロシアのプーチンモデル)
 - ・ 最終的に少数政治エリートによるメリトクラシーに回帰。可能性は十分にある。
- 中国分裂
 - ・ 民主化定着シナリオ(資源のない中華共和国モデル)。円満に分裂。実現可能性に懐疑的。
 - ・ 漢族国家と少数民族の高度自治・国家樹立。人口が少なく資源豊富な内陸と人口は多いが資源の少ない漢族国家。
 - ・ 北京・上海・広東などを首都とする複数の漢族中心国家群。
 - ・ 分裂中小国家群の連邦、国家連合。
 - ・ 民主化失敗と再独裁化シナリオ(ロシアのプーチンモデル)。民主化成功シナリオよりは実現可能性は高い。
 - ・ 北京中心の漢族国家と少数民族国家。
 - ・ 複数の漢族中心国家群。
 - ・ 分裂した中小国家群の連邦、国家連合。
 - ・ 一部民主化と一部独裁の並列シナリオ(民主と独裁の並列モデル)。混乱した状況。
 - ・ 中国漢族・少数民族完全分裂シナリオ(大混乱モデル)。春秋戦国時代に近

い。理論的可能性の一つ。ないとは言い切れない。カオス状態。

以上を踏まえて著者は現時点でもっとも可能性が高いのは、中国統一・独裁温存・現状維持のシナリオだとする。

仮に中国が敗北しても、内政上の悪影響を最小限に抑え、中国の統一と共産党の政治的権威をほぼ現状のまま維持するシナリオだ。当面共産党指導体制はゆるがないが、いずれ国内情勢は不安定化する。分裂する場合でも韓民族は一体、チベット、ウイグルなどは分裂。漢民族が分裂した場合、中国人民解放軍がその程度軍としての統一を維持できるか。特に核兵器保有の有無がカギとなる。

中国は外圧では変わらない。内側から変わるのを待つしかない。

「弱さ」「脆弱さ」「傷つきやすい」のが中国人。

以下まとめ。

- ・ もっと実現性の現状維持シナリオの場合は、中国共産党の指導体制は当面揺るがないが油断は禁物。日本は中国の国内情勢、一般庶民の動向に注目すべきだ。
- ・ 中国分裂の場合は、大陸と一定の距離を置く「島国同盟」を基本とすべきである。大陸の安定を維持し深入りをせず、共通の戦略的利益を有する国との同盟を維持し、貿易に活路を見出す同盟。アメリカはユーラシア大陸とのバランス・オブ・パワーを軸に、欧州はイギリス、アジアは日本と協力する戦略をとってきた。
- ・ 韓民族の分裂という最悪のシナリオの場合は、複数の漢民族国家と適切な関係を維持し、韓国(または統一朝鮮)を含む大陸での勢力均衡をはかるべきだ。

経済面では10年以内に中国経済は質的变化が起こりうる。

それに対処するにも日本経済はもう10年、活力を維持していることが重要だ。

カザフスタンなど中露が関心を持つ中央アジアで思い切った投資や外交イニシアティブを進めること。

尖閣に中国が武力行使をして米軍が動かなければ、その時点で日米同盟は消滅する。中国の挑発の際は自衛隊自身が血を流す覚悟で立ち向かわず米国に戦ってくれと頼んだ時点で日米同盟は終わる。

日本が先に手を出さず、自衛隊が戦う覚悟を見せた場合には、アメリカは躊躇しつつも対日防衛義務を守るだろう。

普遍的価値と日本の伝統主義との折り合いをつけることができるのは、日本の「保守」だ。保守主義を進化させなければならない。

宮家邦彦 「哀しき半島国家・韓国の結末」 (PHP研究所)

北東ユーラシアを地政学的に理解するためには、中華とコリア半島の上に位置する旧満州の理解が不可欠との観点から、コリア半島をめぐる近未来予測を行うことを意図した書。

嫌韓派が批判する時に使う事大主義とは、大に事えるという意味だ。大とは中国を意味している。

上位にある中国には侵略されてもしかたないが、下位の日本に侵略されるのには我慢ができない。

この安全保障政策の基本である事大主義的心情が日韓の関係を複雑化している。

面白いのは、北朝鮮はこの事大主義を批判している。北朝鮮の最も主要な政治思想は「主体思想」だが、その自主・自立は事大主義の克服を意味している。

この事大主義が「恨の文化」を生んだ。それは下位に置かれた不満の累積とその解消願望であるが、一方で憧れや悲哀や妄念などを表す半島独特の感情でもある。事大先は、中国、日本、アメリカと変わっていく。

朝鮮が「小中華」と自らを呼ぶことがあるが、これは同格であった旧満州の女真族が清朝を建てて以来、コリア半島こそが真の中華文明の後継者と考えて使った言葉なのだ。

さて、このような説明の後、前著「語られざる中国の結末」で述べている第二次東アジア戦争後の中国の変容と韓半島の動き、そして日本のとるべき戦略を語っている。

中華統一と中華分裂の二つのシナリオの中で、それぞれ北朝鮮崩壊がソフトランディングの場合とハードランディングの場合、そして金一族失脚するが北朝鮮存続、北朝鮮が南進する場合に分けて論じている。

著者のアジア政策の基本的考え方は「島国同盟」だ。

それは、大陸のバランス・オブ・パワーを維持すること。大陸の諸問題に深入りしない。海上交通路を確保し貿易を奨励する。これはイギリスの戦略だが、日本も地政学的には同じ戦略をとるべきだという考え方だ

アメリカは大ユーラシア大陸の欧州地域ではイギリス、アジア地域では日本との同盟という大戦略でやってきたと言える。

いくつもの理論的に考えうるシナリオを検討した結果、著者は次のように結論を導いている。

日本にとって最善のシナリオは、中華地域の非強大化、旧満州地方の安定、コリアの統一・安定・繁栄、以上によって北東ユーラシア地域でのバランス・オブ・パワーを確実にすることだ。

一方最悪のシナリオは、中華地域が統一・強大化、旧満州地域やコリア半島、台湾、そして東シナ海、南シナ海などの現状を、変更脛句自己主張を強め、既存の秩序に

挑戦することだ。

最も蓋然性が高いシナリオは、北朝鮮という緩衝地帯を維持するために、金一族を除いて北朝鮮を守ろうとすることだ。崩壊前に内政に手を突っ込むことになる。

韓国は冷戦時の枠組みである日米韓連携ではなく、伝統的な対中華の冊封関係となった可能性がある。

以下、民族性に関わる言葉をピックアップ。

- ・ 正気を失うほど激しく怒る。
- ・ 自分の感情をコントロールする術を知らない。
- ・ 狭量、千篇一律、自惚れ、横柄、自尊心、利己的個人主義

嶋聡「孫正義の参謀」(東洋経済出版社)

2005年から2014年まで8年間・3000日に及びソフトバンクの社長室長をつとめた参謀からみた孫正義の軌跡を描いた書。

2005年の郵政選挙まで3期9年の議員(新進党・民主党)を小泉首相の郵政選挙で議席を失った後、著者はソフトバンクに入社する。

2005年度の売り上げは1.1兆円、営業利益は623億円(前年は254億円の赤字)だったが、2014年5月の決算発表では、ソフトバンクは売上高6.7兆円、営業利益は1兆円を超えた。日本経済史上ではNTT、トヨタ自動車に次いで3社目だ。

ボーダフォン買収、光の道、自然エネルギー、スプリント買収、、、。

中国古典に精通した戦略眼と松下政経塾出身者の広大なネットワークによる著者のソフトバンクへの貢献が語られる。孫正義という事業家の肉声と素顔が見える書であると同時に、プロジェクトマネジメントの書でもある。

以下、孫正義の言葉から。

- ・ 時間を買う。
- ・ 10年以内にNTTドコモさんを抜きます。(2006年5月)
- ・ 倒れそうだったらどうすれ自転車が倒れないか教えてやる。もっと必死にペダルを漕いで、スピードを出せ。そうすれば倒れない。
- ・ 携帯電話を使ったインターネットを制するものがインターネットを制する。アジアを制するものが世界を制する。
- ・ 3%の経済成長路線に乗せれば、2040年の一人当たりGDPは1096万円で、世界一。
- ・ これが肝だ。
- ・ 日本だけで通用する技術をコツコツ作るのは「バカ」のやること。

ソフトバンク内部の反応が気にかかる。

2015年2月

吉村昭「海も暮れきる」(講談社文庫)

人生最後の8か月間を小豆島で過ごした自由律俳句の尾崎放哉に関する伝記小説。

鳥取県出身の放哉は秀才で一高に入学する。同級には安倍能成、小宮豊隆、藤村操、野上豊一郎、などがいて、一級上には後に面倒をかける荻原井泉水がいた。

東京帝国大学法学部に入って、酒を覚えてから生活は破たんしていく。この後の人生は酒との戦いになっていく。卒業後、東洋生命保険に入社し要職にも就くが酒で失敗する。朝鮮でも同じことが起り、日本で寺男になる。転落と漂泊の人生となるが最後に住んだのが小豆島だった。

ここでも人々の好意で何とか生活をするが、次第に体も衰弱していく。

ところが不思議なことに俳風は逆に鋭くなっていく。結局この地で200句以上を詠んでいる。

なにかたのしみで生きてゐるのかと問われて居る
咳をしてもひとり
いれものがない両手でうける
どっさり春の終りの雪ふり
はるの山のうしろからけむりが出だした

酒乞食という言葉があるが、放哉はまさにそれであったように思う。

酒癖が悪く、仕事をしくじり、夫婦も破たんし、貧窮にあえぎ、人の温情にすがって世話になることだけに気を使い、人生をすり減らしていく。

しかし、句境は深みを増して、小豆島に記念館まで建つことになった。

吉村昭らしく、綿密な取材と克明な心理描写の記述であるが、放哉を対象にしたのは不思議に思った。

吉村は20歳のあたりに肺疾患を患っていた。読書も負担がかかるので句集を読むことになった。病床で尾崎放哉に親しんだ。同じ病で死んでいった人に共感したのである。鬼気迫る心理描写は吉村の病気体験と死生観が源になったのだろう。

坪内稔典「一億人のための辞世の句」(展望社)

新聞で募集した辞世の句から選んだ庶民の句が並んでいる。

芭蕉は「昨日の発句は今日の辞世、今日の発句は明日の辞世、わが生涯いひすてし句は一句として辞世ならざるはなし」と言った。

しかし、この本は「正月に家族の写真を撮るように、辞世の句を作ろう」「楽しい辞世の句」という意図がある企画なのが面白い。ユーモア満載の句も多い。以下、少しピックアップ。

生涯は落葉の如し地に返る
裏もあり面もありて七十年
生も死も只春風のたなごころ
微笑んですむこと多し若葉風
原爆忌忘れぬことに未来あり
カンナ燃ゆ煩惱捨てて生きるべし
曲折もあれど悔いなき鉄線花
まいた種刈取る老いの鎌軽し
経不要臓はやらぬぞサヨウナラ
いつにても天寿と云わん落葉焚く
秋くればバッハを聴いて死ねばよし
夜の海深く深くと月を呑む
胎教の長崎の鐘鳴りやまず
わが墓はわが言葉なり鳥渡る

イケダハヤト「新世代努力論」(朝日新聞出版)

「努力」と「自己責任」を説くのは右肩上がりの恵まれた世代の特徴だ。

努力すれば報われる、頑張れば夢が叶う。それは古い考え方だ。

ブランド品や持家などは必要ない。普通の暮らしができればいい。

以上がこの本の主張だが、1986年生まれの著者は、都内、多摩を経て今は高知に移住している。

数年前に「年収 150 万円で僕らは自由に生きていく」という本を出しているが、現在は「土日をちゃんと休んで、午前 8 時から午後 5 時まで働いて年商 400-600 万円」という水準の稼ぎ方に着地しているとのことだ。着実に「自由」を広げているようだ。

以下、響いたキーワード。

「寿命 100 年以上の世界」(ソニア・アリソン)、下層ノマド、テクノロジー失業、雇用の総量の減少と二極化、創造的な仕事と肉体労働は残る、身の丈にあった収入、「プロ

グのネタ探し、ビジネスに役立つ情報収集、面白い人に実際に会う」、毎日2万字の文章、自己責任論は自業自得論、地味な幸せ、没頭の入り口、奥が深いブログ道、各地のおすすめ旅行計画、プロブロッガー、炎上保険、、、。

現代の若者が享受できる自由。

- ・ リバ邸:現代の駆け込み寺。安価なシェアハウス。旅行者は原則無料。LCCとリバ邸というインフラ。
- ・ ニコニコ動画とHulu:一生かかっても見切れないほどの映画を観賞。
- ・ Oculus Rift:バーチャルリアリティ端末。現実と見紛うほどリアルな映像を体験。
- ・ 電子書籍の定額制の登場。
- ・ Skype 英会話
- ・ MOOCs:オンラインで、無料で大学の講義動画を閲覧できるサービス。
- ・ ドットインストール:無料のスクール。
- ・ クラウドファンディングサイト
- ・ DRIVE:NPOを中心とした就職・転職情報サイト。
- ・ フローレンス
- ・ カタリバ
- ・ セカイラボ:ウェブサービスやスマホアプリをアジアの開発者に依頼できるアウトソーシング。
- ・ かものはしプロジェクト:途上国の貧困問題に取り組む。平均年収は450万円。

世代の違う若い人の本からは、学ぶことが多い。

伊集院静「無頼のススメ」(新潮新書)

無頼とは頼るものなしという覚悟のことだと喝破する著者が語る自立、独立独歩のすすめの本。

本人の言葉も面白いが、父や肉親の言葉、そして作家らしく古今東西の人の生き方に目を注いでいる。

- ・ チャーチルはヒトラーもスターリンも、会ってすぐに「ああ、この男は信用できない」と見切っている。
- ・ 今の若者には確かにかつての戦争の責任はない。しかし、戦争の真実を知り、再び戦争を繰り返さないことに関しては責任がある。(アウシュヴィッツ収容所のリーベヘンシェル所長)-
- ・ セックスとは、果てるたびに小さな死と出会うこと。(ジュルジュ・バタイユ)
- ・ 長く生きるというのは素晴らしいことなんだ。だけど長く生きるためには術(すべ)がいる。術をマスターしなくてはね。(色川武大)

- ・ 仕事というのは誰かの役にたつてこそ仕事なんだ。ばくち打ちは一から十まで自分だけで他人のことなどおかまいなし。そんなの仕事じゃないだろう。(車券師の名人の言葉)
- ・ ギャンブルは九勝六敗を狙え。(色川武大)
- ・ 二日や三日徹夜するぐらいなら誰でもできる。やっぱり、運だな。(佐治信忠)
- ・ 相手を恐れることはないが、練習をしないことに対しては恐怖を感じる。だから鍛錬し続ける。(内山高志:ボクシングの世界チャンピオンで8度の防衛)
- ・ 虚しく往きて実ちて帰る(空海)
- ・ 日本人は常に大勢に流れる(イザベラ・バード)
- ・ 父(13歳で朝鮮半島から日本にわたってきた)
 - ・ いいか、金で揺さぶられるな、金がないからといって誰かに揺さぶられるような人間になるな。
 - ・ 人に物乞いをしたら、もう廃人と同じだ。
 - ・ 軍人になると自ずと現れてくる本性を実際に目にして、日本人はいつかまた戦争を起こすだろう。その時、真っ先にお前たちは槍玉に挙げられる。根っこは簡単にはなくなる。日本人は必ずまた戦争を起こす。
- ・ 母が祖母から言われた言葉。
 - ・ 「男の人殺しが縄をかけられて連れ回されているときに、絶対に石を投げたりしてはいけない」。「身体を売るために町に立っている女の人に、パンパンとか夜鷹とか絶対に言うてはいけないし、子どもの口からも言わせてはいけない」。

伊集院静

- ・ 「美の旅人」(人の旅人)
- ・ 「怒りがわく」という心の在りよう。
- ・ 差し伸べている手の上にしかブドウは落ちてこない。
- ・ 運や流れを引き寄せるのに必要な心構え。うつむかない。後退しない。ウロウロする。
- ・ 何らかの「核」を持った人間が運を逃さず、作り続けた作品だけが時代を超えて残る。
- ・ 人間というのはカニみたいなもんだな。

城山三郎「少しだけ、無理をして生きる」(新潮文庫)

昭和2年生まれだった城山三郎の小説は読んできたが、エッセイもまたいい。以下、本文中に出てくる偉い人たちの言葉や行動をピックアップ。

伊藤整「いつも自分を少しだけ無理な状態の中に置くようにしなさい」
中山素平「箱から出なくちゃいけない」「人を選ぶ時には、なりたくない人を選ぶんだ」
広田弘毅「風車 風の吹くまま 昼寝かな」
水上達三「これは本物の人間かどうか」
田中正三「役人が来たからといって、「けしからん、けしからん」とワーツと言っちゃいけない。落ち着いて説明しなさい」
ドン・キホーテ「たしかに自分は狂っているかもしれない、だけど、自分はあるべき姿を求めているんだ。あるべき姿を求めない人間もまた、狂っているのではないか」
足利尊氏「、、乱酔の余といえども一座の工夫なさざれば眠らず」
井上準之助(米国滞在中、リンカーンやワシントンなど政治家のことを調べ、彼らの事績を訪ね歩いた。そこから変貌していく)
浜口雄幸「問題は最後の五分間だ。うんと踏ん張るべし」「終始一貫、純一無雑にして、一点の私心を交へないことである」

「雄気堂々」(渋沢栄一を描く): 吸収魔・建白魔。
「秀吉と武吉--目を上げれば海」(村上水軍を描く)
「ビジネスマンの父より息子への30通の手紙」(キングスレイ・ウオード): 準備・挑戦・信頼。
「毎日が日曜日」(蟻であり、トンボであり、人間である)
「随感録」(浜口雄幸)
「男子の本懐」(浜口雄幸を描く)

沢木耕太郎「敗れざる者たち」(文藝春秋)

「長距離ランナーの遺書」を読了。
東京オリンピックのマラソンで銅メダルを獲得した円谷幸吉の物語。
優れたノンフィクションだ。
最初は次の問いで始まる。
「長距離ランナーは、果たして「走れなくなった」からといって死ぬことができるのか？」
「円谷幸吉とその死の間にある亀裂をこの手で埋めてみたい、とぼくは思った」
最後は、次の問いで終わる。
「もし、アベベの足の状態を円谷が知ってたとしたら、円谷は果たして死んだであろうか、と。」

2015年3月

青山一郎「栄光と孤独の彼方へ 円谷幸吉物語」(ベースボール・マガジン社)

1968年に自殺した東京オリンピックマラソン銅メダルランナーの伝記。
努力、忍耐、重圧、体の不調、失恋、、、。

浅田次郎「日本の『運命』について語ろう」(幻冬舎)

浅田次郎の小説は比較的読んでいます。JALの機内誌のユーモアのあ
るエッセイも愛読しています。

浅田は3つのテーマで小説を書いている。

幕末、近代、そして中国の近代である。

その理由はきちんと教えてもらっていない近代以降の歴史が対象だ。

現在に近い歴史ほど大事だ。歴史を学ぶのは今を生きている自分の座標、つまり
立ち位置を知ることが必要だからだ。

私も同じ考えだが、高校は、日本史は選択科目になっているのには驚いている。自
国の歴史が選択とは、、、。

浅田次郎の小説は、多様なジャンルの、様々の時代を描いているようだが、自分自
身が知りたい対象である近代がテーマということなのだろう。それは自分の立ち位置の
確認作業であり、その研究成果を小説という形で読者に提示しているということになる。
同世代として、よく理解できる。

江戸時代は260年あまりにわたって戦争をしなかった。世界中で、有史以来、初め
てのことだ。この間に、制度、文化、習俗、考え方が熟成され、その果実が今も私たち
の基盤となっている。

同様に、第二次大戦後70年も戦争に巻き込まれていないことも珍しいことだ。

ということは、この1603年の江戸幕府の開府からの412年間で、対外戦争をした期
間は1894年の日清戦争からのわずか50年ほどになる。

このことも大事にしないとイケない。現在の私たちが踏み固めるべき歴史だ。

外山滋比古「知的生活習慣」(筑摩書房)

90歳を超えているが相変わらずの外山節を久しぶりに楽しんだ。

15年ほど前に幕張の市町村アカデミーのパーティでお会いしたことがある。

その時は知研の講師で来ていただいたことが話題になった。

この本のポイントは、知的生活習慣を身につけてよりすぐれた人間になることを志す
ことが新しい生き方だという考え方である。そして生活を失った教育に問題があると述

べている。

日記を毎日つけて、日々のゴミを出して壮快な毎日を送ろう。

図書館は本を読む場所というより、ものを書く場所として活用しよう。

メモ魔。ランチョンパーティ。夕方の食前の時間。共同生活が重要。

俳句は農村の詩であり川柳は都会の詩である。川柳には知性が必要。高齢者に向いている。

メイソン・カーリー著・金原瑞人・石田文子訳「天才たちの日課」(フィルムアート社)

「偉人たちは最高の仕事をするために、毎日同どう時間をやりくりしていたのか」という「問題意識の下に、彼らの日常生活(何時に寝て何時に食事をし、いつ仕事をしてきたか、)についての情報を集めて記したブログ「デイリー・ルーティーン」からこの本ができた。

作家、作曲家、画家という極め付きのクリエイターの日常が展望できる。

毎日が日曜日でもあるが、知的成果を生まんという志を持った人たちの姿だ。ここには墮落から逃れるヒントが満載である。

この本の副題が「クリエイティブな人々の必ずしもクリエイティブでない日々」とあるように天才たちの日常はバリエーションが多いのだが、共通項で目立つのは「散歩」をする人が多いということだ。散歩は体力とアイデアを生む。「朝型」がほとんどだった。また「昼寝」をするひとも多い。彼らの生活は、一様に「習慣的」だった。

ベーコン。ヴォーボワール。モーツアルト。ベートーベン。キルケゴール。ヴォルテール。フランクリン。ショパン。フローベル。ロートレック。トマスマン。マルクス。フロイト。ユング。マーラー。マチス。ヘミングウェイ。ミラー。村上春樹。カント。カフカ。ピカソ。サルトル。モーム。アームストロング。ロイドライト。ホップス。デカルト。ゲーテ。シラー・シューベルト。リスト。バルザック。ユーゴー。ディケンズ。ダーウィン。トルストイ。マークトエイン。ゴッホ。ルコルビュジェ。アインシュタイン。、、、。

こういうリストの中に日本の村上春樹が入っているのは素晴らしい。

村上春樹は長編小説を書くときは午前4時に起き、5、6時間ぶっとおしで仕事をする。午後はランニングか水泳。その後、雑用を片づけ、本を読み、音楽を聴き、午後9時に寝る。

この日課を毎日繰り返す。

タバコをやめ、酒の量を減らし、野菜と魚中心の食事に変えて、もう25年以上になる。

習慣の奴隷(ベーコン)。習慣の宝庫。

散歩派:ベートーベン。キルケゴール。フローベル。カント。ミルトン。シューベルト。ユーゴー。ダーウィン。トルストイ。チョコフスキー。

ベンジャミン・フランクリン「朝:今日はどんなよいことをしようか?」「夜:今日はどんなよいことをしたか?」。

コルビュジェ「45 分間の柔軟体操」

ヘンリー・ミラー「優れた洞察力が働く瞬間瞬間を維持するには、厳しく自己管理をして、規律ある生活を送らなければならない」

チャック・クロース「インスピレーションが湧いたら描くというにはアマチュアの考えで、僕らはただ時間になったら仕事に取りかかるだけ」

ピカソ「貧者のようでありながら、金はふんだんにある生活」

サーブ「非社交的な生活、だが高度にクリエイティブな生活」

ジョルジュ・シムノン:20 世紀のもっとも多作な作家の一人。生涯 425 冊の本を出版。几帳面な執筆機械と自分を呼んだ。

この本は毎日が日曜日になったときのバイブルになる。

竹内洋「革新幻想の戦後史」(中央公論新社)

546 ページの大著。

2011 年に出版されたこの労著は第 13 回読売・吉野作造賞を受賞している。

このところ「戦後 70 年」に関する本を読んでいるので、読んでみたのだが、素晴らしい内容だった。

1942 年生まれの竹内洋は 62 歳の時に、あるきっかけで「戦後史」に関心を持ち始める。

「自分史としての戦後史」という問題意識で、69 歳でこの本を完成させている。

物心がついた時からの経験したこと、感じたこと、思ったことの自分に関わることと、当時の社会問題と摺合せながら、戦後史を描こうと考えた。それはリアリティのある戦後史になるはずで、その内容を資料として提出しようという試みである。これが執筆の動機だ。

「社会科学における研究問題は、私的问题と公的问题の両者、個人生活史と歴史の両者を含み、それらのあいだの微妙な関係を含んで、はじめて正しく定式化される」というアメリカの社会学者ライト・ミルズの「社会学的想像力」にいうとおりである。

竹内は「左派にあらざればインテリにあらざ」という空気であった大学キャンパスの中をずっと生きてきた。

その通底するキーワードは「革新」であった。そして戦後を振り返るとそれは幻想であったと結論づける。

この本は「革新幻想」という視点から、戦後史をつづったものになった。まさに時代の

空気を描いた書物となっている。

この本を読み終わった今、私もこの本に寄り添って、自分と戦後との微妙な関係を考えてみたいと思う。

私の大学時代の一大トピックスは全共闘を主役とした大学紛争である。日本中を巻き込んだあの紛争は一体何だったのか。

すでにエリートではなくなりつつあった大衆知識人による大学知識人への怨望であると竹内はみている。

以下、ポイントを抜粋。

- ・ 憲法九条を支持する「悔恨共同体」を結成する近代知識人と、戦前日本を是とする感情共同体である「無念共同体」との確執。
- ・ 1955年以降に強まった1990年前後までの第二の戦後は、「花より団子」の時代だった。憲法改正と再軍備反対の空気は、現状維持という生活態度としての保守であり、「革新」という衣装をまとった保守であった。
- ・ 革新派雑誌「世界」、岩波知識人、清水幾太郎、日教組、平和教育、市民派サヨク、永井道雄、日教組を指導する東大教育学部、リベラルだが超俗的な京大教育学部、知識人の文化支配、旭ヶ丘中学事件と北小路昂・北小路敏、唐牛健太郎全学連委員長、西部邁書記長、皇国少年と平和民主少年、福田恒有存の屠蘇の杯批判、進歩的知識人の後裔はテレビのコメンテーター、丸山真男の在家仏教主義、「現代政治の思想と行動」、ノンセクトラジカル、小田実、ベ平和連、全共闘、高橋和己、柴田翔、ふつうの知識人、山本義隆、松下圭一、石阪洋次郎、大江健三郎、進歩主義教育の墮落、「テロルの決算」、「解ってたまるか!」、サルトル、、、。

竹内洋の結論、予期は次の通り。

変幻自在な「幻想としての大衆」という見えない権力の登場。オルテガのいう大衆人の登場。「慢心しきったおぼっちゃま」喫茶店の会話から得られた結論を実社会に強制する「日常当面する以上に考えない存在」「テレビ文化人の屹立」、、、、。それは想像された多数者による監視社会である。いまの日本は幻想としての大衆からの監視による「大衆幻想国家」だ。日本人の宗教や教養だった「日本人らしさ」の霧散のあとに「想像された大衆」が代位する。それは層としての中間インテリや中間エリートを欠いた、劣化した大衆的圧力による。

日本の衰退と没落は、パンとサーカスではなく、「幻想としての大衆」に引きずられ劣化する大衆社会によって起るであろう。

以下は、私の自分史とも重なる部分だ。

- ・ 1968年8月「読売新聞」の学士意識調査。大学生はエリートだと思いますか。「少しは思っている34.1%。思っていない59.3%」(国立大学)。大学生がエリート意識

をもてた最後の時期。確かに中途半端な気持ちでいた記憶がある。親の期待と現実のかい離に不満を持っており、自分の行先に不安を感じていた。

- ・ 季刊・中央公論「経営問題」(1962年)の登場。29歳でロンドン時代に書いた社内レポート「ロンドン空港労務事情」を名古屋大学の小池和男教授に送ったところ、中央公論に載せなさいと、この経営問題に紹介されて驚いた。編集長と会って社長から推薦をもらってくれるということになったが、最終的には深田祐介主宰の企業の課長クラスの座談会で紹介してもらった。日本的経営を現場から論じた論文という位置づけだった。足元を研究すると時代にテーマに遭遇するということを知って、それ以来真面目に仕事に取り組む決意をした。
- ・ 小田実には二度会ったことがある。1978年ロンドン勤務の時代にふらりと現れた。帰国基、30代のときに知研の関西セミナーで司会を務めたことがある。その講演後に、じっくりと話をしたことがある。「図解」について説明したところ、「それは大変なこっちゃな」と関心を持ってもらった。
- ・ 会社員や専門職、大学生で総合雑誌の読者であるような「ふつうの知識人」を考えることが日本の知識人の特徴の解き口になるという小田実の指摘。「日本の知識人」。大衆インテリ、中間知識人。知研で有名人の書斎を訪ねたり、インタビューをしたりというプロジェクトを熱心にやっていた30代半ばの頃、「知的実務家」という言葉をつくり、自分も経済の現場で見たことを普遍的な言葉で語りたいと志したことがある。知的実務家は、大衆インテリなどの流れの中にあっただということになる。
- ・ 三島由紀夫の自刃。1970年11月25日。豊饒の海。「日本はなくなって、その代わりに、無機質な、からっぽな、ニュートラルな、中間色の、富裕な、抜け目がない、或る経済的大国が極東の一角に残る」。三島由紀夫のファンであった私は三島のライフワーク「豊饒の海」四部作を読んでいて。三島事件の衝撃は今でも覚えている。
- ・ 1969年。大学の33%が授業停止一週間以上の紛争状態になった。私が九大に入学した時は、まず入学試験会場が学士たちに襲われ、予備校で受験ということになった。そして入学式の粉砕を叫ぶ学生たちが入学式会場に乱入した。私は怒りに震えて彼らを追い出す一群の群れの中にいた。5月には全学ストライキに突入、1年間ほとんど授業はなかった。
- ・ 「自分たちはまもなくサラリーマンになる。しかしその仕事は教授が言う女工たちの労働と大同小異ではないか」。「完全修飾の時代が「精神的には失業者」の時代として意識されていた」(1968年前後)。この感覚はわかる。当時は就職するということは体制に飲まれてしまうことだと思った。就職はしたくはなかったが、大学院に行くほどの勉強もしていないので、やむなく受かった企業に職を得たにすぎない面がある。一種の敗北感を感じていた。

- ・ ビジネス・インテリ。実務インテリ。1962 年が季刊「中央公論別冊「経営問題特集号」。経済の高度成長が旧満州にかわる何十ものフロンティアを国内にもったようなものである。実務インテリ、設計型知識人、現代的知識人。エコノミスト、システム・アナリスト、経営官僚。先に述べたようにせめて「知的実務家」たらんことを目指そうと思って仕事をしていた。
- ・ 1963 年「高校三年生」。青春の大衆化の始まりと共振。舟木一夫のこの曲はよく歌ったが、大学進学者が多くなって青春が大衆化した時期を象徴する歌だったのだ。
- ・ 1960 年代後半は日本社会の転換点。ホワイトカラーと販売・サービス業人口（40%）が農林漁業人口よりはるかに多くなった。私の大学時代は、1969 年から 1973 年であり、まさに日本経済の転換期にあったようだ。
- ・ 日本的経営ブーム。ロンドン空港労務事情 1977-1978 年。ロンドン空港勤務時代の 20 代の後半に日本的経営ブームの先駆けとして社内論文を書き、それが私の原体験となった。
- ・ 竹内洋との縁。竹内洋は、私の九大探検部時代の先輩である藤原勝紀先生から紹介された。もちろんこの碩学の本は何冊も読んでいたが、京都大学で行われたシンポジウムで一緒に、親しく話をすう機会があった。当時京大にいた竹内先生に私の人物記念館の旅に興味を持って頂いた。その後、野田一夫先生に紹介して欲しいということになって、赤坂で、3 人で食事をしたことがある。

自分の戦後の足跡を改めて時代との相関の中で整理する必要がある。

沢木耕太郎「敗れざる者たち」(文藝春秋)

円谷幸吉を描いた「長距離ランナーの遺書」はすでに読んでいたので、後の 5 編を読んだ。

「クレになれなかった男」は、「和製クレイ」と呼ばれたボクシングのカシアス内藤。恐る恐る相手を殴り、ためらいながらボクシングをする。天才の素質を持ったまた、天才になれなかった男。

「三人の三塁手」は、巨人で長島とライバルとなったバッター難波昭二郎と土屋正孝。

「イシヒカル、お前は走った！」は、日本ダービーを制する力を持ちながらそうなれなかった天才サラブレッド馬と騎手との物語。

「さらば、宝石」は、史上三番目に二千本安打を記録した榎本喜八。狂気と天才は紙一重、天才はいつも狂気と向かい合っている、危ない均衡の中を生きている。

「ドラムカー 酔いどれ」は、ボクシングチャンピオン・輪島功一。ボクシングの思想は、

stand and fight。踏みとどまって闘う。

「勝負の世界に何かを賭け、喪っていった者たち」というテーマを 5 年間追って書き続けた作品である。

主人公たちの名前は私の記憶の中にある者たちであり、彼らの残像を思いだしながらか読み進めることができた。

沢木耕太郎とは、ビジネスマン時代に広報マンとして一度会食したことがある。お互いまだ 40 代だった。

会社の広報誌に寄稿していただいたお礼の会だったと思う。

物静かだが、内に気迫を秘めた感じのナイスガイだった印象がある。

この「敗れざる者たち」は 1976 年に書かれているから、沢木は 20 代の後半の 5 年間を使って、じっくりと青春を駆け抜けた人々を追っている。

2013 年に話題となった「キャパの十字架」は読んだが、1979 年に大宅賞をとった「テロルの決算」、新田次郎賞をとった「一瞬の夏」などの作品を手にした。

沢木耕太郎はノンフィクションの新しい方法論を模索しながら、着実に進化を重ねているようだ。

宇沢弘文「社会的共通資本」(岩波書店)

話題になった社会的今共通資本とは、自然環境、社会的インフラ、制度資本の 3 つ。制度資本は、教育、医療、金融、司法、行政などをさす。

日本の学校教育の現場の荒廃は、教育というもつとも大事な社会的共通資本を官僚的に管理したり、反社会的な考えにもとづいて粗末に取り扱ってきた結果として起こってきたものだ。このような論法で、経済学の碩学・宇沢弘文は、社会を切っていく。

有名な宇沢理論の概要を知ることができた。

以下、宇沢弘文(1928-2014 年)の主張。

- ・ 農の営みは重要であり、農村は社会的共通資本と考えるべきである。専業農家への所得補償をすべきだ。
- ・ 都市については、ル・コルビュジェの「輝ける都市」は人間は主体性を持たないロボットに過ぎないとして反対する。それに対して「最適都市」という概念を提唱する。
- ・ 自動車の社会的費用: 需要調整のために価格に社会的費用に見合う額を賦課金として上乗せする。公害と環境破壊に伴う社会的費用を計測すべきである。
- ・ ル・コルビュジェに反対したジェイコブスの考え: 街路の幅を狭くして曲らせる。古い建物を残す開発。都市の各地区は二つ以上の機能を持たせる。人口密度を高く計画する。歩くことが前提。舗道と車道の分離。

- ・ 学校教育:能力を育てることと人格的諸条件を身につけるのが教育の役割。出発点は言語と数学。読み書き算盤。アメリカの平等主義的な教育制度は、矛盾、不平等を拡大再生産した。大学の運営も利潤追求の下に置かれた。大学は、第一は研究、教育は副次的。大学という聖なる素書記がビジネスマンという俗世界によって管理・運営されるようになった。自主性の確保が重要な課題だ。日本は第二臨調を契機として教育の効率化を推進するようになった。大学の自由の全面的喪失という結果になるのではないかと恐れる。
- ・ 医療:経済を医療に合わせるのが社会的共通資本の考え方だ。日本は医療最適性と経営的最適性のかい離。需要面からは優れている。独立採算の原則は妥当ではない。

伊東豊雄「あの日からの建築」(集英社)

「あの日」とは言うまでもなく、2011年3月11日である。

あの日を境に多くの人々の人生と抱えたテーマが変わった。建築家も同様だ。

「建築家として、被災地にたいして何が可能なのか」という問いかけをした伊東豊雄という建築家の3・11以降の動きがわかる。

大学で教職につかないことに決めている著者は、私塾「伊東建築塾」を2011年に立ち上げている。

自分自身の建築教育をやってみたいと念じていた伊東は「今治市伊東建築ミュージアム」をオープンさせ、同時に東京でも「伊東建築塾」をスタートさせている。

私の仙台時代に伊東設計の「せんだいメディアテーク」がオープンした。その後、あるシンポジウムで伊東の設計思想や衆知を集める真摯な態度に感心したことがある。その建物もいくつか損傷を受け、再オープンまで1年以上かかっている。

合掌造りからヒントを得た斜面住居。防潮堤を利用したラグビースタジアム。みんなの家、、、。

建築家は経済と資本の可視化の技術者として道具になり下がっていると伊東はいう。

アートでもない、何か社会が共有しうる原理が必要であり、その原理を求める旅をしている。

その発見はチームによってではなく、個人によるものであるという。

その答えの第一歩となる本だ。

2015年4月

森村誠一「祈りの証明—3・11の奇跡」(角川書店)

「野生時代」の2012年4月から2013年4月号まで掲載された連載を加筆・修正した書物。

社会派推理小説の大家となった森村誠一が東日本大震災の1年後から描き始めた渾身の作品だ。

戦場カメラマンの中年男性を主人公に、その青春と3・11以降の日々をだぶらせながら描いている。

大震災、被災地の人々、原発という凶敵、電力企業を中心とする体制、被災地巡礼、新興宗教の跋扈、権力と宗教の癒着、などの道具立てで日本の今を描く鎮魂の力作。

森村が手掛けている、写真と俳句を合わせた「写俳」を効果的に使って、現代の問題を描く手法はさすがである。

非情、鬼、生存と生活、救済、原爆と同根の原発、飼いならせない猛獣、制御不能の化けもの、原発ジプシー、悲話と美談、改易流行が実態のマスメディア、人間性が濃縮する天災と希薄になる戦場、避難所巡礼、尊い臭気、行脚僧、ヘドロの海に向かったの読経、号泣作戦。指導力と復興に向ける姿勢。祈りは他人そして自分に捧げる、孤独死より自殺力、グリーンケア、人生の縮図、災害文化、、、。

- ・ 社会への始発駅には人生の全方位に向かう列車が勢揃いして、新卒の乗客たちを待っている。終着駅は楽園か、極地か、永久凍土か、不明である。全方位に向かい分かれる人生列車には同時に無限の可能性が詰まっている。青春とは未知数の多いことである。
- ・ 無限の可能性に満ちている行先不明列車の乗車券を放棄するには野心が強すぎた、、、。
- ・ 最先端を追う職業は、最先端にいることが安心立命である。

夫焼く茶毘の炎で暖をとる
救出の順位選んで我は鬼
寒昂たれも誰かのただひとり
火の海に漂流しつつ生きており
敗れざる鉄の遺骨や供花まみれ
生き残り松の命に雪が舞う
炎天下原発無用の座禅僧
被災地をまっすぐ照らす月明かり

七夕やママが欲しいと被災孤児

写欲。写材。写俳。画俳。句会。句境、、、。

大村はま「新編・教えるということ」(筑摩書房)

昨日頼んだ大村はま(1906年-2005年)関係の本が数冊届いたので、風呂に入りながらまず一冊読んだ。

国語科教師として生涯を貫き、数多くのユニークな実践指導を重ね、主宰した「大村国語教室」では、子供たちだけでなく、後輩の教師や研究者、そして親にも貴重な刺激を与え続けた教育者の講演録。

教師のあり方についての言葉がいい。つい忘れそうになる仕事の本道を思い起こさせてくれる。

- ・ 最高の自分でなければならない。研究し、勉強の苦しみと喜びを日々感じ、自分を伸ばしたいという希望があふれていること。是が教師の資格。
- ・ ほんとうはエリザベス・サンダーす・ホームの沢田美喜さんのような仕事をしたかった。
- ・ 自分の本職たる「教える」ことがすぐれた技術、特殊技術になっていなければならない。
- ・ 見方を深くするというためには、教師自身が身を挺した実物を見せなければならない。
- ・ ぬかるみで苦勞している車にちょっと指で触れるとすとぬかるみからぬけてからからと車がすすんでいく。これが一級の教師。
- ・ 次の社会への希望をつないで、そこに生きがいを認め、そこを生き切る人をつくる。
- ・ ひとりひとりが自分の成長を実感しながら、内からの励ましに力づけられながら、それぞれが学習という生活を営む、そういう状態。すべての生徒がそれぞれ成長しているという実感、快感。

作文教育。大村はまの作文教育は、私の図解教育と同じ思想だった。

- ・ 段落。中心。つながり。自分の発見。自ら生み出したもの。区分け。関連を考える。構成力。関係、順序。

村山富一・佐高信「『村山談話』とは何か」(角川書店)

村山富市(1924年生、大分県生まれ)は、経歴だけをながめると、市議、県議、国会

議員、予算委員会、国会対策委員長、総理大臣と順調に志をとげてきたように見える。しかし、自分から手を挙げたことは一度もない。

国会の仕事では、「約束したことは守る。言ってはならないことは言わない」という信義を重視し、「密室の国体政治はやめる」という原則を貫きながら誠実に仕事をしていく。

人生の節目に、不思議と役回りを巡ってきて、断り続けるのだが、周囲の情勢がそれを許さない。結果として、無欲のまま、自民党からかつがれて社会党委員長として首班となる。「人生には巡り合わせがある」と強く感じる人生だ。この運命がやってきた時には、そこから逃げないで、真っ向から取り組んで、乗り越えていく。

尋常小学校、高等小学校を終了し、働きながら、東京市立商業学校夜間部、明治大学専門部政治経済学科夜間部、そして明治大学専門部政治経済学科昼間部への転部という学校歴をみると、この人の言動を人間として信用できる気がしてくる。

村山は昭和 19 年に召集される。

「みんな木銃を使って訓練していた。剣がないために五人に一人、小刀が支給された。軍靴の代わりに地下足袋、飯ごうの代わりに竹の皮十枚、水筒の代わりに竹筒が配られた」と語っている。

敗戦間近の軍隊の中身を知りまた不合理な軍のありかたに触れて、戦争に疑問を持った。

総理になったのは天命。

「護憲・反安保・自衛隊違憲」などを主張していた社会党の党是を時代の流れを見ながら転回させる好機だと思って、政策転換を行った。

以下の考えを聞くと、今もっとも必要な考え方だと思う。この人はやはり相当な人物だ。

- ・ 人間のすることだから、自分にもできる。
- ・ 私心を捨てて職に専念するしかない。職をまっとうするしかない。腹を決めてやるしかない、自分を捨ててやるだけだ。捨身の強さに徹するしかない。
- ・ 単独政権よりも連立政権のほうがベター。プロセスが明らかになる。
- ・ 集団的自衛権の足を踏み込ませることは、絶対にさせてはいけない。
- ・ 戦前がまさにそうでした。この程度のことは、と見過ごしてきた小さな穴が、手がつけられない大きな穴になり、無謀な戦争に突入することになった。その間違いを繰り返してはいけません。なし崩し的に自衛隊を海外に出していくことは許されない。
- ・ 沖縄の基地の問題は日本全体のもんだだと受け止めて対応すべき、、、沖縄県民が担ってきた重荷、苦渋は、日本国民全体が引き受けるべきです。
- ・ アジアと日本のこれからを考えた場合、今のようにアメリカだけに頼っていたのでは、日本は孤立するのではないかと心配です。

以下、村山首相の回顧。

- ・ 戦後五十年目にけじめをつけて、新しい日本の進む方向を示し、中国や韓国、アジアの国々の信頼を回復するために、内閣として出した、。
- ・ 「侵略的行為」と「侵略行為」と「侵略戦争」という議論。「侵略によって」におさまった。
- ・ 橋本龍太郎通産相は、文案の「終戦」を「敗戦」という指摘。
- ・ 戦後五十年の区切りの談話を発表し、使命がすんだら、内閣は終わってもいいという腹づもりだった、
- ・ 「談話」でけじめがついて、あとの走路は「継承」と明言した。アジアの国々とはそこから先の話し合いができるようになった。

その後、10 年たって小泉首相は「村山談話」を踏襲した「小泉談話」を発表した。以下、全文。

小泉談話。戦後六十周年。2005 年。

私は、終戦 60 年を迎えるに当たり、改めて今私たちが享受している平和と繁栄は、戦争によって心ならずも命を落とされた多くの方々の尊い犠牲の上にあることに思いを致し、二度と我が国が戦争への道を歩んではならないとの決意を新たにします。

先の大戦では、300 万余の同胞が、祖国を思い、家族を案じつつ戦場に散り、戦禍に倒れ、あるいは、戦後遠い異郷の地に亡くなられています。

また、我が国は、かつて植民地支配と侵略によって、多くの国々、とりわけアジア諸国の人々に対して多大の損害と苦痛を与えました。こうした歴史の事実を謙虚に受け止め、改めて痛切な反省と心からのお詫(わ)びの気持ちを表明するとともに、先の大戦における内外のすべての犠牲者に謹んで哀悼の意を表します。悲惨な戦争の教訓を風化させず、二度と戦火を交えることなく世界の平和と繁栄に貢献していく決意です。

戦後我が国は、国民の不断の努力と多くの国々の支援により廃墟(はいきよ)から立ち上がり、サンフランシスコ平和条約を受け入れて国際社会への復帰の第一歩を踏み出しました。いかなる問題も武力によらず平和的に解決するとの立場を貫き、ODA や国連平和維持活動などを通じて世界の平和と繁栄のため物的・人的両面から積極的に貢献してまいりました。

我が国の戦後の歴史は、まさに戦争への反省を行動で示した平和の 60 年でありま

す。

我が国にあっては、戦後生まれの世代が人口の 7 割を超えています。日本国民は

ひとしく、自らの体験や平和を志向する教育を通じて、国際平和を心から希求しています。今世界各地で青年海外協力隊などの多くの日本人が平和と人道支援のために活躍し、現地の人々から信頼と高い評価を受けています。また、アジア諸国との間でもかつてないほど経済、文化等幅広い分野での交流が深まっています。とりわけ一衣帯水の間にある中国や韓国をはじめとするアジア諸国とは、ともに手を携えてこの地域の平和を維持し、発展を目指すことが必要だと考えます。過去を直視して、歴史を正しく認識し、アジア諸国との相互理解と信頼に基づいた未来志向の協力関係を構築していきたいと考えています。

国際社会は今、途上国の開発や貧困の克服、地球環境の保全、大量破壊兵器不拡散、テロの防止・根絶などかつては想像もできなかったような複雑かつ困難な課題に直面しています。我が国は、世界平和に貢献するために、不戦の誓いを堅持し、唯一の被爆国としての体験や戦後 60 年の歩みを踏まえ、国際社会の責任ある一員としての役割を積極的に果たしていく考えです。

戦後 60 年という節目のこの年に、平和を愛する我が国は、志を同じくするすべての国々とともに人類全体の平和と繁栄を実現するため全力を尽くすことを改めて表明いたします。

この二つの総理談話と、今後出る戦後 70 周年の「安倍談話」を材料とした授業を組み、じっくりと考えてみたい。

薬師寺克行「村山富市回顧録」(岩波書店)

2012 年刊行。米寿をきっかけに回顧録を出版することにした。

- ・ 戦後、半世紀以上も経ってしままだにこれだけの米軍基地が日本に必要なのかとも思う。
- ・ 辞める時は一人で決める意外にない。
- ・ 党を変えるチャンスだと思って政策を変えた。
- ・ 2009 年の総選挙。自民党があまりにひどかったから政権が民主党に移ったんだ、だけど誕生した民主党政権はだめだったなあ。その最大の原因は、やはり官僚機構という生きている組織を活用できなかったことだ。
- ・ 迷いがあるまま突っ込んでいったらケガが大きい。

公文公「やってみよう一子供の知的可能性を追求して」(くもん出版)

世界最大の民間教育団体を率いた公文公。真の教育を考える書。

- ・ この算数教育は必ず世界に理解され、子供たちのためになる方法として流行する

日もそう遠くないと思います。ぼくはこの仕事は、子供のためになる貴い仕事だと考えているのです。

- ・ 指導の方法や要領を徹底する。教室運営の問題を指導者が相互に交換し合う場として、機関誌も毎月発行した。
- ・ 計算だけで十分なのです。正確に速く計算することができれば、応用問題も解けるようになる。
- ・ 「神童」が「才子」になり、やがて「ただの人」になるような教育の失敗、。
- ・ 悪いのは子供ではない。悪いのは教材であり、指導法であり、指導者なのだ。
- ・ 自学自習
- ・ 語学は歌から勉強を始めた方が、楽しくて単語も覚えやすい。

ヘミングウェイ「キリマンジェロの雪」(角川書店)

27 歳「陽はまた昇る」、30 歳「武器よさらば」、41 歳「誰がために鐘は鳴る」、53 歳「老人と海」などの世界的名作をものしたヘミングウェイは伝説に満ちた存在だ。61 歳で猟銃自殺を遂げるまでの波乱万丈の人生を送り、その体験をもとに多くの名作を発表した。

この作家の文体は「ハードボイルドスタイル」と呼ばれて、後の作家たちに大きな影響を与えた。では、ハードボイルドスタイルとは何か？

「非情のスタイル」

「修飾語を極度に削った文章」

「人間の行為を即物的に描いて、主人公の感動を説明する修飾語をほとんど使わない」

「抒情性を排した文体」

「修飾語よりも具体物のイメージにたよる簡潔非情な文体」

童門冬二「なぜ一流ほど歴史を学ぶのか」(青春新書)

軽い新書なので気安く拾い読み。

- ・ 飛耳長目。
- ・ 自分の歴史観。歴史の氷を溶かして、自分の生き方に役立たせる。自分が生きる道しるべ。同時代を生きるという実感。
- ・ 山川出版社「県の歴史」シリーズと「県の歴史散歩」シリーズ。イモヅル式歴史探究。
- ・ 自分の生き方を後押ししてくれるような知識を得て、パワーを得る。

- ・ 現役時代にやりたくてもやれなかったことに専念。
- ・ 新井白石は、歴史と経済。自伝「折たく柴の記」。
- ・ 海の果ては空と海がくっついている。天孫降臨は海の彼方からどこかの民族が船に乗ってやってきたのだ。それが空から下ったように見えた。
- ・ 起承転結。
- ・ 恕。相手の立場に立ってものを考えるやさしさと思いやり。

佐藤優「沖縄評論」(光文社)

佐藤優の本は、それぞれが独特の名著である。論旨は明快で揺るぎがなく、愛情を持って現実の解決に目の覚めるような具体策を示している。

琉球新報に毎週連載した「ウチナー評論」の2008年1月5日から、2010年3月6日までの評論を並べた本だ。この2年間は、自民党から民主党政権へと政権が移行した混乱期だった。

2015年の時点で読み返してみると、その見通しの正確さに驚く。それは本質を見つめる目と母の故郷である沖縄久米島の目が複眼となって対象をみているからだろう。

沖縄県民への提案。

- ・ 「琉球・沖縄史」を選択する学生を増やす仕組みを考えよ。
- ・ 沖縄の大学に国家公務員対策の特別コースを作り官庁に入れて10年後に戻って沖縄に貢献させよ。
- ・ 外交の文法体得のために外務省のカネで研修と実務を経験させて、沖縄に戻せばよい。
- ・ 今沖縄に必要とされるのは、正義闘争の魂を持った政治闘争だ。
- ・ 実情について、官僚の名前をあげて新聞に書くことだ。国会で問題になる可能性が出てくる。

辺野古移設問題へ対処する論理。

- ・ 沖縄とアイヌを加えた拡大ナショナリズム。拡大大和民族。
- ・ 沖縄人は境界線上の日本人であるので、常に自らのアイデンティティについて自問せざるをえない宿命を持つ。「日本人になる」という動的自己意識を持ち続ける。
- ・ 沖縄の基地負担に対する感情は臨界点にあり、移設を強行すると、沖縄の基地は住民の敵意に囲まれる。日米同盟の力が弱くなる。それはアメリカの国益に合致しない。
- ・ オバマ大統領の世界戦略からすると、米中国交正常化の流れの中で現行の米軍

再編計画は変更することになる。普天間飛行場の辺野古移設という発想は時代から取り残されている。

- ・ アメリカ海兵隊のグアム移転は協定(条約)。辺野古移設は政治的合意に過ぎないから拘束力はない。
- ・ 沖縄党。沖縄は、降伏はしない。沖縄学。

民主党政権。

- ・ 自民党が崩壊してできた真空を民主党議員が埋めているだけだ。マニフェストは絵に描いた餅だ。変化するが、変化の毛化kが良い方向に向かうか、悪い方向に向かうかは誰にもわからない。
- ・ 世論という川の両岸の堤にリークを重ねて川の水位を上げた。検察は「鳩山堤」を攻め、切れなかったので「小沢堤」を攻めた。これが決壊すれば民主党が解体するというシナリオだ。鳩山・小沢連合軍対特捜の戦い。どちらが勝利するか予断を許さない。鳩山小沢が負ければ、国民に選ばれた政治家ではなく日本は官僚が国家を支配することになる。そうすると辺野古移設が強行される可能性がきわめて高くなる。軍事官僚が占めた場所に検察がつく。小沢グループが勝利すれば、国民にとってはほんの少しだけマシになるかもしれない。外務官僚、防衛官僚の包囲網から鳩山総理を救いだし、沖縄と日本のためになる決断を求めよう。

沖縄関係書籍。

- ・ 大田昌秀・外間守善「沖縄健児隊」。
- ・ 大田昌秀「醜い日本人---日本の沖縄意識」
- ・ 仲原善中
- ・ 渡辺豪「アメとムチの構図 普天間移設の内幕」(沖縄タイムス社)
- ・ 大城立裕全集」(勉誠出版)
- ・ 大城立裕「内なる沖縄 その心と文化」(読売新聞社)(岩波現代文庫)
- ・ 総合雑誌「世界」。
- ・ 「汚名 第26代沖縄県千路 泉守紀」
- ・ 佐藤優「沖縄・久米島から日本国を読み解く」(小学館)
- ・ 池上永一「テンペスト」(角川書店)

その他。

- ・ 大杉栄「一犯罪、一語学」
- ・ 地球は球体であり、どの地点でも中心だ。
- ・ 外務省には沖縄大使がいる。
- ・ 四谷に55か国語を教える学校がある。

鳥越皓之「沖縄ハワイ移民一世の記録」(中央公論社)

2013 年現在早稲田大学教授の鳥越皓之の沖縄のハワイ移民についての書籍を 2 冊続けて読了した。1988 年に刊行された「沖縄ハワイ移民一世の記録」(中公新書)と 2013 年刊行の「琉球国の滅亡とハワイ移民」(吉川弘文館)だ。鳥越は沖縄生まれの大和人(ヤマトンチュウ)という立ち位置の人だ。

沖縄からのハワイ移民一世は辛酸をなめたが、第二次大戦で二世たちが欧州戦線でも勇敢な 442 連隊として大活躍し、死傷者 9468 人という犠牲を払ったことで、戦後に市民権を得るみちが開かれた。1988 年には日本人一世たちの強制収容が誤りであったとして謝罪と補償が決まり、日系人たちの戦後がようやく終了する。ハワイに向けて出稼ぎの移民が出たのは 1868 年の明治元年で、153 名の彼らは「元年者」と呼ばれた。

1885 年からの官約時代、1894 年から 1900 年までの私約時代、そして 1900 年から 1907 年までの自由時代がある。その自由時代の始まった 1900 年に沖縄移民 26 名がハワイに上陸した。1908 年からは排日運動の関係で呼び寄せ時代となる。1924 年に排日移民法が実施され移民の歴史は終わる。

「沖縄ハワイ移民一世の記録」では、琉球士族の出自を誇る人、聖書と資本論をバイブルに生きる人、ハワイ相撲からレスラーになり力道山の師匠となった人など数人のライフストーリーを取材している。一世たちの苦勞が克明に描かれている。

鳥越皓之「琉球国の滅亡とハワイ移民」(吉川弘文館)

25 年後に書かれた「琉球国の滅亡とハワイ移民」では、琉球国の誕生と滅亡、沖縄県御誕生と移民、そしてまた移民たちの生き方を描いている。琉球国は 1430 年ころに尚巴志が起こし、1609 年に薩摩藩が入り尚寧王が降伏し薩摩に連行され駿府で徳川家康と秀忠に謁見している。薩摩に制御された形で国は存続している。この間、琉球は中国にも朝貢していて日中両属となった。この近世琉球は 270 年続き、日本の廢藩置県によって 1879 年に滅亡した。450 年続いた王朝である。1892 年に奈良原繁が知事として 16 年間、沖縄の近代化を推進する。

国の滅亡は移民を生む。沖縄からの移民は 10 人に一人という高さだった。海洋民族として移民に抵抗が薄いという事情もあった。自由民権運動の流れの中で、移民の権利を勝ち取り、1900 年に実行される。移民たちは悪環境に耐えながら現地に溶け込み、1981 年にはジョージ有吉ハワイ州知事(日系、アジア系初の州知事。1926 年生れ。福岡県出身)が「沖縄文化週間」を制定するまでの評価が高まっている。

2015年1月には、沖縄県系の3世・デービッド・ユタカ・イゲ(57歳)が知事に就任した。現在沖縄県系は4万人おり、ハワイと沖縄は姉妹関係にある。イゲは「沖縄人として初めて米国の知事になることを誇りに思う。沖縄県とさまざまな面で協力していけることを楽しみにしている」と述べている。新しい沖縄・ハワイ関係が生まれるであろう。

鳥越は、沖縄独立論と道州制論を説明しており、沖縄世を前提とした道州制は実現性が高い論理であると述べている。沖縄とハワイの関係の発展がどうなるのか。沖縄は長い王国の歴史の中で、多くの地域との複雑な関係を持ちながらさまざまな知恵を身につけていると思う。どのような関係をつむいで、どのような姿を描くだろうか。

2015年5月

荻原哲雄「リーダーの言葉が届かない10の理由」(日本経済新聞出版社)

確かに組織のリーダーたちの発する言葉は、なかなか浸透するものではない。だから、多くの人を率いて業績を上げることは簡単ではない。凡庸なリーダーは、一生懸命に働くことによって、自己満足しながらその任期を中途半端な形で辞めていくことになる。この本は、そういったリーダーと彼を支えるスタッフたちに、現場とのコミュニケーションの取り方を平易な形で提示しようとする野心的な試みである。

- ・ まずビジョンを創り、語り、行うステージに10の問題が隠れている。
 - ・ 次にその壁を乗り越えるためには10のツボがある。
 - ・ 現場にビジョンを浸透させるために10の視座が必要である。
- そしてここから結束力を強化するための具体策に入る。
- ・ 「かけ声だけのスローガン」から「実践するビジョン」にするために6つのメソッドがある。
 - ・ 結束力を高めるためのアプローチ。
 - ・ 助け合えるフォーメーションのための7つの役割モデル。
 - ・ ビジョンを広げていくための展開イメージ。

以上、著者が20年以上のコンサルティングで獲得したこの本の主張のストーリーを、本書の中に提示してある図解を用いて示してみた。

読者は、こういったキーとなる図を見ながら、錬られたそして気迫のこもった本文を追うと良いだろう。バラバラにアトム化した職場を一つにまとめていくという、どの時代、どの組織も持つ課題を解く体系的な方法論として一つの回答となっていると思う。

大田昌秀・佐藤優「徹底討論 沖縄の未来」(芙蓉書房出版)

江戸時代の薩摩進攻から400年、明治の琉球処分から130年という節目の年である2010年に、米軍占領中にできた初の4年制大学・沖縄大学で行われた両者の講演と対談をもとにした本である。二人とも沖縄の久米島出身。

大田昌秀は沖縄県知事としてなじみのある方だが、今回その考え方を初めて知ることができた。

1925年生れ。沖縄師範学校在学中に沖縄戦を体験。早稲田大学を卒業し、ニューヨーク州シラキュース大学大学院で修士号取得。東大、ハワイ大、アリゾナ州立大で教授と研究をした後に、32歳から64歳まで琉球大学に奉職し、法文学長もつとめる。1990年から二期8年(65歳から73歳)、沖縄県知事として130万県民のリーダーとして活躍。2001年からの6年間(76歳から82歳)、参議院議員。現在は90歳になる。

第二次大戦の沖縄戦は、全人口の三分の一が命を失う一大悲劇だった。

大田は長い教育と政治の経験の中から、は軍事基地問題を解決しない限り、沖縄の明るい未来は切り拓くことは困難だと痛感している。米軍の公式記録にも「沖縄決戦は、第二次世界大戦を通じて最も激烈であり、最も損害(米軍)の多い戦闘であった」と記されている。この沖縄戦は、市民が盾となった戦争であり、地元住民は異民族的な扱いを受けており、1945年の3月の末から6月にかけて沖縄本島おその他の島でも集団自決が行われている。糸満市の荒崎海岸でのひめゆり学徒隊の自決はよく知られている。住民対策が行われていたなら犠牲者数は半減、あるいは3分の1に減らすことができたが、日本はそういう対策は全くしていなかったのである。

大田は「何故に沖縄だけが日本から分離されたか」という問題をずっと追っている。

米軍は北緯30度線で区切り、奄美大島は沖縄と切り離されて米軍占領下におかれた。それは大和民族と琉球民族との境目であり、方言も違うし、また生態系も異なるという理由だった。

本土防衛の「捨石」となった上に、日本は自らの独立と引き換えに沖縄を敵であった米軍の占領下に委ねてしまう。当時、天皇のメッセージも日本の安全のために沖縄を犠牲にという考え方があった。結果的に沖縄は米国でもなければ、日本でもないという宙ぶらりんな立場となる。

大田は、日本本土の「民主改革」は沖縄を米軍政下に置くことが前提で成立したものであり、その立場から日本の戦後を問わなければならないという。1968年の初めての公選による主席選挙では、ライシャワー大使が60万ドルのCIA資金を沖縄に送りこみ、革新系の屋良朝苗候補をつぶそうとした機密文書も発見しショックを受けている。この時、日本政府も80万ドルの選挙資金を沖縄に持ち込んでいる。

現在の沖縄はどうなっているか。

- ・ 近年、観光収入が基地収入を上回り、2倍以上になっている。観光で若者に人気

があるのがエコツーリズムで、大浦湾はそのメッカ。県の環境保護指針では「現状のまま保存すべき地域」も第一位。

- ・ 軍事基地収入は、外部から入る(観光、政府、)の5%ほどしかない。
- ・ 辺野古基地は5-7年で建設費用は7000億円と発表されているが、実際は違う。普天間にくらべ軍事力は20%増強され、空母35隻分の巨大基地になる。費用は1.5兆円。アメリカ国防総省によると、建設期間は10-12年以上。「運用年数40年、耐用年数200年」。このような基地ができれば沖縄は未来永劫に基地と同居することになる。沖縄に未来はなくなる。
- ・ 改憲されると戦後日本の民主主義は死滅する。
- ・ 軽々に対案を出してはならない。一部をパクられる。笑いものにする。
- ・ 沖縄海兵隊の演習を鈴木宗男議員は自身の選挙区・矢臼別に受け入れて1万票を減らしている。これは鈴木議員だけ。

大田昌秀氏は、ガンジーとキング牧師を尊敬し、折に触れて二人の本を愛読している。ライフワークである沖縄基地問題の解決のために参考になるのだろう。「改憲されると戦後日本の民主主義は死滅する」という大田昌秀氏の真摯な態度と表情は胸を打つ。

この講演・対談集を読んで、経済的自立をどう果たすかという構想が、最終的に基地問題を解決する糸口になるとの感じを持った。

ある雑誌を読んでいたら、著名な論客が次のように語っていた。沖縄問題の根はやはり深い。

「中国と対峙する沖縄の地政学的意味は一目瞭然。この基地を利用して沖縄の繁栄を策するのが沖縄のためだ。民主党政権の無責任で積み残した問題を、翁長知事はさらに無責任にこじらせる構図だ」

八木哲郎「19世紀の聖人 ハドソン・テラーとその時代」(キリスト教新聞社)

著者が25年の歳月をかけて調べ、完成させた書物である。60歳前から出発し、84歳の2015年に完成させている。

こういう労作は一気に読み終えるという読み方をすべきではない。

毎日、少しずつページをめくり、著者への敬意を込めて、時間をかけてじっくりとこのライフワークに向き合った。

読後の感想も、じっくりと書いていきたい。

主人公のハドソン・テラー(1832-1905年)はイギリス人の宣教師。

1854年に23歳で上海に上陸して51年間に中国全省とチベット、モンゴルまでキリストの福音を届けた。ハドソンの指導した内地会の最盛期には、中国に建てた教会は

1233 カ所、祈祷所 226 カ所、信徒 9 万人、宣教師 1326 人、運営する小学校 330 校、中学校 10 校、医院 16 カ所、診療所 17 カ所に及んだ。太平天国の乱、アヘン戦争、義和団の乱など激動期の中国に於ける最大の宣教会をつくりあげたのである。神を愛し、神に愛された男と言われた不撓不屈の人物である。

中国、台湾、香港、そして欧州では、このハドソン・テラーという人物は広く知られているが、日本では初の評伝である。構想から 25 年の歳月が経過している。

八木さんは、この本を書くことでキリスト教が理解できたと後書きで書いている。

ここではテラーの苦労話は割愛して、キリスト教についての部分を拾ってみたい。

- ・ 祈祷は神とのコミュニケーションである。祈りは神に自分の意思を届ける手段である。
- ・ 相手の反応には関係なくキリストの言葉を伝える。それを受け止めるかどうかは相手の問題である。
- ・ 宣教師は医学の知識を身に着けている。それを武器として布教していく。
- ・ 神との契約で行動している。確信犯。
- ・ 神に命じられて福音を伝えることが使命であり、国家の保護は必要ない。
- ・ 安全圏でのみ布教するのは偽者のクリスチャン。
- ・ ドナーが金を出すことは神の道にかなうことであり、宣教師がそれを受け取ることは神の恩寵を得ることだ。
- ・ もしわれわれがそこで餓死したとしても、それはわれわれの責任ではない、神の責任である。
- ・ 神がみずから行う事業である。だから絶対に成功する。
- ・ この国にキリストの教えを広めるためにまず中国人の牧師を数多く育てる。やがて彼らが彼ら自身の言葉で教会を運営する。われわれは忘れられても構わない。地の塩となって最初の手伝いをするだけだ。
- ・ 神が僕の中において僕は神の事業をしている。事業の過程でいろいろなことが起るだろうが、神はあらかじめ折り込み済みだ。気張らないでそれに従っておればいい。
- ・ 神の事業を行っているのだから、恐れることはない。神が守ってくださる。
- ・ 神は試練を与えてだめなものは去るようにしむけている。
- ・ 神が与える恩寵は常にまったくおもいがけないところから現れてくる。

ハドソン・テラーの偉大な事績は、神の存在に対する確信、神の事業を行っているという使命感があれば、想像を絶する困難にも打ち勝つことができるかもしれないということを教えてくれる。

八木さんとは 35 年間にわたってのお付き合いだが、さまざまの恩恵を受けてきた。ハドソン・テラーが 19 世紀の聖人なら、八木哲郎さんは現代の聖人である。

大久保潤・篠原章 「沖縄の不都合な真実」 (新潮新書)

日経新聞の元那覇支局長と評論家の共著。2015年1月20日発行。沖縄では琉球新報と沖縄タイムスの地元新聞で25万部と圧倒しており、日経は7000部、朝日は1500部という有様だからかどうかわからないが、著者の沖縄告発は利権を持っている政治家、建設、知識人、公務員には厳しい論調になっている。

沖縄の現実は一筋縄ではいかない、きわめて複雑であり、それを解きほぐす事を命題としている本だ。

140万県民の代表・新翁長知事の誕生は「沖縄VS日本」という構図を作り出したことで勝利した戦いであったとの視点で書かれている。それを沖縄ナショナリズム、沖縄民族主義と表現している。

日米政府の合意とは、1995年に発生した12歳の少女強姦事件がきっかけとなって、できたものだ。その内容は普天間を半分以下にして海兵隊基地キャンプシュワブ内の辺野古崎に移し一部を埋め立てて飛行場を建設するというものである。当時の大田昌秀知事が日本政府(橋本総理)とアメリカ(クリントン大統領)を相手に勝ち取った成果である。

直近の知事選で翁長氏が辺野古には飛行場を絶対につくらせないと公約を掲げて勝利し、現職であり沖縄の要求を上回る予算を獲得したばかりの仲井真氏を破ったのだ。「カネを落とせば沖縄はおさまる」という日本政府の沖縄政策にノーをいう知事があらわれたのである。

米軍基地は、本土77%、沖縄23%。米軍専用基地に限ると、本土26%、沖縄74%になる。基地の被害からみると、飛行場が問題で、沖縄は嘉手納、普天間の二つだが、関東には横田、硫黄島、厚木の基地が存在している。騒音は沖縄だけの問題ではない。

米軍は反戦・平和運動を弱めるために、被差別意識が「反日」に向かうように利用してきたという面もあり、このたびの沖縄県と安倍政権の間の騒動はそれが現実となったという印象を受ける。

沖縄振興策は、復帰以来10兆円に及んだが、公共施設、観光施設などに使われ、目立った産業をつくることはできなかった。そして高校大学進学率、学力水準、県民所得(東京の半分)、離婚率、生涯未婚率(男性22%)、できちゃった婚比率(38%)などは、沖縄は全国最下位という現実がある。

沖縄は公務員優位の階級社会であり、貧困の島であると著者は言う。

沖縄と日本の対立は、琉球大学OBで形成される県庁、経済界、マスコミなどの沖縄権力が日本権力に抗議している構図となっているのだそうだ。その沖縄権力を告発する書である。

もし海兵隊が縮小されても、次は自衛隊の誘致運動が盛んになるだろうというのが著者の見立てだ。

この本は沖縄の支配階級である沖縄権力の批判が主題である。その主張は、振興予算をやめることが基地問題の解決につながるということだ。

基地が減っても自立に向けた素材はそろっているから、沖縄はやっていけるとしているが、具体策は明らかにはしていない。

この本では「現在の沖縄」の内部事情が明らかにされている。

本土の視点でもなく、大江健三郎と筑紫哲也がいう被害者の沖縄の視点でもなく、琉球の歴史の視点でもない、今の沖縄の内部の実情がよくわかる本だった。

童門冬二「江戸の怪人たち」(童門冬二)

オーディオブック「江戸の怪人たち」(童門冬二)を読了。

鼠小僧次郎吉など江戸時代に活躍した怪人たち 18 人が登場。独特なキャラクターとパフォーマンスで世間を騒がせた人々だ。その行動はじつにユニーク。ときの政治を陰で操る権謀術数、喜々とした偽系図づくり、独自の理念を貫く熱烈行動、飄々と雲流のような生きかた、など。摩訶不思議な時空間の大江戸ならではの「怪人列伝」。

その 1「義人傑人自由人」の章をオーディオブック化したもの。歴史の表舞台には出てこない「怪人」達の素顔がわかる。3 時間半。

本日の帰りは森鷗外「高瀬舟」のオーディオブックも聴き終った。耳で名作を聴くのは心理的抵抗感もなくとてもいい。歩くことと相性がいい。次は何にしようか。

夜。

- ・ 21 時からBS朝日「昭和偉人伝」:佐藤栄作。沖縄を復帰させる宰相。知られざる返還の真相。最長期政権の秘密、、、。(佐藤栄作の初めて知るエピソードもあった。沖縄返還の努力は「佐藤栄作日記」でも読んだ。人間・佐藤栄作の実像を垣間見ることができてよかった)
- ・ 22 時から「歴史秘話ヒストリア」:開創 1200 年・高野山。天空の聖地の不思議。心に響く空海の名言。国宝の秘密。(高野山の訪問を考えたい)

森鷗外「高瀬舟」(新潮社)

オーディオブックで「高瀬舟」を読了。

森鷗外 「青年」—日本文学全集（池澤夏樹監修）13 卷」（河出書房新社）

日本文学全集（池澤夏樹監修）13 卷は「樋口一葉・夏目漱石・森鷗外」だ。
毎月送られてくる巻をできるだけ読むようにしている。

この巻のテーマは「青春」である。

一葉の「たけくらべ」、漱石の「三四郎」、鷗外の「青年」である。

「たけくらべ」は 1895 年（明治 28 年）、「三四郎」は 1908 年（明治 41 年）、「青年」は 1910 年（明治 43 年）だが、この 15 年間に明治社会の雰囲気はすっかり変わっていることがわかる。

また、鷗外の「青年」は、漱石の「三四郎」をモデルに書いたものだということが読んでいるとわかる。

今月は森鷗外「青年」を読了した。

「三四郎」と「青年」を読むと、明治の青年のういういしい姿が浮かび上がってくる。

「青年」の主人公の名は小泉純一というのが面白い。

金子兜太 「語る兜太——わが俳句人生」（黒田杏。岩波書店）

この本の中に、日航財団「地球歳時記」という項がでてくる。

日航がネットワークを生かして世界中の子どもの HAIKU（絵がついている）を 2 年毎の万博で披露する活動である。

この中に、「アララギ」の歌人の柴生田稔の長子、柴生田俊一という「異才、異能」の人が地球歳時記というコンセプトをまとめたと紹介されている。このプロジェクトに貢献した詩人のジャック・スタム、作家の江国滋、早稲田大の佐藤和夫さんらが紹介されている。彼らには私も接触していたから、金子兜太にも夜の俳人たちの会合で会っている気もする。今 95 歳であるから、その 25 年前のその時の兜太は、70 歳ということになる。

この柴生田さんは広報課長で私は部下として仕えていた時以来の大型プロジェクトである。「日航一の文化人」であった柴生田さんと私は気が合って実に楽しく仕事をした。私が後任となった後も、日航財団の主要プロジェクトとして続け成功した。一企業が日本文化をテーマとした活動を成功させたとして当時から評価が高かった。

柴生田さんと久しぶりに会おうか。

1919 年（大正 8 年）生まれの金子兜太は東京帝大を半年繰り上げ卒業し日本銀行に入社するが 3 日で退職。海軍主計官としてトラック島で戦い捕虜となる。この間、「戦争は絶対にいかん」という信念を持つようになる。復員後、28 歳で日本銀行に復職するが、反戦・平和という生き方から、日銀の古い体質の近代化をめざし労働組合活動を行う。

青年時代から俳句の活動に励み、1956年に現代俳句協会賞をもらい、翌年38歳では朝日新聞阪神版で選者になる。このあたりからは、日銀での昇進を捨てる。このため、福島(ヒラ)、神戸(係長)、長崎(課長)など地方支店を転々とさせられるが、この10年が俳句修行にはよかった。昼休みと夜を個人の仕事に当てた。日銀では最後は、窓際族などという甘いものではなく、「窓奥族」になる。金庫番である。日本一巨大な金庫の鍵を預かる仕事だ。

1974年、55歳で日銀を定年退職。その後は、俳句活動に専念する。それから40年、今や俳句界の大御所として日本の俳句史の中に存在している。

日銀30年弱、そして退職後40年だから、勤め人の時代より、退職後のライフワークに打ち込む時間の方がはるかに長いということになる。「毎日が日曜日」であるとか、余生であるとか言っている場合ではないということがわかる。

1950年(31歳か)からずっと日記をつけている。この本もこの膨大な日記を繰り返しながらインタビューを受けている。

1960年からは3年連用日記に毎日つけているから、この日記は実に65年に及んでいることになる。その日記が「今のオレの支えかな」。

「長生きをすると過去の時間の集積がすさまじい」という兜太は自他ともに認める記録魔である。

朝日俳壇もほぼ30年担当している。

長い俳句人生が続いているが、原体験は、戦争、冷や飯、金子抹殺の風潮の3つである。戦争で失った友人たちの死と戦争の悲惨さ体験による反戦、毎日過ごす職場での過酷な冷遇の日々、そして自分を抹殺しようとする俳壇への反発。こうやってみると兜太は反骨の人だと思えてくる。

- ・ 「俳句を作り、さまざまな人の俳句を選ぶという人生はその一日一日、いや一瞬一瞬に発見があります。好奇心が刺激され、一一刻一刻、毎日が新鮮なのです。」
- ・ 「よく眠って、すこやかに五感が動いて、ごく自然に浮かんでくる言葉や考えをありがたく、嬉しく享受する日々、それを重ねる。その日々をいきるってことです。」
- ・ 「無理しちゃいかん、絶対いかん。人間として自然に永らえる。これが大切なんです。」

「立禅」も参考になった。

- ・ 長年の間に亡くなった人で、自分にとって印象に残っている人たち、お世話になった人とかいろいろ、つまり私にとって大切な、特別な人たちですが、その名前をずうっと言っていくのです。今、二百人くらいになっているかな。
- ・ 自分の記憶、自分の人生そのものと重なっているから、個人的な立禅のほうが読経よりずっとインパクトが強い。

以下、目に留まった兜太の俳句から。

銀行員ら朝より蛍光す烏賊のごとく
二階に漱石一階に子規秋の蜂
痛風は青梅雨に棲む悪党なり
燕帰るわたしも帰る並みの家
芭蕉親し一茶は嬉し夜は長し
大根おろし御飯にかけて山暮し
酒止めようかどの本能と遊ぼうか

大江健三郎「沖縄ノート」(岩波新書)

45年前の1970年に初版が出ており、2013年9月現在で66刷りとなっているから、長い間にわたって読み続けられている古典的な本である。著書の大江健三郎は1935年生れだから、刊行時は35歳の若者である。すでに東大在学中に23歳で芥川賞を受賞している新進の作家であった。

1970年という年はいかなる年であったか。1969年には佐藤栄作総理と米国ニクソン大統領の会談で、米国が持っていた沖縄の施政権を日本への返還するとのが、合意がされる。その1年半後の1972年5月に米国民政府の解散、沖縄復帰関係3法の成立、琉球政府閉庁、そして沖縄開発庁の発足などが続き、沖縄は日本に返還される。

この日本中が騒然となった時期の出版である。

私の学生時代だから当時の雰囲気はよく覚えている。思えば、私は大学探検部員として1969年には奄美群島、1970年にはまだパスポートが必要だった沖縄の八重山群島に出かけている。沖縄・琉球の歴史には深い思いを持っていなかたことを恥じるばかりだ。

大江健三郎の問題意識は、沖縄に差別を強いて来た歴史と現状を土台に「日本人とはなにか」と問い直すことであった。1965年から始まった沖縄への旅、その途中で出会った沖縄の知識人、民衆などとの接触の中で、感じた、考えたことの表白である。

- ・ 嘉手納空軍基地近くには核兵器貯蔵庫がある。
- ・ 米原子力潜水艦に出入りによって那覇港には一次冷却水が放出され、コバルト60が蓄積された魚介類を食べることになる。
- ・ ベトナム戦争で米軍の使っているイベルリット毒ガスで、数百名の小学生が皮膚炎を起こした。
- ・ 致死性神経ガスがもれる事故があった。

このような事態を隠し、沖縄に押しつけてきた日本とは何か。大江は、日本人は、多様性を生き生きと維持する点において有能ではない属性をそなえていないのではないかという疑いを持つ。そして主権のない日本国民である沖縄の民衆にとって天皇とは何かという問いを發する。全島がむき出しになっている沖縄が核基地としての抑止力に大きな役割を持っているとすると、報復攻撃によって殲滅させられるべき者として米国や日本が把握しているということになる。沖縄は捨石として存在しているのではないか。

慶良間列島における日本軍により強制された集団自決、青年期に絶望的な敗戦を味わったために精神病が本土の 2.5 倍に達するという現実、、、。

日本には、いわゆる日本人と北のアイヌ民族と南の琉球民族との多民族国家であると考えるのが正しい。しかし日本には、日本中心の「中華思想」が根付いているという。具体的知識の欠如と、想像力の欠如によって、日本人は傲然と開き直ってしまうのである。

日本は1952年にはサンフランシスコ平和条約に調印して沖縄を切り離した。革新勢力が佐藤首訪米時に、核付きの返還にあたり、「本土の沖縄化」に反対するという言葉を使ったことがある。これなども本土の思い上がりだということだろう。「醜い日本人」という言葉が沖縄の知識人から發せられるのも、歴史的にはうなづける。知事をつとめた大田昌秀は「かつて醜く、現在醜く、未来にわたってなお醜くありつづけようとする日本人の本質」を提示している。

60年代の反米闘争と沖縄復帰闘争は、実質的には憲法の空洞化をめざす権力の執拗な動きとその成功をもたらしていると大江は言う。

このような日本人ではないところの日本人へと自分をかえることはできないか、そして憲法22条の国籍離脱の自由を知りながら、なお日本人でありつづけるじぶんにはどのような手だてがあるだろうかと締めくくっている。大江の長い戦いがそれから今日まで半世紀近く続いている。

森鷗外「高瀬舟」(集英社)

森鷗外「高瀬舟」をオーディオブックで読了。

黒田杏子「金子兜太養生訓」(白水社)

金子兜太が米寿を目前にした86歳のときのインタビュー本。「養生訓」と銘打っているだけあって、腹こすり、青竹踏み、睡眠前の深呼吸、立禅、体操、、、など具体的な記述が多い。

成り行きにまかせていたのでは長生きは難しいということで、金子兜太は「長寿への意志」をはっきりと持って生きていると言っている。現在は、その後 10 年たってまだ活躍しており、96 歳を迎えている怪老人だ。

意外なのは、俳句の世界にはほんとうに踏み込んだのは 60 代からだという。また、日記をほぼ毎日書くようになったのは 50 代半ばからで、数十年たって「私にとって日記が唯一の財産」となる。日記はやめないというより、やめられない。もう 40 年、癖になっている。

- ・ 座右の銘は、一茶の「荒凡夫」—自由で平凡な男。
- ・ 一茶の「天地大戯場」という言葉が好き。
- ・ 「定住漂泊」の系譜に自分はいる。定住して漂泊心を温めながら屹立していく。

兜太が師事しているのは、芭蕉翁ではなく小林一茶であり、近代では斎藤茂吉。

岡本かの子「老妓抄」(新潮社)

岡本かの子「老妓抄」—年々にわが悲しみは深くしていよよ華やぐ、、オーディブック「老妓抄」(岡本かの子)を読了。

老妓と呼ばれる老いた芸者の平出園子は、自分の人生に不満を感じていた。一途にのめり込んだことのない人生であった。不完全燃焼の人生、、、。

老妓はあるきっかけで、柚木という金儲けの野望を持つ若い青年の面倒を見ることになる。その青年の野望に魅力を感じて、その実現を応援してみようというのである。

やがて柚木は老妓に囲われた生活の中で墮落していき覇気が失せていく。そしてそのような自分に嫌気が差して逃げ出すようになるのだがその度に連れ戻すことを繰り返す。

冷静な老妓が最後にうろたえる場面には意外の思いが浮かぶ。老いた女の執着心を巧みに描く作品である。

最後の、主人公の短歌の意味を深く考えたい。

年々にわが悲しみは深くして いよよ華やぐいのちなりけり

2015 年 6 月

高良倉吉「琉球王国」(岩波新書)

沖繩史、あるいは現代の沖繩の全体像を描く場合に、最も希薄な部分は前近代史である。

それを解明するために、著者は資料と取り組むと同時に、沖縄の離島を訪ね歩いて人々から話を聴いている。

そし沖縄在住の歴史家として著書を著すだけでなく、書齋を出て活動を開始する。

その活動のおそらく最大のものは、首里城の復元への参加である。沖縄内外の人々が必ず訪れるであろう、琉球王国のシンボルである首里城の復元のアピール力は何物にも代えがたいという意識のもとに、そのプロジェクトにのめり込んでいった。

その合間に書いたのが、この「琉球王国」である。

- ・ 「沖縄学の父」伊波普修は、沖縄県立図書館長としての勤務の傍ら、沖縄の歴史と文化を解明する仕事に取り組んだ。「自覚しない存在は悲惨である」と伊波は語った。
- ・ 歴史を学ばない民族の未来は暗澹としているということであろう。
- ・ 1907年の京大経済学部の河上肇舌禍事件では、河上は沖縄の独自性を発揮せよとの論陣を張ったが、画一化を志向する沖縄のリーダーたちには響かなかった。日本は単一国家ではなく、沖縄という日本の中の異国を包含した日本の歴史の再構築が必要であると、著者は伊波の枢を担ごうとする。
- ・ 沖縄は、奄美、沖縄、先島(宮古・八重山)で構成される。
- ・ 14世紀に出現した三山(山北・中山・山南)を統一した中山の英雄・尚巴志は1429年に琉球王国を成立させる。中華帝国との冊封をこの琉球王国が担っていく。それはアジアの中の琉球という立ち位置になっていく。進貢国間のネットワークを用いて朝鮮、東南アジア諸国と活発な外交と貿易を展開した。王国の黄金時代を築いた尚真王は1526年に死去するまで50年間にわたって君臨する。この王は各地のグスク(城砦)に蟠踞する豪族を首里に集め中央集権体制を推進し官僚制を整備した。造宮事業も盛んに行っている。
- ・ 秀吉の朝鮮出兵への加担を拒否したが、家康は中国との関係修復の斡旋を求めたが、琉球は従わなかったため、1609年に家康の意向を受けた薩摩藩は兵3000を送り征服する(島津侵入事件)。この結果、奄美地域は薩摩の直轄領となった。その後も琉球王国は存続し、徳川将軍と薩摩藩に従属する一方で、中国との冊封体制も存続した。「幕藩制国家のなかの異国」となったのである。これ以降を近世琉球と呼ぶ。独立国家時代を「古琉球」と呼ぶ。
- ・ 琉球は1年1度の進貢と優遇された(ジャワは3年、日本は10年)。中国商品を大量に入手した琉球王国は、福州、広東、安南、ルソン、カンボジア、シャム、マラッカ、スマトラへと連なる海のシルクロードの拠点となって中継貿易で栄える。マラッカではインド洋、西アジア、地中海世界につながっていく。貿易は国王の経営する事業であり、首里城が司令塔となった。
- ・ 琉球史研究はアジア世界を念頭に置く必要があり、著者は琉球の海外貿易ゆかりの地を訪ね歩いている。

- ・ 1879年の明治政府の廃藩置県にもとづく「琉球処分」によって王国は崩壊し沖縄県が設置される。この事件は中国との間でのもめ事にもなっている。
- ・ 第二次大戦の敗北による連合軍の日本占領は、1951年のサンフランシスコ平和条約で終わる。しかし平和憲法下の本土と、アメリカ統治が継続した沖縄は異なった道を歩む。
- ・ 1972年には本土復帰が実現する。しかし米軍基地は狭い沖縄にほとんどが集中するという結果になった。
- ・ 伊波普猷は、琉球史の課題は日本民族の一支族が、異なった境遇に置かれて、どう変化したかを検討することにあると述べている。古琉球を含む琉球史の個性を取り込んだ新しい日本史像を描く必要があり、それを沖縄の側から提示すべきである。というのが著者の主張である。それは日本史だけでなく、東アジア史を豊かにする。

沖縄は経済的自立をどう獲得するかが現下の大きな課題であるが、貿易によってアジアとのネットワークを形成していた琉球王国の姿は大いに参考になる。「観光と貿易」がキーワードになるのではないだろうか。

長谷川智恵子「鴨居玲 死を見つめる男」(講談社)

久米信行「ピンで生きなさい」(ポプラ社)

先日、客員教授の橘川幸夫さんが旧知の久米信行さんを大学に伴って来られた。

NPO法人知的生産の技術研究会や、自分史フェスティバルなどで私も縁のある人である。

近著をいただいたので読んでみた。

経営者でもあるが、若い世代に人気の著書でもある。

「知性X感性X品性」「脳のパラボラカ」「人生の合鍵」「十人の師匠」などキーワードをあげながら、生き方を論じている。熱く、ためになるので、この本も若い人たちの心を打つであろう。

久米さんは、進化を続ける人である。

師匠にしている人の中に、多摩大初期の教授であった日下公人先生とともに、橘川幸夫さんが「磁力」というキーワードで5ページにわたって登場している。

若者たちに発信と交流の場を与え、若者たちの意見に耳を傾ける。そして思いもしない組み合わせで人と人を引き合わせる力を持つ人として紹介されている。だから多種多様な人材が集まってくる。その人間としての磁力が橘川さんの本業である「編集

力]を通じて、未来予見力となり情報発信力となって共感と共鳴の輪を形づくる。

久米さんは、学び続ける人である。

それから著者は「養生」というキーワードで自分を心身ともに律する生き方を選択している。

10 分間ストレッチ、NHKBSワールドニュース、自転車通勤、タッチタイプ、背もたれのないスツールやバランスボール、ストレッチポール、うつぶせ寝、、、などが気になった言葉だ。

久米さんは、工夫の人である。

地元の墨田区では、まち起こしの目玉として「北斎美術館」が来年には誕生する。

その設立のキーマンとなっているが、ここでは一日館長や面白いイベントなどの企画が練られているらしい。

こういう仕掛けは地域にとっても、久米さん自身にとっても、豊かな実りがあることを予感させる。

元気になるには、元気な人とつきあうのが一番だ。

夏目漱石「道草」(新潮社)

夏目漱石「道草」をオーディオブックで読了。

海外留学から帰って大学の教師になった主人公・健三は、長い時間をかけて完成する目的でいつ終わるとも知れない一大著作に取りかかっている。

その彼の前に、十五、六年前に縁が切れたはずの養父島田が現われ、金をせびる。

養父ばかりではなく、姉や兄、事業に失敗した妻お住の父までが、健三にまつわりつき、金銭問題で悩ませる。その上、夫婦はお互いを理解できずに暮している毎日を丹念に描いた作品だ。

主人公の設定は、海外留学、学者、妻との不和、体調の悪さ、、、など現実の漱石を思わせる。

漱石の細かい心理描写がよく書かれている。漱石の日常と心理状態を知る自伝として読むのがいいようだ。

次は「門」を聴きはじめた。

松島泰勝「琉球独立論—琉球民族のマニフェスト」(バジリコ)

衝撃の書である。

日本の中の一自治体の立場で米軍基地撤去を叫んでも解決はしない。

もし仮に米軍の撤去があっても日本の自衛隊が即時駐留する。

日本はアメリカとともに琉球を支配している。琉球は日米の植民地下にある。

戦後 10 兆円の振興開発資金が投下されたが失敗した。日本政府が琉球の手足を法制度で縛ったことが主因である。

もともと異なる民族であり、自己決定権を行使し、新しい政治的地位を獲得すべきである。

日本は主権国家ではない。自国内に他国の軍事基地が治外法権のかたちで存在する国は主権国家ではない。

原発やゴミと同様に、日本の一地域だけが基地を引き受ける道理はない。

以上の考えで、2013 年に「琉球民族総合研究学会」という琉球の独立を目指した学会が成立している。

近代以前の琉球王国のように、世界各地と人間や組織のネットワークで構成された琉球型グローバリズムの国を目指す。

その完全独立運動の骨子は以下の通り。

1. 独立への理解を深め、世論を喚起する。41 市町村に独立支持派議員を増やす。
2. 国連脱植民地化特別委員会の「非自治地域」のリストに琉球を登録する運動を展開する。県議会、市町村議会は登録を求める決議を採択する。ポリネシア(2011 年非自治地域リスト登録を決議)、ニューカレドニア(2014 年以降に住民投票)、グアムは独立を目指す住民投票実施(2015 年)。
3. 独立の可否を問う住民投票を国連の監視下で実施し、過半数を得たら独立を宣言し、国連に加盟申請する。自由連合国や自治州では米軍撤去はできない、完全独立しかない。議会を設置し、国家承認を世界に求めていく。パレスチナ。スコットランド。カタルーニャ。
4. 国連、非同盟諸国会議、太平洋諸島フォーラム、、、などを通じて琉球独立をサポートする国際的ネットワークを形成する。非武装国家・リヒテンシュタイン、同じくコスタリカ。独立した太平洋島諸国の大半は軍隊を持っていない。
5. 国際法に基づいて平和的に独立する。米軍、自衛隊の軍事介入を阻止する国際的支援体制を構築する。琉球在住の各民族には国籍を選択させる。
6. 40 万人以上のウチナンチューが世界各国で琉球を国家承認する運動を展開する。1979 年以降の政治的経済的被害への賠償金を請求する。

大城立裕「小説 琉球処分」(上) (講談社文庫)

「清国と薩摩藩に両属していた琉球—日本が明治の世となったため、薩摩藩の圧制から逃れられる希望を抱いていた。ところが、明治政府の大久保利通卿が断行した台

湾出兵など数々の施策は、琉球を完全に清から切り離し日本に組み入れるための布石であった。琉球と日本との不可思議な交渉が始まったのである。」

「琉球処分とはいったい何か？ 明治初期まで沖縄には、琉球王国という独自の国家があった。日本政府は軍事的圧力で琉球王国を解体した。これを琉球処分という。」

佐藤優は解説の中で「歴史書を読めば、琉球処分の経緯に関する知識を身につけることができる。しかし、知識だけでは、沖縄の人々の心情を理解することができない。そのためには優れた小説を読むことが有益だ」と語っている。この本がそれだ。

引き続き「下巻」を読み始める。

夏目漱石「門」(Kindle版)

夏目漱石「門」をオーディオブックで読了。

「野中宗助は親友安井の妻だったお米を奪った。二人の結婚生活は崖下の家でひっそりと続いている。安井が訪ねてくることを知った宗助は苦しみ、修業のために参禅に出かけるが門は開けてもらえず救済は得られない。」

次は三部作の「それから」を読むことにしよう。

石川文洋「フォト・ストーリー 沖縄の70年」(岩波新書)

この本は、写真もいいが、地図と年表もいい。

沖縄関連年表から。

1609年: 薩摩軍が琉球を占拠。以降 270年 薩摩の支配下。

1879年: 琉球藩を廃し沖縄県を置く(琉球処分)

1899年: 第一次ハワイ移民団 27人出発

1903年: 宮古・八重山の人頭税廃止

1945年: 3月23日米軍砲撃開始、4月1日米軍沖縄本島上陸、6月23日日本軍壊滅、9月7日嘉手納基地で降伏調印。

1950年: 米国民政府設置

1952年: サンフランシスコ講和条約により米国の施政権下に置かれる。琉球政府設置。

1953年: 奄美諸島、日本に復帰。

1964年: トンキン湾事件(魚雷攻撃を受けた報復として北ベトナムを爆撃。後にこの事件はアメリカのでっち上げと判明)

1965年: B52爆撃機、嘉手納飛行場からベトナムへ爆撃(サイレンを鳴らす救急車。補給物資の山。大破した戦車、)

1968年: B52爆撃機常駐化。初の主席公選で屋良朝苗当選。

- 1969年:2月4日のゼネスト中止。佐藤・ニクソン会談で72年の沖縄返還決まる。
- 1970年:コザ事件
- 1971年:沖縄返還協定批准反対ゼネスト。
- 1972年:沖縄の日本復帰。自衛隊が沖縄へ駐留。(復帰時の米軍基地は沖縄58.6%。97年74.9%。経済の基地依存率は復帰時15.6%、現在4.9%)
- 1975年:沖縄国際海洋博覧会。ベトナム戦争終結。
- 1978年:右側通行に変更
- 1990年:太田知事
- 1992年:首里城正殿復元
- 1995年:「平和の礎」完成。米兵3人による少女暴行事件。
- 1996年:普天間飛行場全面返還を発表(県内移設条件付き?)
- 1997年:政府、名護市辺野古のキャンプ・シュワブ沖に海上ヘリ基地建設を表明。
- 2000年:「琉球王国のグスク、」が世界遺産に登録。九州・沖縄サミット。
- 2003年:那覇空港-首里間にモノレール開通。
- 2004年:沖縄国際大学に米軍ヘリ墜落。
- 2013年:仲井間知事が名護市辺野古の埋め立てを承認
- 2014年:翁長知事が辺野古移設作業の停止を指示。
- ・ 集団自決は、実は肉親の手による「殺人」。-泣きながら子どもを殺す光景。アメリカ兵に殺されるよりはと、列をつくり次々と海に飛び込み自殺していく、。。」「妹と弟は母の手によって死にました」。
 - ・ 米兵の犯罪5801件(72年から2013年)。性的暴行事件の検挙1281人。
 - ・ オスプレイの欠陥は、不時着時の自動回転装置がついていないこと。
 - ・ 戦争が起こった時、軍港をともなった辺野古巨大基地は攻撃の口実と目標になり民間人に犠牲が生じる。

大城立裕「小説 琉球処分」(上・下) (講談社文庫)

著者は「カクテル・パーティ」で芥川賞を受賞した作家である。沖縄出身では初めての快挙。

この本は1968年に単行本として出版されたが、もともとは1959年から琉球新報に連載したものである。その連載に書き加えて、1968年に出版された。連載当時はあまり注目されなかったが、1972年の本土復帰の前後に読みなおされた。

1872年から1880年までの8年間の、沖縄が明治政府のもとで強制的に日本に組み込まれたプロセスを描いた物語だ。

歴史は事実の羅列だけでは、理解が不足する。その時代に生きた人々の吸った空気、ざわめき、憤り、友情、志、、などが記されていないからだ。

ここ数か月、沖縄関係の書籍を乱読しているが、この小説を読む中で、日本政府の要人たちと、対応した琉球の人々の人心とその息遣いを感じることができたように思う。これが小説というものの効用である。

琉球は、長い間、日本と中国の両方に属す両属国家であった。

処分官・松田道之はじめ明治の近代国家を建設中の日本政府の官僚たちは、長い琉球の歴史に敬意を払いながら、穏健に日本政府の中に組み込もうとする。大久保利通、伊藤博文などが松田の上司だ。

「内政に似てしからず、外交に似てしからず、微妙な国際的駆け引きのなかで、純情らしくあるいは老獪らしい琉球の人士を相手の心労」に時間をかける。

しかし中世のままの存在であった琉球との交渉の根気くらべに負けて、最後は、強硬策をとり、王(藩王)を上京させ華族に列させて、日本の中に組み入れてしまう。

この過程を克明に書きながら、歴史の転換期の当時の関係者の苦悩を描いている。

若い主人公は最後にこう思う。

「歴史を変えることはできない」といってしまうてはいけないのだ。たとい、こんな平凡な事務をとりながらでも、、疑う自由があるかぎり、まだなにかを生み出すことができないとは限らないのだから、、。

琉球と沖縄の人々の粘り強さ、忍耐強さ、我慢強さ、しぶとさを垣間見る思いがする。

沖縄出身の佐藤優は、解説の中で普天間問題は「平成の琉球処分」と沖縄は受け止めていると語っている。

「はねかえしてもはねかえしても寄せてくる」ような静かな抵抗を沖縄から受けるだろう。その抵抗が繰り返す中で、日本の国家統合が内側から崩れ出す、その課程が始まっていると警鐘を鳴らしている。

沖縄問題の根源に迫る名作である。

深川英雄「キャッチフレーズの戦後史」(岩波新書)

堤未果さんのインタビューをポッドキャストで聞き終えた。

前作の「沈みゆくアメリカ」のアメリカで進行する格差への問題意識と切り取り方に感銘を受けた。

今回の緊急出版「沈みゆく大国アメリカー逃げ切れ、日本の医療」をテーマとした語りも冴えている。

問題作だ。早速、注文することにした。

石田修大 「私の履歴書」――昭和の先達に学ぶ生き方（朝日新聞出版）

著者は日経の記者で、「私の履歴書」やコラム「春秋」を担当した。その人が書いた本なので、厚みがある。昭和を意識した本ということで、時代認識が参考になった。

今年 2015 年は、1925 年(昭和元年)から 90 年、そして戦後 70 年にあたる。明治(1868 年)以降の 80 年足らずの期間は、内戦、内乱を含めて、戦争だらけの 80 年であった。戊辰戦争(1868 年)、西南戦争[1877 年)、日清戦争(1894 年)、日露戦争(1904 年)、第一次世界大戦(1914 年)、シベリア出兵(1918 年)、満州事変(1931 年)、日中戦争(1937 年)、太平洋戦争(1941 年)。満州事変以後は 15 年戦争となった。ほぼ 10 年をおかずに戦争が繰り返された。

徳川幕府 260 年余と戦後 70 年は戦争がなかった。1603 年から 400 年余の期間で、戦争があったのは明治以降の 80 年弱の期間だけだ。後の 320 年間は、日本は戦争をしなかったということになる。

平均寿命が 50 歳を越えたのは戦後のことであり、その前は男女とも平均寿命は 40 歳だった。合計特殊出生率は、1925 年は 5.11%、1930 年は 4.72%、1947 年は 4.54%となっており、終戦直後まで日本の母親は 5 人前後の子どもを生んでいた。生後 1 年未満の乳児の死亡率は、1900 年は 15.5%であったが、2012 年には 0.22%になっている。昭和の戦前までは多産多死の時代だった。

瀧口範子 「にほんの建築家 伊東豊雄・観察記」(筑摩書房)

伊東事務所は年間5-6のコンペに参加している。勝率は 1 割程度か。パリのコニャック・ジェイ病院、バルセロナの国際展示会場、、。伊東事務所の初期の仕事に 1979 年のJALカウンターデザインの刷新がある。

仙台市が、図書館とメディアセンター、アートセンターを合体させた建築を建てることになり、コンペで伊東事務所が優勝した。それが仙台メディア・テークだ。すべての機能がひと続きになった空間ができあがった。市民に好評な施設だ。

この施設が東日本大震災で一部が被災した。構造的に無傷であったが、7階天井仕上材が一部落下した。

今ではこの施設は仙台市民の「心の拠り所」となっている。

2015 年 7 月

堤未果 「沈みゆく大国アメリカ 逃げ切れ！ 日本の医療」(集英社新書)

前作に続く衝撃の書だ。

医療は複雑で、広大な領域であり、全体像をつかむのが難しい。医療に関わるどの職種も、そして患者も巨像の一部しか見えていない。その無知という間隙をぬって、アメリカはすでに医療を巡る企業群の手に落ちて、人々は命が粗末に扱われる塗炭の苦しみの中にいる。

アメリカを構造的に食い尽くすシステムを整え終った医産複合体は、国民皆保険という世界が絶賛する医療体制を持つ日本市場を少しずつこじ開けてきた。その仕上げが、TPPである。

そういった危機感から、著者は2014年11月に出版された話題になっている前著に続き、今年5月にこの書を出した。

警世の書である。

アメリカ。

- ・ 65歳以上の高齢者の医療・介護の必要資金は1.5億円。物価上昇(4%)と医療保険・医療費の上昇があり大病にかかったら一巻の終わり。老人医療と介護産業は恐ろしく儲かるビジネス。政府の高齢者福祉予算の2割を吸い上げ、老人ホーム大国が誕生。オバマケアによって今後10年で高齢者医療費を57.5兆円削減し、老人ホーム費用を補助するメディケイドにまわる。中流層の消滅。
- ・ 有権者の無知と愚かさにつけ込む。御用学者と大手マスコミ。法案のページを府や市読みきれないように工夫する。芸能人とコメディアン、連ドラですりこめ。
- ・ 教師、医師を悪者に。
- ・ 世界一高い医療費と薬代、しかし寿命は短い。
- ・ 保険を使わない直接支払型医療。予防医療。かかりつけ医。住民運動。
- ・ 医師は自殺率の高い職業ランキングトップ。

日本。

- ・ 混合医療や医療と介護を合わせた大型チェーンは近々特区で解禁。ガン保険はアメリカ系保険会社押さえた。医療機関、介護施設、老人ホーム、透析センターで60兆円の市場規模。
- ・ 1922年「健康保険法」。1938年「国民健康保険法」。1942年「国保法」改正。1948年加入が義務。1958年、新「国民健康保険法」。国民皆保険体制に(実際は社会保障)。病院や診療所が整備。3割負担。1973年老人医療費無料化(田中角栄総理)。福祉国家へ向かう。高額療養費制度に世界が嫉妬。介護にも所得別に限度額がある。
- ・ 1958年中曽根・レーガンのMOSS協議「電気通信・医薬品医療機器・エレクトロニクス・林産物の4分野に関する製造・輸入の承認・許可・価格設定」を事前にアメリカに相談する。この不平等政策で海外の薬と医療機器を3-4倍で買われる。

- ・ 1989 年消費税導入。税制を自己責任型に。自己負担率が上昇中。国民皆保険制度は社会保障よりも保険に色合いが強くなってきた。保険料が増えた。長期入院が難しくなった。年金積立金の大半が株投資。混合医療・病院の株式会社化の法改正。医療特区、医療不動産の投資信託商品の登場。規制緩和の進行。国民健康保険制度は残るが使える範囲が狭くなってきた。
- ・ 2014 年混合診療の法改正で高額新薬。日本御医薬品承認スピードは欧州と同程度。今後は、安全審査は6か月が6週間に、前例のある薬は2週間審査。医療や薬の審議会には医療関係者は入っていない。韓国はすでに金融植民地になり、国民皆保険制度は有名無実化。
- ・ 2013 年 12 月国家戦略特区法。外資系企業向けの規制緩和、そしてTPP締結。アメリカにあるエクソン・フロリオ条項は日本にはない。Tisa(新サービス貿易協定)は公共サービスを自由化しようという国際条約が怖い。最大のターゲットは日本の医療。アメリカはサービス産業の国外進出で経済成長しようとしている。薬価の自由化というアメリカの悲願。
- ・ 後期高齢者を国保や健保からはずす。負担の増。要支援1・2の給付から訪問介護と通所介護がはずされた。高齢者の健康予防・生活支援サービス市場は 2020 年までに2兆円から9兆円規模へ拡大。
- ・ 2025 年問題。団塊世代が75歳以上に。介護職員は30万人不足。外国人介護福祉士資格取得者は永住的に働ける。事実上の移民政策。外国人技能実習制度を介護分野に拡大。介護業界の賃金水準は低下。
- ・ 社会掘保障と税の一体改革の先送り。議員定数、独法と特別会計の数、公務員給与削減などやらなかった。消費増税のみ実施。政府広報予算の3割アップで83億円。これを大手マスコミに。

日本はまだ間に合う。

- ・ 自分の国の医療制度をよく知ること。そこに横たわる精神。
- ・ 医療費を押し上げているのは医療技術の進歩と新薬。高齢化で医療費が高騰するというのは事実ではない。
- ・ 日本は、医療費はかなり低い、患者の自己負担率はとても高い。
- ・ 日本は10兆円の巨な薬の市場で、世界の薬の4割を消費。
- ・ 人口あたりの医師数は先進国ではかなり低い。絶対数の不足。専門医の不足。
- ・ 予防医療が大切。
- ・ 世界が嫉妬する国民皆保険制度。
- ・ チーム医療。
- ・ 医療外交。

曾野綾子『沖繩戦・渡嘉敷島「集団自決の」真実』(ワック)

沖繩戦の慶良間諸島の渡嘉敷島で起きた住民の集団自決事件は多くの書物やなどで紹介されている。定説では旧日本軍の赤松嘉次大尉(25歳)による命令で329名の住民が自決を強いられたとされる。この定説に疑問を投げかけた曾野綾子が1973年に書いた文章がある。その延長線上に1992年に出した「ある神話の背景」(PHP文庫)を改定し2006年に出したのが本書である。

大江健三郎が「沖繩ノート」で「大きい罪の巨塊」と弾劾しているが、曾野綾子は、膨大な徹底した取材と長い時間の中で考え抜いた結果、「自決せよ」という命令を軍が出したという証拠は見つからなかった述べている。そして、このような最大の告発は自分にはできないと述べる。

「それほど確実さで事実の認定をすることができない」、そして他人の罪を「それほど明確さで証明することができない」という二つの理由からである。

責任は軍の隊長個人にもあるかもしれないが、村の指導者であった村長にもあるかもしれないし、そして日本軍や米軍、そして国がそういった環境をつくりだしたせいでもあるかもしれない。それらは広い意味での集団発狂そのものであるといってもいいかもしれない。

自決の場面の証言は凄惨極まるものであり、涙なくしては読めない。親が子を、夫が妻を、愛するものから順番に、苦しまないように徹底して殺していく。

赤松本人と部隊の生き残りは、「本当のことを言ったら大変なことになる、迷惑がかかる」と答えている。軍の命令だったとしないと、死んだ人たちの遺族に年金が下りなかったという説がある。そのため口をつぐんだと言うのだ。

産経新聞の石川論説委員は、「解説」の中で旧軍の命令で、「渡嘉敷島と座間味島の住民が集団自決した」とする従来の定説は、曾野氏の検証取材やその後の学問的調査により、ほぼ否定されたとしている。しかし歴史教科書では「集団的な自殺を強制した」「集団自決を強要された」などの記述は残っているという

いずれにしても、不確かな情報で、事件や渦中の人を断罪していく危険性について、この本は教えてくれる。

寺島実郎「新・観光立国論」(NHK出版)

人口減と高齢化へ向けて異次元のように進行する日本は、モノづくり国家を超えてサービス産業の高度化を図らねばならない。その中核は観光産業の隆盛である。これがこの本の主旨である。資料編の充実も特徴である。この本は「観光」を巡る発想のヒント集でもある。

ここでは、世界と日本を巡る事実や数字ではなく、観光を「思想」としてとらえるキー

ワードを抜き出してみたい。

- ・ 移動と交流という思想。人類は移動によって進化してきた。グレートジャーニー。適者生存。移動は人間を賢くする。刺激を受けて知恵がついていく。移動と交流によって自分を磨き、眼を開き、世界観を進化させる。移動は消費を促す。
- ・ 創造的観光。変化とドイドキ感。聖地巡礼。宗教的寛容さ。古今東西の文化の混合。安全と治安。クールジャパン。歴史意識を広げる旅。インダストリアルツーリズム。幸福探究ツーリズム。創造的な物語。体系。
- ・ 4つの課題:国際収支の天井(脱工業化社会。リーディング産業。食とエネルギーの外部依存の低下。工業生産力モデルの限界。日本の貧困(中間層の没落。行動と学びの欠如。)、異次元の少子高齢化の進行(人口減少化のビジネスモデル。コンパクト・ネットワーク。)
- ・ グローバル化の中で移動と交流によってネットワークを形成し豊かになっていく。移動は活力をもたらす、人間を賢くする。進化の鍵は驚きを覚える力。気づき。二地域居住。非日常生活の体験と追及。解放感の中で驚きの発見による進化。驚きとはつながりを理解する知性。歴史と空間と物事をつながり。時間軸と空間軸。相関関係と相互依存関係。外は広く、内は広い。
- ・ 立体的な相関。ダイナミックで立体的なクラスター。統合と総合。ビッグデータ時代。サービス・エンターテインメント産業。異なる地域を結び、歴史を掘り下げていく。付加価値。
- ・ 移動と交流という思想(移動と交流は人間を賢くし活力をもたらす)。驚きを覚える力。旅の遺伝子。移動と交流(観光)による経済の活性化。二地域居住などの多様なライフスタイル。観光と定住の中間形態。

渡辺豪『「アメとムチ」の構図―普天間移設の内幕』(沖縄タイムス社)

著者は毎日新聞社に1992年から6年間記者として務めた後、1998年に沖縄タイムスに転職し、2004年から2008年まで政経部基地担当として、普天間と辺野古の問題を追った人だ。この本は2008年に担当を離れた後8か月後に刊行されているから、政府とアメリカ、そして沖縄の登場する人物が多く、迫力がある。

沖縄問題をライフワークとして長い間沖縄の基地問題に関わり、防衛事務次官となるなど、この時期の沖縄問題の主役であった守屋武昌を中心に、描いている。佐藤勉那覇防衛施設局長、額賀福志郎防衛庁長官、稲嶺恵一沖縄県知事、比嘉良彦県政策参与、西正憲那覇防衛施設局長、翁長雄志那覇市長、岸本健男那覇市長、島袋吉和名護市長、末松文信、中泊弘次、トーマス・ライク在沖米国総領事、ケビン・メア在沖米国総領事、ジョン・ヒル米国防省日本部長、宮城茂村長、仲井間弘多知事、小池百合子防衛庁長官、安倍晋三官房長官、など当時の関係者が登場する。

この問題の一筋縄ではいかない複雑骨折した様相が丹念に描かれている。時代と人物の織りなす一大絵巻のようだ。

太平洋戦争で沖縄に犠牲を強いた日本政府は、「贖罪の精神」で、長く、そして粘り強く政策を行ってきたが、戦争を知らない若い世代の政治家が増えるにつれて、その意識は薄れていく。経済振興策と基地負担を「アメとムチ」として露骨にセットで使い分けていくようになった。

地元の声はひとくりにできず、また政府の方針も不変ではない。基地問題は、アメリカの一人勝ちになっている。普天間代替施設の確保、嘉手納基地より南の非効率的な施設を日本の予算で北部に集約。普天間基地移設計画がとん挫しても失うものはない。

日本政府は在日米軍再編に関する巨額のコスト負担、地元との交渉という政治リスク、米側への履行責任を負っている。

全国一律の再編交付金の導入、在沖米軍機の本土の自衛隊基地への訓練移転など、「全国の沖縄化」が始まろうとしていると筆者は指摘し、安全保障政策のあり方を根本から問い直すべきであると結論付けている。

那覇市長としてこの本にたびたび登場する翁長雄志の言葉は、知事となった今の言動につながっている。「県民のマグマ」「沖縄に負担を押し付けてぬくぬくと生きていく日本という国はやはり当事者意識を欠いている」「県民同士がけんかさせられている状況」「橋本総理や小渕総理のような沖縄への思い」、..。

宮沢章夫「NHKニッポン戦後サブカルチャー史」(NHK 出版)

「NHKニッポン戦後サブカルチャー史」(宮沢章夫)を読む。

2015年8月

外山滋比古「50代から始める知的生活術「人生二毛作の生き方」」(大和書房)

91歳の誕生日を迎えた外山滋比古先生の文庫本を軽く読んだが、凄いことが書いてある。新しいライフワークが浮かんできたというのだ。この先生は知研で講演してもらったこともあるし、千葉の自治研修所のパーティでもお会いしたこともある。またいくつかのベストセラーも読んでいます。

最後の「残照夢志」のページには以下の叙述がある。

誕生日には「うかうかしてはいられない。もっと大きな仕事をしなくてはいけない」と思った。

「本当に考えるとはどういうことか」「忘却の効用」をより深く新しく考究しよう。それらを

ライフワークにしよう。

「超老人の志」として、「新しい勉強」をしようと決心した。91歳で志を立てたのだ。

この超老人の一日の生活リズム(日課)は以下のようになっている。

4時半起床。5時46分の始発で茗荷谷駅から丸ノ内線で大手町に5時56分着。半蔵門線で九段下駅に6時5分到着。定期を買っている。

北の丸公園に向かい、6時半からのラジオ体操を顔見知りと一緒に行う。

皇居の周りを回る。半蔵門、三宅坂、桜田門、二重橋、大手町駅へ。地下道の喫茶で一服しカプチーノを飲む。

地下鉄で座って帰宅。自宅到着は8時過ぎ。歩数は1万歩。

朝食のしたくをし、食べ終わると8時40分。後片付けをしてひと寝入り(また寝)。長くて1時間。あるいは新聞。全ページの見出しを見て、一つ本文を読む。

11時にまた寝から覚めて郵便物を処理し、自宅近くの図書館に向かう。図書館は書齋代わりで原稿書きを2時間。場所を変えるのがいい。

午後1時には家に戻る。昼食をつくって食べ終わると午後2時。

再び図書館に戻る。

午後5時に帰宅。雑事を済ます。

午後7時から夕食のしたく。

午後8時に食べ始め、8時半に片付け。午後9時には床につく。テレビは見ない。

佐藤優「知性とは何か」(祥伝社)

反知性主義は「実証性や客観性を軽視もしくは無視して、自分が欲するように世界を理解する態度」と定義している。佐藤は、安倍、麻生、橋本、ヒトラーの系譜を反知性主義とする。自分が欲するように世界を理解するので、不適切な発言や行動をしたという自覚がなく、聞く側の受け止め方に問題があるとしか認識できない。反知性主義の克服は、「他人の気持ちになって考えることができる」ようになることが第一歩である。

この本の中で佐藤は、安保法制について野党やマスコミの見方と違い次のように言っている。

- ・ 閣議決定で厳しい縛りがかかり、以前よりも自衛隊の海外派遣は難しくなった。
- ・ 憲法上、許される自衛の措置は自国の防衛のみに限られる。いわば個別的自衛権に匹敵するような事態にのみ発動されるとの憲法上の歯止めををかけ、憲法の規範性を確保した。(公明党山口代表)
- ・ 国連の集団的安全保障措置など国際法上合法的な措置に憲法上の制約は及ばないという考え方を採用しなかった。(山口代表)
- ・ 国内法で集団的自衛権の行使を規定する場合は、憲法改正が必要になり、国連の集団安全保障措置による自衛隊の覇権が不可能になった。イラクや中東で自

衛隊が戦うことはない。

以上が佐藤の見立てである。公明党が防波堤となっているということになる。

安保法制は与党協議で複雑骨折し、個別的自衛権でやれるものを集団的自衛権と呼んでいるに過ぎなくなる。今回の国会論戦の過程で、国民の意識が高くなり、憲法改正のハードルは一層高くなってしまおうという皮肉な結果となったということだろう。

この本の中で柄谷行人の主張を紹介している。憲法九条は米軍占領時に強制されたものだと批判されてきたが、朝鮮戦争に際してアメリカが日本に憲法改正と再軍備を迫ったとき、日本人はそれを斥けた。だから憲法九条は日本人自身が作ったものだといいよう。

おすすめの書。

ユンゲル・ハーバーマス「コミュニケーション的行為の理論(上中下)(未来社)

千野栄一「外国語上達法」(岩波新書)

中野剛志「世界を戦争に導くグローバリズム」(集英社新書)

野矢茂樹「論理学」(東大出版会)

澤田昭夫「論文の書き方」(講談社学術文庫)

山内昌之「民族と国家—イスラム史の視角から」(岩波新書)

柄谷行人「遊動論—柳田国男と山人」(文芸新書)

桐野夏生「抱く女」(新潮社)

桐野夏生のハードな小説は「東京島」「ナニカアル」「魂萌え」などいくつか読んでみる。

今回の主人公・直子は1972年に20歳の女子大学生。どこにでもいる普通の女の子だ。

ジャズ喫茶、学生運動、ブント、JBL、「構造人類学」、セブンスター、FEN、「麻雀放浪記」、吉本隆明、連合赤軍、岡本公三、内ゲバ、浅間山荘事件、革マル、「我が心は石にあらず」、リブ、中ピ連、北爆、、、。これに恋愛が絡み合いながら、直子は自分の居場所への突破口を見つけていく。

1972年9月から12月までの4か月間の物語である。この時期は私の大学の最後の年だから、登場する書籍や事件には覚えがあるから臨場感を持って読むことができた。

「男が自分を欲していることで、自分という女が成り立っているような錯覚を起す」段階から、「私は抱かれているのではなく、好きな男を抱いているのだ、と大声で叫びたい気持ちだ。」という所までの飛躍、アイデンティティの確立がこの本の主題だろう。そ

の主題が「抱く女」というタイトルになっている。

桐野には珍しいが、いつの時代も変わらない青春を描く小説だった。

琉球新報社,新垣毅「沖縄の自己決定権—その歴史的根拠と近未来の展望」(高文研)

琉球新報社が2014年5月1日から開始した連載「道標を求めて—琉米条約160年 主権を問う」という100回の連載をまとめたものである。冒頭に富田詢一社長は次のように叫んでいる。

「われわれは43年前に、戦後のアメリカによる占領下で、父と頼り、母と慕った祖国に帰りたいと日本への復帰運動を展開して、ようやく祖国に帰ることができた。しかし、帰った祖国は、思い描いていた祖国ではなかった。」

「、沖縄の人々が、子や孫に負の遺産を残したくない、という強い思いから、いま行動を起こしつつあるのが自己決定権の行使だ。」

1879年の「琉球処分」は琉球国がアメリカなど3か国と結んだ修好条約(この原本は外務省にある。琉球が主権国家であった証拠を奪った)を根拠に「国際法に照らして不正であり、琉球は国際法上の主体であり、日本の一部ではなかった」と国際法研究者の言を紹介している。また、日本も1981年に加入しているウイーン条約法条約51条には、「国の代表者への脅迫や強制行為の結果、結ばれた条約(合意)」は無効と規定されている。

この点についての外務省見解は「琉球処分」の意味するところについては、さまざまな見解があり、確立した定義があるとは承知しておらず、外務省として確定的なことを述べるのは困難である」とあいまい模糊としている。

こういった歴史認識が、沖縄が抱える問題の基礎となっている以上、政治問題化すべきであり、アメリカに対しても琉米条約の「友好」に趣旨に基づいて、黙認した責任を問い、謝罪を求め、基地問題解決に向けた琉米委員会の設置も要求できる、という意見もある。

この点について佐藤優氏は、国際法の義務違反は国内法と違い、条約当事国が義務違反を明示的に言わないと違反にならないが、米・仏・蘭は異議申し立てをしていないから、違反はないと考えられるという。しかし、歴史的経緯についての説明責任はあるとの見解だ。

「経済的自立派可能か—識者に聞く」

- ・ 谷口誠「東アジア共同体ができれば、本部機能は沖縄に置くべき、。国際会議場などインフラ整備が必要だ」
- ・ 寺島実郎「東アジアのへそ、楽市楽座の場として、平和で安定した島としての自立象、他人依存でないシナリオを描くべきだ。、、、本当の意味での観光立国モデル

になってほしい。、、最高級志向のリポーターを沖縄に引き付ける戦略をしっかりと描く、。。」

- ・ 島袋純「1996 年ごろから「償いの心」が消え、基地への見返り、すなわち補償政治型の仕組みに変わっていく。、、筋の悪い怪しい補助金をもらわないようにする、。。」
- ・ 友知政樹「基地が返ってきた後に独立するのではなく、独立したら帰ってくる。琉球が主権を持つからだ。、、東京より近いところに上海、台湾、、同じくらいのところに北京、香港、ソウル、マニラがある。、、「南海の孤島」ではなく、東アジアのセンターだ」

村上龍「オールド・テロリスト」(文藝春秋)

村上龍という作家は、骨太の大きな小説を書く。時代の病巣と、それを解決しようとする人たちの姿を優れた想像力と高い構想力を用いて物語に構成していく。

「この国にはすべてがある。しかし希望だけが無い」という言葉が話題になった「希望の国のエクソダス」では不登校の中学生たちが北海道に半独立国をつくった。そして、今回の主人公は、反対の老人である。「希望の国、」と同じテーマだが、主人公を変えるとどうなるか。

70代から90代の老人たちが、テロという手段で、日本を変えようと立ち上がる物語。文芸春秋に2011年6月号から2014年9月号まで連載したものに加筆して出来あがった本だ。

村上龍が想像力を駆使して東日本大震災の直後から日本が激変する3年間の年月を書き続けた物語。時代はイチローの特別引退記念試合と2020年の東京オリンピックの間という近未来の設定だ。

テロを行う老人たちのグループは旧満州国の亡霊たちで、戦後のシステム全体に影響力を持っている。彼らは88ミリ対戦車砲を持っていて、それで原発の使用済み燃料棒プールを爆破し、日本を焼け野原にしようとする。数千本の核燃料棒は原子炉10基分に相当する。50センチほどの薄いコンクリートの壁に囲まれているが数百度の熱で崩壊する。その対象はまず静岡の浜岡原発である。

落ちこぼれで家族も失ったどうしようもない雑誌記者くずれの主人公は、ふとしたことからこのテロリスト集団に巻き込まれていく。

テロリストたちの周到な計画は、最後はアメリカ海兵隊のドローンという無人兵器で敗れるが、実はまだ88ミリ対戦車砲は二基がどこかに残っているという設定で、その後の物語の続きが暗示される。そして不思議なことに、この過程で主人公は最後にテロの首謀者から「あなたは本物の記者だ。こちらも命を賭けて頼まないと書いてくれないだろうと、最初からそう思っていた。セキグチさん、。。」と言われ、言葉を失う。そして、

すべてがわかった時、「ミツイシさん。おれは、書きますよ」と決意するのだ。

この小説では村上龍が見る現代日本の病巣が描かれていて、同感するところが多かった。

- ・ 影が薄いという特徴は、今の若者全体に共通したものかもしれない。、、エネルギーやパワーを外に向かって示すことが、日本人の精神性から完全に消えつつあったのだ。
- ・ 問題点や疑問点を示さず、犠牲者の葬儀や遺族のコメントなど情緒的な報道しかできない日本のメディアの罪は大きいとおれは思う。この国のメディアは、なんて悪い人なんだろうと、なんて可哀相な人たちなんだろうという二つのアプローチでしかニュースを作れない。
- ・ マスコミは、、単に能力がないのです。事実を報ずる能力がない。世界的にパラダイムが変わってしまっているのに、気づくことができない。
- ・ 中国共産党と同じく、中流層の没落で拡大し続ける経済格差、増税、崩壊寸前の年金、社会保障などによって爆発寸前の怒りを逸らす対象として、中国を利用してきた。
- ・ 原発と国際テロが絡む事件で、真実を暴こうとするメディアはもう存在しない。いや、もともと存在しなかったと言ってもいい。

森嶋通夫「なぜ日本は没落するか」(岩波書店)

この本は一度読み終わったのだが、旅行中に無くしてしまったので、再度購入し再読。おかげでこの重要な名著を二度読むという幸運を授かった。

21世紀が目前の1999年に刊行されたものである。その時点で約50年後の2050年の日本を予測した書だ。著者の森嶋通夫は1923年生れで、1976年に53歳で文化勲章を受章していることからわかるように出色の経済学者だった。ロンドンにいる森嶋が1977年に出した「イギリスと日本―その教育と経済」という著書は話題になった。私もロンドン駐在中の1978年頃に接触したことがあることを思いだした。

結論は、政治的に没落し、国際政治的には無視しうるは端役になっているであろう。経済的には不況は7-10年に一度来てそれらを切り抜けることができることを望む。中心テーマである政治的没落の罠から逃れるには政治的イノベーションであるアジア共同体の形成以外に道はない。

森嶋は、社会は一つの構造物であり、土台と上部構造があるとマルクスと同じ考え方をする。マルクスは土台を経済としたが、森嶋は土台を人間だとする。経済は人間という土台の上に建てられた上部構造に過ぎないとする。

だから2050年に政界・財界・官界のトップに就くであろう現在の若い人(3歳、13歳、18歳)がどのような人間になっているかを推定すればいいと言う。この視点から言うと、

2015年現在の時点で官界の2050年のトップは18歳、財界は28歳、政界は33歳である。

彼らがどのような人間であり、教育によってどのように変化するかを考慮に入れれば土台がどのようなものになっているかがわかる。人口史観である。人口の量と質が決まれば、それを使ってどのような経済を営めるかを考えることができる。重要なのは経済学ではなく、教育学である。

戦後の教育改革は中途半端であった。学校では自由主義、個人主義を教えられたが、大人の社会は戦前の教育を受けた人たちが中心で動いていた。彼らはその流れに抵抗してきた。学校を出た青年は大人社会の入り口で戸惑い、失望した。私が入った企業も新入社員教育は自衛隊だったし、最近までそれが続いていた。また、家庭教育は戦前教育を受けた親からは儒教道徳を指導されたので、この初期の青年層は保守的な面を持つ二刀流であった。80年代末期の青年はこの二刀流を使えなかったので、大人は彼らを新人類と呼んだ。

高度成長に貢献した大部分は戦前教育を受けた人たちだった。

1990年代初めには官界は戦後教育派、財界は過渡期派、政界は戦前とは背景のまったく違う人が三界を占めていた。

2050年の土台はどうなっているか。

戦後教育は価値判断を避けて知識を詰め込んだ。結果として価値判断を行う能力を失い、意志決定力も弱くなった。日本は頂点から崩れていく可能性が高い。

教育への提言。

- ・ 森嶋は、大学進学率は15%でよいと考える。残りの25%は専門部に進学させ、そのうち5%を大学院修士課程に入学させる。結果として大学進学率は20%になる。
- ・ 専門コースを先にやり、その後で教養課程を履修させる。大部分の学生は2年で卒業。
- ・ 校舎はガラガラになるから、入学試験は全廃し、高校時代の実績を重んじる。

東北アジア共同体の提言。これができないと日本は没落する。政治的イノベーション。

- ・ 日本、中国、朝鮮半島、台湾、琉球。
- ・ 建設共同体。
- ・ 中国を6ブロック、朝鮮半島と日本はそれぞれ2ブロックずつ、首都は独立した琉球(沖縄)。

百田尚樹「大放言」(新潮新書)

百田尚樹の小説は一作一作が違うテイストで一時読み漁ったが、放言が報じられてからは熱が冷めていた。昨日書店で「大放言」という逆手に取ったタイトルに惹かれて買いすぐに読んだ。

「この人は3作続けて重版がかからなければ即引退する」という決意で小説を書いている。その気概に感心する。

さて、放言についてだ。

「やればできると思っているバカ」「自分を探すバカ」「ブログで食べたものを書くバカ」「尊敬する人は両親というバカ」「なんでもコスパで考えるバカ」「原爆慰霊碑の碑文を書き直せ」「ガキと議論するな」「図書館は新刊本を入れるな」、、、、。

放言というより、言ってることはしごくもつともだ。

第四章「我が炎上史」と「番外編」が、やはり読ませる。

「人間のクズ」。「東京大空襲は大虐殺」。「ナウル・バヌアツはクソ貧乏長屋」「日教組は日本のガン」。「土井たか子は売国奴」。「百田尚樹NHK委員、放送法違反！」。「きれいなオネエちゃんを食べたい」。「軍隊創設」。「沖縄の二紙はつぶさなあかん」。

それぞれ記憶に新しい放言だが、本人の弁明を読むと、むしろ全体から一部を切り取った側、言っていないことを言ったと書く側、問題発言であると匂わせる側、つまり、スコミの暴力、政治の道具に使う政治家の方に問題があると思えてくる。

「我が炎上史」は、「長生きできたところでせいぜいあと20年ほどの命である。小説家にしがみつく気はない。「放言」くらい好きに言わせてもらおうと思う。」で終わっている。

この人はやはり、エンターティナーだ。

むのたけじ「99歳 一日一言」(岩波新書)

1915年1月2日生れ。東京外語を出て報知新聞、朝日新聞に記者として入社。1945年8月15日、戦争に加担した新聞記事を書いたとして責任を感じ退社。1948年郷里の秋田県横手市で週刊新聞「たいまつ」を創刊。1978年の休刊まで主幹として健筆をふるう。蔵書1万5千冊。

今年100歳を迎えたむのたけじ(武野武治)。

- ・ 書くことを学ぶために大判ノートを用意し、「語録」と名付け学習を続ける。これが10冊になった。
- ・ 数年ごとにスローガンを持った。
- ・ 「主語をハッキリさせてものを言え」「動詞を存分に働かせ」「形容詞を使うな、事実を言え」「言葉の持つ面白さを耕せ」。
- ・ 自分の認識と思慮を色紙に書く。これが1100枚を超えた。

以上がこの本の材料となった。

この人の中学時代の恩師は、石坂洋二郎である。国語・作文・修身を習った。

- ・ 拝むなら自分を拝め。賽銭出すなら自分に渡せ。自分をいたわれ。自分こそ一切の原点。
- ・ 不幸は近づきだけでつらい。幸福は去って実感する。
- ・ 夜明けの歌を歌うだけでは、世の中は明るくならない。生活の現場から暗いものをひとつずつ取り除こう。
- ・ 「きょうコレヲ必ずヤル」「きょうコレヲ決シテヤラナイ」この二つを毎日やろうか、やらないかは一生の豊凶を左右する。
- ・ 本流と主流を識別せよ。
- ・ 怒りのままものを言うな。怒りを鎮めてから普通の声で怒りを言え。
- ・ 若者を友人とする老人はよく笑う。老人を友とする若者はよく考える。
- ・ 脱皮しない蛇は死ぬ。
- ・ 「反骨のジャーナリスト」というのは、二重形容だ。

本を読む、学びたい人に会って話を聞く。この二つが自学自習のポイントと言う。確かに、「仕事に精を出しながら、本を読み、人に会い続ける。」ということだ。ここに人生を真摯に生きた 100 歳の人がある。

2015 年 9 月

大田昌秀「これが沖縄戦だ一写真記録」(那覇出版社)

「写真記録 これが沖縄戦だ」(大田昌秀編著)を読了。編者の大田昌秀は、沖縄県知事だった人だ。1977 年発行だから、編者 52 歳の時の労作だ。

ワシントンの国防総省の資料から千数百点を選び、「これが沖縄戦だ」というタイトルで琉球新報に半年かけて連載する。

沖縄師範鉄血勤皇隊の一員だった大田は解禁になった沖縄戦関係の写真や機密文書を集め続けた。米国立公文書館、米陸海軍、米海兵隊の資料、日本の防衛庁戦史室の資料等を集め、沖縄戦の全貌を明らかにした。その後も毎年のようにアメリカを往復し資料を集め、6 年後に改訂版を出版した。

沖縄戦の実相は文章では読むことはできるが、写真は散発的にしか見ることはできない。米軍の撮った写真によって、民間人を大がかりに巻き込んだ壮絶な、陰惨な、戦争の実態が見えてくる。茫然とする老人、途方に暮れる子どもたち、兵士の死骸、。。。。。

大本営と現地軍、陸軍と海軍との間に戦略や戦術を巡って一致点がないまま、沖縄戦が戦われた。また、特攻作戦について米軍首脳は「最高の文明の武器と最低文明の手段のコンビ」だと評していた。

「米軍は日本軍を評して兵は優秀、下級幹部は良好、中級将校は凡庸、高級指揮官は愚劣といている」と八原高級参謀が語っている。日本軍は下から上に行くほど無能になっていくと言われるが、真実に近いにしろ。

首里攻防戦では、日本軍は6万4000人余が戦死したが、アメリカ軍も大損害を受けた。戦死、行方不明は1万人足らずだが、負傷者は4万を超えた。米軍では1万5000人以上が精神異常をきたした。この戦いは太平洋戦争最大の激戦地だった。

海軍の大田司令官は、「陸海軍は防衛戦闘に専念して県民に関してはほとんど顧みる暇なかりき」と海軍次官に打電し、末尾では「沖縄県民斯く戦えり、県民に対し後世特別の御高配賜わらんことを」と要請している。はたしてその後の日本本土は、その要請に答えているだろうか。

沖縄戦では米軍は、住民の世話をやく軍政要員が、多い時には5000人を超える体制だった。この点は日本軍とは違う。

沖縄戦の全貌は、数字や文章だけではつかめない。この労作のような写真の記録は、ごまかしのない実相を伝えてくれる。

編者の大田昌秀は、その後、沖縄県知事、国会議員として活躍し、90歳を超えた今も沖縄問題に取り組んでいる。

中野剛志 「世界を戦争に導くグローバリズム」(集英社新書)

アメリカが世界の警察官になれなくなった。日本を守れないなら日米同盟の深化には意味がない。中国の武力攻撃を抑止できない可能性は高まっている。

2030年までに世界は覇権国家の存在しない構造となる。アメリカは西半球の地域覇権国家となり、中国は東アジアの地域覇権国家になる。アメリカは中国との共存戦略と、日本との同盟戦略の板挟みになるが、この間には根本的な矛盾がある。アメリカは、細心の注意を払って尖閣を巡る紛争に巻き込まれなようにする。米中の覇権戦争を避けて中国とは共存、協調を図る戦略を選択している。

1648年に結ばれたウエストファリア条約以降、主権国家から世界は構成された。国家主権より上位の政治的権威は存在しない。そのために内政不干渉といった一定の規範やルールを作り出して各国は共有している。しかし、冷戦が終わりアメリカは世界覇権国家となり、コソボ、イラクなどへの軍事介入をするなど国家主権の制約を超えるようになった。しかし、オバマ政権はウエストファリアンシステムに回帰しようとしている。

もしロシアと中国の連携にイランが加わり、反米同盟が結成されれば、アメリカはユーラシアの支配権を完全に失う。衰退する覇権国家には、同盟、共存、撤退という3つ

の選択肢があるが、アメリカは同盟と共存の双方を志向している。共存はもっとも難しい戦略だ。尖閣は東アジアのリーダーの地位を巡る紛争だが、アメリカがやってくれることは、よくて経済制裁だ。中国が尖閣を獲る目的は、日米同盟の信頼性を低下させる点にある。

世界は地域覇権国家の並列という多極になる。アメリカはモンロー主義に回帰し西半球の覇権国家になる。

EUはヨーロッパ大陸。ロシアはユーラシア大陸の北部。中国は東アジア。インドは南アジア。

東アジアや中東は文化の共有が乏しく、仮借のない覇権戦争が繰り広げられる可能性が高い。

日本は中国との覇権戦争に巻き込まれる可能性が高い。

日本の道は十分な自主防衛能力を持つか、従属的な地位に甘んじるかのいずれしかない。

以上が著者の分析と結論だった。

アメリカの主導したグローバリズムは、中国の経済大国化と軍事大国化を促し、結果的にアメリカ経済を弱体化させ、アメリカをグローバル覇権から後退させた。

日本はアメリカの共存戦略と付き合いながら時間を稼ぎ、その間に自主防衛能力を高めて中国と向き合っていくという戦略ということになる。

水戸岡鋭治「あと 1%だけ、やってみよう 私の仕事哲学」(集英社インターナショナル)

水戸岡は、JR 九州の話題の「七つ星」のデザイナーだ。

以下、水戸岡の言葉から。

- ・ デザイン力とは、整理、整頓する能力だと思っています。ヒト、コト、モノが大混乱しているところへ行って、整理整頓する。街は、世の中は、基本的に混乱しているのです。
- ・ 稼ぎの仕事と務めの仕事
- ・ デザイナーの仕事は、多くの人が望んでいる事、考えている事をしっかり取材して、正しく通訳、翻訳して、それを色、形、素材、使い勝手、サービスに置き換えていく仕事です。まさに代行業なのです。
- ・ オリジナルであるがゆえに一流に見える、比較できない、見たことも使ったこともないオンリーワンが生まれるのです。
- ・ この程度のものか、とお客様に思われることが怖く、その目が強いわけです。
- ・ 経営、歴史、哲学など学問を身につけないと、記憶、正しく、美しくという良いデザイナーになれない。

- ・ 一緒に仕事をすると言う事は、一緒に生きることだからです。
- ・ 総合的、創造的に環境を整理、整頓できて、形にするまでの人は、なかなかいない。…、自分自身の抱える宇宙が広がらないと、それはできないのです。

水戸岡鋭治 「鉄道デザインの心——世にないものをつくる闘い」 (日経 BP 社)

JR九州の「ななつ星」を推進した唐池社長は「30 億円かけて九州を見る、人生を顧みる額縁を造りました」といい、デザイナーの水戸岡を感動させている。

- ・ 大事なものは、空間のデザインだけでなく、細かい物語を作っていく仕事です。
- ・ 味覚の体系化は、できると僕は思っています。
- ・ 「稼ぎ仕事」と「務め仕事」
- ・ 能力のある人はいるはずなんです。リーダーになっちゃう人のレベルが低いです。
- ・ 哲学、歴史学、経済学。そういった総合教育。(福沢諭吉の「学問のすすめ」)

たった今(2015. 4)終わった仕事。

- ・ JRおおいたシティ:4500 へーべの日本最大の屋上庭園。ホテルの最上階に屋上露店温泉。神社、滝、鳥居、仲見世、三輪車、すべり台、五重塔、絵馬、噴水、ミニ・トレイン。1000 本の木。完全な里山になってとり 2.3 年で林や森になる。

今取り組んでいる仕事。

- ・ 「或る列車」:JR九州。スイーツの列車。大分・由布院・日田。佐世保・ハウステンボス・長瀬。一人 2 万円から。スイーツのフルコース。
- ・ 「豪華客船」:岡山の両備ホールディングス。小島社長。ひよっこりひょうたん島。植物園。動物園。森。瀬戸内海をクルーズが中心。日本近海。80 人。植物工場。船だけで 30 億円。

やってみたい仕事。

- ・ ファミリー寝台車。
- ・ ローカル線の複線化:車体を幅を小さくし単線の幅を上下に分け合う。
- ・ 無人駅(半分)の改札口が街の玄関口:農業の駅。漁村の駅。森の駅。川の駅。橋の駅。

JR九州、両備ホールディングスを始め、TOTO、柿右衛門、、、など鉄道事業の挑戦に関わった人々の心意気、勇気、感動などが伝わってくる。仕事はこういうものでなくちゃ、と思う。

水戸岡の仕事を見ると、視野の中に「過去・現在・未来」が連続して広がっていることがわかる。時間軸と空間軸が明確だ。歴史と現在と未来を見ている確かな目を感じる。

宮崎康三 「シェアリング・エコミー—Uber, Airbnbが変えた世界」(日本経済新聞出版社)

これはインターネットとスマホの融合による需要と供給のマッチングサービスだ。シェアリング・エコミーの経済規模は 2016 年には 10 兆円を超える。しかし関連サービスの認知度は 5%、実際に利用したことがあるには 1%でしかない。

以下、日本で使えるサービスをピックアップ。使ってみよう。

- ・ Uber:規制があり、既存のタクシー会社と組んで配車サービス。
- ・ Airbnb:CCCと組んで「家旅」。
- ・ LINE TAXI
- ・ あきっぱ:駐車場スペース
- ・ 軒先パーキング:駐車場スペース
- ・ スペースマーケット:会議室、オフィス
- ・ 家事代行
 - ・ Casy
 - ・ Any+Times
 - ・ リネット:洗濯
- ・ 料理・弁当
 - ・ ごちクル:弁当。法人・団体向け。
 - ・ bento.jp:弁当。
 - ・ LINE NOW
- ・ モノのレンタル
 - ・ airCloset:洋服
 - ・ LovinBox:アクセサリ
 - ・ Laxus:ブランドバッグ
 - ・ SUSTINA:
- ・ モノの売買・レンタル
 - ・ オークション:ヤフオク
 - ・ スマホ・マーケットプレイス:メルカリ
 - ・ レンタルサービス:airCloset
 - ・ ハンドメイド商品マーケットプレイス:minne
- ・ クラウドソーシング
- ・ クラウドワークス

- ・ ランサーズ
- ・ クラウドファンディング
- ・ kickstarter
- ・ 教育
- ・ MOOC

村上龍「おしゃれと無縁に生きる」(幻冬舎)

著名な文化人や仕事ができる人には「おしゃれ」な男はいない、と著者の村上龍は言う。十分に魅力があるので、特権的にそういうものとは無縁に生きることができるからだ。

こういうテーマとそれを巡る意見から始まって、編集部の提出するテーマにしたがってミニエッセイを書くき、それをまとめた本だ。

贈り物、クールジャパン、韓流ドラマ、企業の不祥事、インターネットと読書、政治意識、日本語、アベノミクス、幸福、夢、高齢化社会、地方の自立、加齢、物流、イノベーション、観光立国、住まい、歴史に学ぶ、定年、など。

私は村上龍の優れた小説を若いころから比較的読んでいた方だし、一時は仕事でつき合ってもいたから、こういうエッセイから染み出る本音にも興味がある。

- ・ 北朝鮮のコマンド部隊が福岡ドームを占拠するところから始まる「半島を出よ」は、映画に向いているが、資金不足で未だに作品になっていない。
- ・ デパートに入っても欲しい物がない。需要の拡大の本質は、欲望と想像力の復活であろうが、そういうことが起こることには悲観的になっている。アベノミクスが失敗すれば絶望はさらに深まる。
- ・ 心身の衰えはあるが、それなりの収入があれば、不幸をある程度回避できるのは真実だ。金で買えないものは信頼であり、それは継続的なコミュニケーションによって形成される。
- ・ 小説を書くという仕事をしていると、情報の氾濫のなかで取捨選択に迷うことはない。そして大事なものは「想像力」である。(創造力の源泉は想像力)
- ・ 韓流ドラマの根本には「恨」がある。復讐と精神的浄化という思考様式だ。言いたいこと、言わなくてもいいことまで全部言う。
- ・ 理想の住まいなど考えたことはない。原稿が書けるスペースとプライバシーがあれば充分だ。
- ・ 景気が悪く需要が出ないのはデフレのせいではなく、単に使えるお金が不十分だったからだ。
- ・ 革新のスピードが緩み、ITフロンティアの限界がみえたときに世界はどう変わるか、を想像している。

村上是「カンブリア宮殿」でさまざまな経営者と接してわかったこととして、「小さな経済圏」を作る動きが広がっていると感じているようだ。他に依存することなく、理念を共有して信頼に基づいた独自のネットワークである。それは「共生」という新しいムーブメントである、というのが著者の結論になっている。

村上龍の次のテーマは、IT革命の終焉と、その後に訪れる共生による小さな経済圏の未来の物語ではないだろうか。

細川あつし「コーオウンド・ビジネス—従業員が所有する会社」(築地書館)

今年から客員教授をお願いしている細川先生の最新著作をいただいた。社員がその企業の大株主となって経営する企業形態を日本にも導入しようという提案である。

こういった経営を行えば、株主価値も社員の利益も極大化するということだ。アメリカではみ民間雇用の10%、イギリスでは2020年までに10%になることが政策になっている。

コーオウンド・ビジネスには、三種の神器がある。情報共有、プロフィットシェア、オーナーシップカルチャーだ。なかなか具体的なイメージがわからないが、日本ではもっともこの形態に近い位置にいるのが伊那食品工業(株)であるそうだ。足りないのは、オーナーシップカルチャーとプロフィットシェアという。

著者によれば、今後はある一つのモデル(例えば護送船団型、新自由主義型、)ではなく、多様な経済・経営モデルの林立が日本経済の持続性を高めることになる。その一つの選択肢が、従業員が大株主という単純明快な企業形態であるコーオウンド・ビジネスだ。

著者の熱い問題意識と、精力的な取材でこの本は練り上がっている。日本の今後の企業経営に一石を投じる本である。

山崎豊子「大阪づくし私の産声山崎豊子自作を語る 2 (山崎豊子自作を語る 2)」(新潮社)

山崎豊子「作家の使命 私の戦後—山崎豊子自作を語る 作品論」(新潮社)

野上孝子「山崎豊子先生の素顔」(文藝春秋)

山崎豊子展で手に入れた三冊の本を読了。

以下、参考になったところをピックアップ。

「植林小説」という志について。

- ・ 茶褐色の地ハダのはげ山に、一本、一本、樹を植えて行くような小説を書きたいと

思っている。一本、一本の枝ぶりは武骨で悪くとも、はげ山一面に植え込んだ樹林の形容、大きさ、根強さなどに心を砕いた小説を書きたい。いわば「植林小説」とでもいうようなものを、、、。(1958年)

二人の師。石川達三と井上靖。

石川達三

- ・ 石川達三先生は、私をもっとも敬愛し、私淑した作家である。、、、作品を通して多くの弟子を育てられた稀有な作家であると思う。

井上靖

- ・ 新聞社にいても、自分を見失わないことですよ。
- ・ 殆ど毎朝5時に起きて、新聞記者という激しい仕事を持ちながらも、入社する前に小説を書いて来られる井上さんの小説に対する情熱と姿勢にうたれ、、、
- ・ 井上さんは午前五時に起きて、作家として世に出るまで四千枚の原稿を書いたためねばならぬと、自分に課した目標に向かって、ペンを執っておられるのだと思うと、肅然とした気持ちになった。(1991年)
- ・ 記憶に残る言葉といえば、「絶えず勉強しなさい」という平凡にして、至難な言葉である。

小説の方法

- ・ 取材をして小説を書くのではなく、取材に出かける時には、既に構想が出来あがっている。
- ・ 構想を練り、プロットができた段階で、進行表をつくります。四百字詰め原稿用紙をつないで長くしたものに、大きな流れを指示したり、並行して行う取材の質問事項を書き込む、書いていて、迷路にはまったら取りだして見るわけです。
- ・ それを自分でおこすわけです。テープおこしも、創作過程ですよ。
- ・ 朝十時から午前一時。最低十二時間、働きます。
- ・ テーマの構築に充分、一、二年ぐらいかかります。、、、まずテーマがあって、そのテーマを小説的に構築できて初めてそのテーマに合う取材をひとつひとつ積み重ねていくんです。建築の設計図を引くように、年代、その時の社会、国際政治がどうだったかという表を作り、その上に主人公の行動をずっと書き込んでいくんです。建築家が描く高層建築の設計図のようなもの。、、、それと同じようなピシッとした年表と小説の進行表がなければ建てることはできません。
- ・ 私の十冊。
アンドレ・ジイド「狭き門」。ヘミングウェイ「日はまた昇る」。エドガー・スノー「中国の赤い星」。巴金「家・春・秋」。ボリス・パステルナーク「ドクトル・ジバゴ」。ソルジェニーツィン「収容所群島」。ジョン・ドス・パソス「U. S. A」。ジョン・ガンサー「アメリカ

の内幕」。ウィリアム・サファイア「大統領失明す」。(1998年)

山崎豊子の人柄

- ・ 意見無きものは去れ、が信条。
- ・ 冗談が通じない人。
- ・ 「私のような子供のいない作家にとって、作品は子供です。その子供から得たものは、子供のために使うのが、自然なことです。」
- ・ ゲーテの格言「努力する限り、人間は迷うだろう」が座右の銘。

「沈まぬ太陽」執筆時のエピソードから。

航空会社でパイロット、客室乗務員、整備を含む地上職の各組合員を取材した時、ずっと立ち会っていた広報室長は「日米航空交渉を書いて戴けませんか、」と提案しているが、山崎はそれをやんわりと退けた。「何を書こうとされているのですか。ずっと傍らで聞いていても、テーマとなることが分かりません」との質問に「空の安全です。今はこれだけしか言えません。あなたも広報が長いので、そろそろパリかニューヨーク支店にでも志望を出したらいかが？」と言うと広報室長の顔つきが変わったと秘書の野上は書いている。「この会社の取材で珍しく人柄を感じる人物だけに、先生は次第に情がうつったのか、執筆が始まる前に、広報を離れた方が無難よと、以心伝心で伝えたかったらしい」。

「志」というメッセージ

国を思う「志」を持つ人がどれほどいるか。今、日本人に一番欠けているのは、そこなのではないでしょうか。これからの経営者しかり、日本と日本人としての「良心」「志」を持って事に対処している人が多かったなら、現在の非人間的なリストラは、もう少し違ったものになったのではないかと思います。

2015年10月

町田康「宇治拾遺物語（日本文学全集第8巻）」（河出書房新社）

池澤夏樹監修の「日本文学全集」を毎月購入している。毎月新しい巻が送られてくるといふ趣向なので、数年にわたって読み続けることができるかもしれない、という期待があるが、さてどうなるかな。

9月刊行の第8巻は、日本霊異記、今昔物語、宇治拾遺物語、発心集の4つが収録されている。

本日、「宇治拾遺物語」を読了した。

宇治大納言物語というには、通行者を庭先へ招き、実際にあった面白い物語を話させて、記録したものである。この宇治大納言物語に、後に時代の新しい物語と漏れた物語を加えたところから、拾遺物語となった。

最高にいい女だった和泉式部の物語から始まり、伴大納言、藤大納言、鼻が長いお坊さん、小野篁、家綱、三条中納言、最後は孔子が悪事を働く男にやり込められる物語で終わっている。

現代語への翻訳は町田康。町田は小説家、詩人、ミュージシャン。芥川賞作家でもある。

ぐちゃぐちゃ、チューター、キャリアオーバー、マジ、ロジという概念、ゲイン、熱狂のライブ、バーベキュー、アホ、気持ちわるっ、ホールド感、デザイン、、、など現代語に訳すのに若者向けの工夫がみられるが、少しやり過ぎの感も。

まあ、楽しんで詠んだが、エロ、グロ、ナンセンスの物語の連続であり、教訓はあまりない。

寺島実郎「二十世紀と格闘した先人たち—1900年 アジア・アメリカの興隆」(新潮文庫)

寺島さんは「世界」で「17世紀オランダからの視界」を連載中だ。その意図は「近代」なるものへの接近である。この本は、「20世紀とは何か」を考え抜くことによって、「戦後日本」を考察した本となる。「フォーサイト」に連載し、単行本と選書版になった「二十世紀から何を学ぶか(下)」の文庫本である。

クラーク博士。ヘンリー・ルース。フランクリン・ルーズベルト。マッカーサー。新渡戸稲造。内村鑑三。鈴木大拙。津田梅子。野口英世。高峰譲吉。朝河貫一。松本健次郎。大島浩。岡倉天心。ガンジー。チャンドラ・ボース。パル判事。孫文。魯迅。周恩来。

これらの人々が時代と、そして自分自身と格闘した姿を追った内容は圧巻である。長い時間と、広い空間と、そして膨大な量の資料の蓄積と読み込みが、読者を圧倒する。いつものことだが、一行一行に込められた情報の圧縮度に感心させられた。

我々の生きている「戦後」を二十世紀100年の中で相対化して考えるという作業であり、この戦後はアメリカの圧倒的影響を受けて来たことが鮮明になっている。アメリカの世紀が静かに終わりつつあるこの時期には、アメリカを相対化することが必要である。

二十一世紀の日本の外交は、アメリカとの長期的同盟関係を重視しアメリカをアジアから孤立させない役割を担いながら、一方で中国を国際社会のルール作りへの責任ある参画者に招き入れる役割を果たすことだというのが、著者の「親米入亜」のメッセージである。

実に重い本である。

大前研一「大前語録」(小学館)

語録なのでさらっと読める。

以下、共感したところ。

- ・ 私は、興味があればどこにでも出かけ、誰にでも質問する。これが人脈作りの基本である。
- ・ 上司が「A」と言ったら、「A+B」の仕事をこなさなければならない。
- ・ 成功する人はどんな仕事でも厭わずやるが、成功しない人は仕事を選ぶ。
- ・ 「自分が〇〇だったらどうするか」という思考訓練
- ・ 先見力とは、現在起っている事柄をこまめに調べて、そこから変化の兆しを見つけ、その兆しが今後どのようなトレンドになるかをしつこく考えた結果でてくるものだ。
- ・ 定点観測の対象を持っていると、それを軸にして世界を理解することができる。外国企業の視察に行く時は、必ず工場を見学する。
- ・ 最も重要なリーダーの役目は、まず「方向」を決めること、次が「程度(スピード)」を決めることだ。
- ・ 成熟・低成長の今は「発想力」「創造力」「構想力」によって、
- ・ 人間が変わる方法は 3 つしかない。時間配分を変える。住む場所を変える。付き合う人を変える。
- ・ 「蓄える」とおもわなければ、老後はゴージャスに暮らせる。
- ・ 1年のうちで本当にやりたいことをどこでやろうか先に決め、年初に休みを取ってしまう。

森嶋通夫「なぜ日本は『成功』したか？」(TBSブリタニカ)

1984年初版。世界的経済学者が書いた日本史の通史。

- ・ 道教が神道となった。
- ・ 孔子は仁者になることを目的とした。徳治主義。道徳で、導き礼で統制。忠は良心に対する誠実さ。中国王朝の原型は、儒教をイデオロギーとする律令政治国家。
- ・ 日本人は忠を最重要とした。主君に対し尽くすこと。
- ・ 天皇が君主だったのは全期間の三分の一。三分の二は二重、三重の政府の時代。天皇政府と将軍政府。異質の政府の存在。武治儒教国家。
- ・ 皇室は神道、政府は儒教、庶民は仏教。3つの倫理体系の伸縮的な組み合わせが日本の発展に寄与した。
- ・ 聖徳太子は中国文化を前にして日本精神の台木の上に中国の能力を接ぎ木しようとした。開化啓蒙。天皇制・民主主義・官僚制を提案。大化の改新は聖徳太子

の政治理論に基礎づけられた貴族革命。思想家聖徳太子と革命家中大兄皇子の合作。日本は法治国家の道を歩む。

- ・ 頼朝、信長、家康時代は、二重政府。徳川政府は武器輸入競争に勝つために鎖国する。鎖国中に全国民が儒教的な思考訓練を受けた。天皇に対する忠と将軍に対する忠の矛盾。
- ・ 西欧列強の圧力によって青写真の無いエリート革命、明治維新が行われ、近代統一国家をつくり始める。
- ・ 儒教をイデオロギーとする日本資本主義。1878年の明治維新から1945年の敗戦までの77年間に10の大きな戦争を30年間にわたって戦っている。民間企業は政府の行政指導に服した。ホワイトカラーは新しい武士である。終身雇用、企業内訓練、年功序列、長期競争、中小企業との賃金格差、同志的雰囲気、、、。儒教資本主義。準戦時下、戦時中に終身雇用と年功序列制を日本柱とする日本式雇用制度が普及した。
- ・ 1886年から1945年までの60年間に、半分の30年間戦争を行った。統制経済になっていた。
- ・ 弱い間は開国、強くなると攘夷。精神的には儒教国家主義、政治的には立憲君主国、経済的には資本主義、外交的には協調路線、という明治体制。第一次大戦終了時点では、明治体制は円滑に回転しなくなった。軍縮による挫折感は軍部の暴走へつながった。シベリア出兵、満州事変、5・15事件、2・26事件、日中戦争、、、。
- ・ マッカーサー改革は朝鮮戦争によってUターンする。この神風によって日本経済は復興し、戦前と同性格のものになった。自由陣営のアジアの大工場になっていく。国家の役にたつとは戦争の遂行に役に立つということで、工学偏重・理学軽視の理科教育が続いた。日本株式会社は優秀な人材を戦略産業に集中していく。戦後経済は民主主義的計画経済になった。接ぎ木に成功した。
- ・ 和魂洋才の和魂の中心は神国思想。神国思想の占めていた場所は真空状態。不吉な方向に発展する可能性は残る。日本精神を充てんした西欧並みの強国は大きな脅威となる。

森嶋通夫「学校・学歴・人生」(岩波書店)

1985年初版。

- ・ 私は職業生活において思い切り活躍できたかどうか(全力を発揮できたかどうか)で、人生の成功、不成功を判定します。
- ・ 頭は重要なエレメントではなく、それ以上に、情熱家であり、努力家であり、勇敢であり、積極的に意志を通す力をもっていなければなりません。そしてここぞと思う、

人生の天王山で、獅子奮迅の働きができる体力が必要です。

荒俣宏監修「知識人 99 人の死に方」(角川ソフィア文庫)

それぞれがどんな死に方をしたかを追った書物で、興味深いエピソードが満載。

以下、死生観、遺言をピックアップしてみる。

- ・ 永井荷風:余死する時葬式無用なり。、墓石建立亦無用なり。新聞紙に死亡記事など出す事元より無用。
- ・ 山本周五郎:人の価値は、かれが死んだ時これから何を為そうとしていたかによって決まるのだ。(ロングフェロー)
- ・ 向田邦子:死んだ後も人に思い出してもらえるようなものを書こう。
- ・ 市川房枝:私が死ねば必ず叙勲沙汰があるだろうが、絶対に受けないように。
- ・ 梅原龍三郎:葬式無用 弔問供物 固辞する事 生者は死者の為に煩わざるべからず
- ・ 中川一政:夭折の天才ではなく、長距離選手として走り通すことが一番
- ・ 松本清張:通夜、葬儀は不要なり
- ・ 扇谷正造:四十にして初めて惑い、五十にして志を立て、六十にして事に励み、七十にして事をなしとげ、八十にして引退する。
- ・ 大宅壮一:ライフワークを手がけるのが 10 年遅かった。
- ・ 長谷川町子:入院はしないこと、手術は受けたくないこと、そして葬儀、告別式はしないこと。
- ・ 竹中労:無理な延命工作はしないでほしい。死顔は誰にも見られたくない。通夜葬式、一切無用。遺骨は自分の好きな沖縄の地にまいてほしい。
- ・ 五味康祐:長生きしなければ成し遂げられぬ仕事がこの世にあることを、この年になって私は覚っている。
- ・ 大岡昇平:死んでみて初めてその人の生涯の意味がわかるはずです。あまり騒ぐな。お通夜、葬儀もいらぬ。

大城立裕「レールの向こう」(新潮社)

小説「琉球処分」を書いた大城立裕が、川端康成文学賞を受賞したというニュースをみたので、興味が湧いて受賞作の載った「レールの向こう」(新潮社)という単行本を読んだ。

川端康成という作家は、もちろんわが国文学界の最高峰であるが、20 代から 40 年間にわたって短編小説を書き続けてきた。

「掌の小説」という作品もある。

ノーベル文学賞を受賞したとき、その賞金を基金に新潮社が優れた短編小説を顕彰する「川端康成文学賞」を設けた。

「レールの向こう」という短編小説は、大城には珍しい短編の私小説である。

脳梗塞をわずらった妻の介護と、亡友の思いとからめた作品となった。それが独自の普遍性を生んだ。

大城は数十年間にわたる作家生活で「沖縄」にこだわってきて、「沖縄の私小説」を書いていますと言ってきたが、これらの作品で、私小説の普遍的な存在が見えたそうである。

自身の病気を扱った「病棟の窓」、縁者をモデルにした「四十九日のアカバナ」、甥をモデルにした「エントウリアム」、フィクション性の薄い「天女の幽霊」など。

いずれも沖縄の風土と日常が匂ってくるような作品である。

公務員勤めをしながら小説を書くという生活を始めたのが、60年前で、定年退職をした後も続けてきた、と「レールの向こう」の中で述懐しているように、42歳で「カクテル・パーティ」で沖縄初の芥川賞を受賞するなど、この人は二足のわらじを履き、そして60歳の定年後は89歳の現在までの30年間にもわたって文筆活動をつづけているのだ。そしてなお新しい境地を拓いた私小説で川端賞を受賞した、という事実に感銘を受ける。

この人の人生に興味を持ってこの本の最終ページにある経歴を探す。

そこには「著者自筆略歴」が一ページに記されている。略歴というより人生の総括といった趣がある。

1925年沖縄生まれ。沖縄県費生として東亜同文書院大学予科に入学するが、兵役、敗戦で中退。

基地勤務、高校教師を経て、25歳以降は琉球政府・沖縄県の公務員生活を送る。

経済企画課長、通商課長、公務員研修所長、沖縄史料編集所長、県立博物館館長を歴任し、定年退職。

この間、芥川賞を受賞した後は、琉球・沖縄の歴史と民俗をテーマとした前近代史、近代史、戦後史にわたる作品を書き続ける。

2002年、77歳で全集を勉誠出版から刊行。

受賞歴をみると、平林たい子賞、紀伊国屋演劇賞特別賞、紫綬褒章、沖縄タイムス賞、琉球新報賞、沖縄県功労賞、日本演劇協会演劇功労者表彰、そして今回の川端康成文学賞になる。

大城立裕は、作家としては、宮仕えをしながら30年、自由になって30年ということになる。

このような人生の先達の姿に肅然とする。

川島勝「井伏鱒二 サヨナラダケガ人生」(文芸春秋)

95 歳まで書き続けた作家の実像に迫る本。側近の担当編集者がみたい文士の素顔がわかる。亡くなって1年ほどの後に書いた回想。1994年発刊。独特の健康観、酒豪の様子、釣りの蒔蓄、旅の名人、人づきあいの哲学、処世の術、などが描かれている。

人物記念館を訪ねると、井伏鱒二が旅した痕跡が残っていることを感じることもある。確かに旅の名人だろうと納得する。そういえば、この文豪の本は一度も手にしたことがない。何を讀もうか。

この魅力ある人物の描写をピックアップしてみよう。

- ・ 井伏さんは座持ちが長い。
- ・ 好きな言葉は「良農は深く耕す」。
- ・ 座談は好むが、議論は好まない。
- ・ 変わらぬものは二つ、奥さんと住居(すまい)。
- ・ 「敵前迂回」という言葉をよく使う。
- ・ 「小説はウソを書くが、随筆は本当のことを書く」
- ・ 定住の人であり、また漂泊の人でもあった。
- ・ 時間に正確。待ち合わせの30分前には必ず駅のホームで待っている。
- ・ 思い込みが激しい。
- ・ 話には一筋縄ではいかない独特の隠し味が仕掛けられていて、それが小説や随筆にも共通したコクにつながっている。
- ・ 好きな詩
 - ・ 雪(三好達治) 太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ
 - ・ 落葉松(北原白秋) からまつを過ぎ、からまつをしみじみと見き。からまつはさびしかりけり。たびゆくはさびしかりけり。
- ・ 「花にあらしの たとへもあるぞ さよならだけが 人生だ」
- ・ 酒豪
- ・ セザンヌが好きで、特に淡彩をほどこしたデッサン風の作品を気に入っていた。
- ・ 「塹壕のなかのことは語らない」
- ・ 秀吉ぎらいで、信長贗真。
- ・ 小国が好きだった。
- ・ 健康には人一倍注意するように言われて育った。生魚はなるべく口にされない主義。酒豪だったが、食べ物はよく咀嚼し、ゆっくり時間をかけた。味の濃いすき焼きを好んだ。おでんの好物は、大根、厚揚げ、ちくわぶ。
- ・ 一日の打ち何時間かは必ず机の前に座ることを自分自身に義務づけていた。「ぼくは物が書けない時、ハガキや手紙を書くことにしているんだ。筆ならしが終わると、

ポンプの呼び水のように筆のすべりがよくなる」。

- ・ 大作家ではなく、小作家であるという誇り。
- ・ マネリズムを自戒。「親しみて狎れず」とい姿勢。
- ・ 「お先にどうぞ」が口ぐせ。

2015年11月

周恩来、矢吹晋、鈴木博「周恩来『十九歳の東京日記』」（小学館）

26年間にわたって中華人民共和国の総理をつとめた不倒翁・周恩来は、1917年9月(19歳)から1919年4月までの1年7か月を東京神田で過ごしている。東京高等師範と第一高等学校を受験するための予備校生活であった。

郷里では優等生であったが、日本語が向上せず、結局両方とも不合格になる。

この期間は、ロシア革命前夜、対支21ヶ条の要求の直後、パリ講和会議など、世界情勢が混とんとしており、中国はその流れに翻弄されていた時期であり、落ち着いて勉強に励むことも難しかった。また、日本は繁華街の繁栄、映画、芝居、デパートなど大正デモクラシーの中にあり、青年の心をゆすぶる文化の香りもあったのである。そういった中で、周恩来は挫折し、故国に帰っていく。この間の日記である。この頃の中国からの留学生は、孫文、魯迅、周恩来兄弟、陳独秀、郭沫若など後の中国を支える要人が多い。

日記は「修学」と「治事」と「通信」に分かれてほぼ毎日書かれている。修学欄は格言と詩句、治事欄は行動、通信欄は故国の家族・友人との手紙の往復、こういう構成になっている。

初日には「今日から一日も欠かさず記録し、、」「報恩の志を立て、ひとかども仕事をして、、一生をむざむざと過ごすまい」といった決意が語られている。その後も「今後は、勉強に没頭する、、睡眠7時間、勉強13時間半、、」など決意は語られるが、実際にはそうはいかなかった。

帰国する直前には「日本にやって来たのに日本語をうまく話せず、どうして大いに恥じずにいられよう！、、官立学校に合格できない、この恥は生涯拭い去ることができない！」と悔いている。

誰もがその才能と知性に感服した、あの周恩来の若き日が、挫折の日々だったとは驚きである。最短のコースで駆け上ったのではないのだ。

帰国後、五四運動に身を投じ、フランス留学で一皮むけて、新生中国の大指導者になっていく偉人の若き日の苦悩を知ることができるのだが、禁欲的な人格と強い向上心と、紹興人が得意の事務処理の有能さと、そして日中交渉にみえる柔軟さが、時間をかけて歴史的人物を醸成していったのだと感じる。

マイケル・ブース・寺西のぶ子訳「英国一家、日本を食べる」(亜紀書房)

英国人夫婦と二人の子どもの4人家族が日本各地の日本食を探検し味わった3か月の食べ歩きの克明な記録と感想録だ。東京、北海道、京都、大阪、福岡、沖縄。

日本のテレビ番組の40%以上が「フードテレビの分類に入るという試算を紹介している。そうかも知れない。

この本には日本食と日本人と日本に関する新しい発見や優れた考察が満載であるが、ここでは彼らが訪れた素晴らしい店をピックアップしてみたい。機会があれば訪問したい。

- ・ 東京両国の相撲レストラン「吉葉」(元の相撲部屋、力士OBが働いている)
- ・ 東京「タバス モラキュラーバー」
- ・ 銀座の壬生
- ・ 新宿「樽一」(クジラ料理とこだわりの日本酒)
- ・ 新宿の忍者レストラン「忍者屋敷新宿店」
- ・ 札幌「新ラーメン横丁」「元祖ラーメン横丁」「二条市場」
- ・ 京都「菊乃井」(料亭)
- ・ 京都「ひろ文」(流しそうめん)
- ・ 京都「いづう」(鮨)
- ・ 京都「奥丹」(豆腐料理)
- ・ 大阪「ふれじでんと千房」(お好み焼き)
- ・ 大阪「千房」(お好み焼き)
- ・ 大阪「だるま」(串カツ)
- ・ 大阪「エノキヤ」(立ち飲み屋)
- ・ 大阪「てんま」(うどん)
- ・ 大阪「カハラ」(有名レストラン)
- ・ 博多「一蘭」(ラーメン)

「80%満腹だと感じたら 20 分経過するのを待てば、すっかり満腹と感じられる」。胃から脳に信号が送られるのに 20 分。(心掛けたい)

「日本で訪れた街のなかで、もし住むとしたらここだと思うのが、福岡だ。適度に小さくて扱いやすく、大都市のおもしろ味も備えていて、独特の---リラックスしていて、快適で、遊び好きで、気取らない---雰囲気を持っている。気候に恵まれ、ショップや美術館、音楽ホール、ライブスポットが充実し、にぎやかな歓楽街もあり、都会の生活で欲しいと思うものは何でもそろっている」(その通り!)

佐々木俊尚「自分でつくるセーフティネット」(大和書房)

1年前に出た本。風呂の中とテレビをみながら再読。

「監視社会というより、黙殺社会」「善悪の丸見え社会」「弱いつながりを大事にするのが生存戦略」「人間関係なめらかにするインフラ」「会社より社会のためが正しい生存戦略」「SNSは人間関係維持装置と信頼保障装置」「丸裸、透明」、、、、。

面白い、役に立つ、重要なネット記事をFBで自分の感想をつけて紹介する。
これから、始めよう。

若新雄純「創造的脱力」(光文社)

副題は、かたい社会に変化をつくる、ゆるいコミュニケーション論。

常識を破る様々な企画を実践している若い著者による新しい動きがわかる刺激的な本だ。

以下、面白い考え方や企画についての言葉をピックアップしてみる。

壊すのではなく緩める。週休4日、月収15万円のゆるい就職。選択肢を提案し社会にグラデーションをつくる。人生の主権を取り戻す。鯖江市 JK 課。ゆるい市民。プロい市民。グラデーションのあるまち。困ったね。なんとなく。ゆるい移住。違和感を大事に。居心地のいいゾーン。多数派の枠からはみ出した社会的な少数派。ニート株式会社。事業の目的は一切の事業。カオス。普通に代わるものを作り出すのは想像以上に難しい。原始的プロセス。レンタルニート。ニー活。期待値を下げるビジネス。就活アウトロー。脱力的な空間。落とし所なんてなくていい。戸惑いやグダグダ感。ナルシスト採用。軸と柔らかさ。休みの充実は新しい報酬。働き方の選択枝。グラデーションがあっている。人生の主権を取り戻す。キャリアストレッチ。中身はかたく、外側はやわらかい。部分的に脱力する。当たり前のをいちど手放してみる。

こうやって並べてみると、既存の常識を根本から疑う不思議な納得感がある。そして実際にこの考え方を持って組織人や若者を巻き込み実行に移し、社会の話題を集めているのが素晴らしい。

宮城大学の学生だったこの人の派手なパフォーマンスは記憶にある。

姜尚中「悪の力」(集英社)

- ・ 「どうして自分はこんな心の病に苦しまなければならないのか」この肺腑をえぐるような息子の問いに私は答えられませんでした。、、、私はその答えをイエス・キリストの受難と赦しに求め、ミッション系の大学の学長に就任し、息子と同じような若者たちとの心の触れ合いに残された人生を賭けるべく、大学改革に専心しましたが、

大学を去ることにならざるを得ませんでした。

- ・ 本書を書こうと思い立ったのは、首都圏のあるミッション系の大学の学長を辞めざるをえなくなったことが大きなキッカケでした。とくに、辞任を決意する最後の二ヵ月間には、表裏のある人間の言動を見るにつけ、私の中に悪というテーマが浮上してくるようになったのです。
- ・ 本書の執筆の間、私の頭を占めていたのは、「国家悪」という問題でした。この悪はより巨大なテーマであり、戦後の「この国のかたち」を根本から作り替える問題とかがかかっています。

本初の冒頭に

「悪」の存在を教えてくれた「A」に----、とある。

「A」とは誰だろう？

山極寿一「京大式 おもろい勉強法」(朝日新聞出版)

神保町でこの本を買って、帰りの電車の中で読んでしまった。

著者は2014年10月から京大の総長に就任した霊長類学・人類学者。

入学式での挨拶が素晴らしいと話題になった。

また学長権限の強化が文部科学省の意向だが、この人は大きな権限で統治するのではなく、「調整型」であるべきだと真っ向から反対する。大学は大きなジャングル、研究者はそこで暮らす猛獣であり、自分の今までのフィールドであったアフリカから京大に変えて、今までと同じスタイルでやっていこうとしている。

著者の今までの「職」はすべて提案を受ける形で就いたものであり、フラフラと誘いに乗ってきたという。ダークホースであった彼に、「大学の自治と学問の自由」を守ろうとする人たちが変革を期待して票を入れて、総長に選んだのだ。

京都のサロン文化のポイントは「対話」であり、この方式が世界で求められる大きな流れになる。京大がどのように変化し、大学業界の中で光彩を放つのか注視していきたい。

以下、フィールドワーカーの著者の発した気になったキーワード。

「おもろいことをやりましょう!」「子棄て主義」「現場が学校」「味方をつくると敵ができる」「地元語は魔法の杖」「井戸端会議」「食事は柔らかいコミュニケーション」、、、、。

佐藤秀明(編)「三島由紀夫の言葉 人間の性」(新潮社)

三島由紀夫「人間の性(さが)」をぱらぱらとめくってみた。

学生時代に三島の本をよく読んだ。

小説もそうだが、この人の切れ味のいい言葉に親しんでいた。

久しぶりに、古本屋で見かけた本を手を取った。

- ・ 私がカメラを持たないのは、職業上の必要からである。カメラを持って歩くと、自分の目をなくしてしまう。
- ・ 小説家とは、、理想的には情感百パーセント、理智百パーセントほどの、普通の二倍のヴォルテージを持った人間であるべきで、バルザックも、スタンダールも、ドストエフスキーも、そういう小説家であった。
- ・ 鷗外の文章は非常におしゃれな人が、非常に贅沢な着物をいかにも無造作に着こなして、そのおしゃれを人に見せない、しかしよく見るとその無造作な普段着のように着こなされたものが、たいへん上等な結城であったり、久留米緋であったりというような文章でありまして、駆け出しの人にはその味がわかりにくいのであります。
- ・ 小説家は人間の心の井戸堀り人足のようなものである。井戸荒から上がって来たときには、日光を浴びなければならぬ。体を動かし、思いきる新鮮な空気を呼吸しなければならぬ。
- ・ 性や愛に関する事柄は、結局万卷の書物によるよりも、一人の人間から学ぶことが多いのです。
- ・ 文体をもたない批評は文体を批評する資格がなく、文体を持った批評は(小林秀雄氏のように)芸術作品になってしまう。なぜかというと文体をもちつかざり、批評は想像に無限に近づくからである。
- ・ 私は、、文章の最高の目標を、格調と気品に置いています。
- ・ 日本はなくなって、その代わりに、無機的な、からっぽな、ニュートラルな、中間色の、富裕な、抜け目があり、或る経済大国が極東の一角に残るのであろう。

池井戸潤「下町ロケット2ーガウディ計画」(小学館)

前作では、その部品がなければ宇宙へ向かうロケットが飛ばないという設定で、その部品をめぐるドラマであり、下町の佃製作所が最終的に勝利するという筋書きだった。

今作はその続編で、やはりそのバルブがうまく作動しなければ、心臓弁膜症の患者を救えないというキーテクノロジーを巡る物語で、医療界、学界、産業界の内部の闇を描く。今回も最終的には、下町の中小企業が勝利するという筋書きだ。

仕事は人間ドラマであることにやはり感動する人が多いことだろう。

- ・ 長く苦しい開発をしているとき、その問いの答えさえわかっているならば、迷うことはない。そして、その答えは単純明快なほうがいい。
- ・ 人が人生の一部を削ってやる以上、そこに何かの意味が欲しい、、、、

- ・ あるところまで行くと理屈では解き明かせないものが残る。そうなったらもう、徹底的に試作品を積み上げるしかない。作って試して、また作る。失敗し続けるかも知れない。だけど、独自のノウハウっていうのはそうした努力からしか生まれないんだ。
- ・ 自分たちの仕事が果たして何であるか。どこに向かっているのか。誰のために努力しているのか。
- ・ 会社は小さいが、夢はでかい。それでこそ——人生だ。自分のやりたいことさえやっていたら、人生ってのは、そんなに悪いもんじゃない。

著者は最後の「謝辞」で3人に感謝している。医者と経営者と法律家だ。

大阪医科大学の根本慎太郎先生。福井経編興業株式会社の高木義秀専務。内田・鮫島法律事務所の鮫島正洋弁護士。

4年前のブログには前作の「下町ロケット」の感想が以下のように記してある。

「ロケット研究者が打ち上げに失敗して辞職し、下町の家業の中小企業を継ぐのだが、思いがけず、日本を代表する重工会社と戦いつつ、国家プロジェクトの一翼を担っていく感動的な物語である。日本のものづくりの現場の素晴らしさに勇気を与えてくれる作品だ。

大企業のスタイル、知財を巡る戦い、人間関係の複雑さ、そして志の大切さなどがよくわかる素晴らしい小説で、エンターテインメント性も高い。正義感、夢、企業とは何かという問いかけ、生き方、そういうものが底流を流れており、人の世も捨てたものではないという感慨を持って読み進めることができ気持ちがいい。脇役の出向の銀行マンの渋い役回りなどは銀行に働いたものの矜持だろうか。そして何より時代をよく描いており、人間のつかみ方も納得感がある。この小説が映画になるという報道もあったが、映画作品にふさわしい作品だと納得した。」

2015年12月

萩原英雄「美の遍路」(日本放送出版協会)

山梨県立美術館で購入した萩原英雄「美の遍路」(NHK出版)を読了。

1913年山梨県甲府市生まれ。1953年東京美術学校に入学。

1938年、卒業後に浮世絵制作の高見沢木版出版社に入社。

1953年結核のため療養所に入所。ここで木版画と運命的な出会いをする。

近代木版画の祖。1960年の東京国際版画ビエンナーレでの受賞を皮切りに、国際版画展での受賞は9度に及ぶ

1979年より1990年まで日本版画協会理事長。

- ・ 姿こそ違え、画家の一生も一人のお遍路さんに過ぎない。どこ迄つづくか知れない美の遍路がその宿命である。
- ・ 近代を知るためには、セザンヌからさらに遡ってみななければ、本当のことは分からないのだ。
- ・ 私の生涯を律してきたのは、純粹、という一語だと思う。
- ・ とにかく、できるだけ沢山の作品を見ることです。
- ・ これ(ホドラーの風景画)こそ、本物の風景画だ。
- ・ この山(富士山)に取り組むことを、一生の願いとするようになった。
- ・ 「三十六富士」は、故郷を、父母を恋うる、私の心情である。北斎は、江戸の富士、彼の富士を残した。私は、現代の、自分の富士を彫ってみようと何時果てるともない仕事に挑んだのだった。
- ・ 今までのと同じように、ただひたすら前進するのみ。それだけでしかありません。

古市健寿「誰も戦争を教えられない」(講談社)

世界と日本の戦争博物館を旅して考えたことを記した本。

2011年のアリゾナ記念館からこの旅は始まる。

新田次郎「富士山頂」(文藝春秋)

作家の新田次郎は、気象庁測器課長として富士山気象レーダー設置工事の技術責任者であった。

二足のわらじを履いていたこの人物の考え方と組織への対応、そして出処進退に対してどういう考え方をしていたのか興味がある。

新田次郎は、作家の副業を持ち、俸給よりも多い収入を原稿によって得ており、組織内において野武士的な言動で、存在感のある人物として自らを描いている。

- ・ 経済的安定感は、彼を職場において孤立させた。
- ・ 昇格を求めている。
- ・ いつ辞めても筆で食っていけるという自信があるから強い。怖いものなしっていうんでしょうね。ああいう役人は御しがたいってね。
- ・ レーダー完成という終着点を頭に描き、ほとんど同時に、全く偶然に彼は退職ということを考えたのである。
- ・ 人事院はぼくに気象庁を辞めろと言ったのですか。
- ・ 辞めると決めた心の隅に、もしも村岡が強硬に辞職を反対したらという気がないでもなかった。

富士山レーダーの建設という一世一代の大仕事を引き受ければ、3 年間は小説が書けない。その間に世間から忘れられるという恐怖のはざままで彼は迷った。

自宅の書斎から見える富士山を見ながら、「もし逃げたなら、逃げたという悔恨は富士山を見るたびに彼を責めるだろう」という考えに至り、10 年になっていた補佐官を卒業し、測器課長を引き受けることにした。そして上司や同僚、関係する業者などで構成された一大事業に邁進し、「オリンピックで金メダルを取ることで、もっとむずかしい仕事」を完成させる。

実際に役所を辞めた 53 歳から 14 年間、毎年のように大型話題作を発表し、新田次郎は作家になっていった。

この文庫の表紙には、冬の富士山の真正面に木製の机に陣取って事務をとっている人物の後ろ姿が描かれていて、印象深い。この人物こそ、新田次郎本人である。

勝小吉「夢酔独言」(講談社)

よく話題になる勝海舟の父の自伝。

幕末の傑物・海舟の先祖は越後の盲人で、江戸で検校に出世し、巨富を蓄えた。

その末っ子が遺産の 3 万両をもらって 41 石の旗本の養子となる。金で地位を買ったのである。

その三男が小吉である。

この書を読むと、剣術遣いだった小吉のまわりの文化・文政・天保の江戸の旗本たちの生活がわかる。

小吉は勤めにありつけないこともあり、数々の乱暴を働く、親戚たちの間では鼻つまみ者だった。

しかし、この旗本退屈男は世間を知っている。その小吉から見た世間と自分の一生を率直な語り口で回顧している。

「おれほどの馬鹿な者は世の中にもあんまり有るまいとおもふ」から始まり、最後は「よくよく読んであじおふべし。子々孫々まであなかしこ」で終わっている。

無茶苦茶な 49 年の生涯をふりかえって、「昔の事をおもふと身の毛が立よふだ」「男たるものは決して俺が真似をばしないがいい」「今は書くにもはづかしい」「仁愛の道を少ししたら、是までの所業がおそろしくなった」と悔恨する。

こういう父親だったが、息子の海舟は孝行しているということを述べている。

この無頼の血筋が、歴史の大舞台での海舟の大胆な偉業に活かされているように思う。

小吉は遺した句が面白い。

「気はながくころはひろくいろすく つとめはかたく身をばもつべし」

青山南「作家はどうやって小説を書くのか、たっぷり聞いてみよう!」(岩波書店)

アーネスト・ヘミングウェイへのインタビューから。

ヘミングウェイは立って書く。木製の書見台。いつも鉛筆から始める。日々の進捗具合を、自分を甘やかさないように大きな表に記載。日々の文字生産量を記す。習慣の人間。自分の芸術に身を捧げている。自ら課した規律の奴隷。正午まで仕事、終わるとプールで半マイル泳ぐのが日課。

- ・ 毎日、書き終えていたところまでをまず書き直す。
- ・ 始めることさえできれば、あとは大丈夫。活力はやってくる。
- ・ 経済的な安心は、いろんな悩みから解放してくれる。
- ・ 定期的に汲みあげるのがいい。
- ・ 時間を無駄につかうと、とても許されない罪を犯したような気持ちになったりする。
- ・ いつも本を読んでいる---あるものをありっただけ。せっせと補充している。こっちの貯えがなくならないように。
- ・ なんだって、動き始めると、変わるんだよ。
- ・ 自分の最高のものを書こうとしているだけだ。ときどき運よく自分の力以上のものが欠けたりする。
- ・ 自分がなにをしているのかを承知している人間は、頭が働くかぎり、働くべきだ。
- ・ 書くのがつらくなると、ときどき読んで、自分を元気づけるんだ。
- ・ タイトルは最後に決まる。
- ・ 作家は、まともなやつなら、描写なんかしない。作りだすんだよ。
- ・ 創造力で何かを作る。、それに命を吹きこみ、うまくやれたら、永遠の命を与えることになる。だから、書くんだよ。

佐藤優「日本でテロが起きる日」(時事通信社)

佐藤優が職業作家になって 10 年。この間、単著は 100 冊を超えており、対談本や共著を含めると 200 冊を軽く超えている、という。それでも書きたいことに 2 割も満たしていないそうだ。

書くべきことがある、そういう人が作家という仕事をするにふさわしいということだろう。以下、ポイント。

- ・ イスラム国が世界イスラム革命を始めた。これは戦争。
- ・ テロリスト要求に動じない。それが第二、第三のテロを誘発しない唯一の方法。
- ・ 自爆テロのテロリストには組織が家族に年金を出す。
- ・ 首を切ると死後の命がないということになり、これはイスラム教では怖いこと。

- ・ 空爆しイスラム国から逃げるように難民用キャンプをつくる。これが人道支援で、空爆と並ぶ柱。人道支援は敵対行為。だから日本は標的にされる。
- ・ 第一次大戦中の 1916 年にサイクス・ピコ協定(1916 年)で、英仏露はオスマン・トルコ帝国の分割・線引きをした。トルコはドイツ側だったので敗戦国。文化、宗教とは無関係に国境線を引いた。これが不十分な統治しかできなくしている。
- ・ イスラム国には永続性がない。生産の思想がない。
- ・ サウジが崩れると核が流出してイスラム国が原爆を持つようになるかもしれない。
- ・ 極東でも核保有が動き出す。核ドミノが起った時、日本の外交力は極端に落ちる。そうならないようにしなければならない。
- ・ プーチンは大切な利益については、核カードを使うという宣言をしている。
- ・ 戦後レジームからの脱却は、戦前の日本と戦後の日本の連続性を強調するということだ。
- ・ 安倍外交はコウモリ外交。目標がない。周辺だけで動いている。
- ・ 尖閣をめぐる日中衝突は、今後は起きない。
- ・ 国民国家形成期にある中国は近代化完成まで最低 50 年はかかる。この間は「敵のイメージ」の日本が必要だから順番に歴史カードがでてくる。だから真の友好国にはなれない。決定的な対立にならないようにしなければならない。
- ・ 日本が辺野古で失敗すると、嘉手納基地まで使えなくなり、全基地閉鎖まで追い込まれるかもしれない。
- ・ 日本の教育が急速に新自由主義化している。大方の大学は即戦力をつくる専門学校化。私立大学の学費があがる。150 万が 5 年後には 300 万に。教育の右肩下がりが起り、教育水準が衰える可能性。

白井聡「永続敗戦論—戦後日本の核心」(太田出版)

今年 38 歳の若き論客による名著。2014 年の石橋湛山賞を受賞。角川財団学芸賞。

初の本格的な著作であるにもかかわらず、石橋湛山賞を受賞したのも頷ける衝撃の名著である。

戦後は戦前と連続しており、戦後日本の国体は米国に対する永続敗戦であると断じる。

戦後日本は一見民主国家であるが、実際は米国に奉仕し続けている主権のない傀儡国家である。

そのプラストレーションはアジア諸国に対する優越的対応である。

それを端的に表しているのが、敗戦ではなく終戦という言葉を使い、責任をうやむやにして、戦前と戦後をつないだ人々である。

彼らは、この米国追従の国体を完成させようとしている。それは敗戦が永続することを意味している。

そのことが明らかになったのは、政府が住民避難に全力を尽くさなかった一方で米軍には情報を提供し、さらにこの事故の責任がうやむやになった 3・11 の原発事故が契機となった。事故発生議事録もない。戦前・戦中の無責任の体系であり、体制は腐敗しきっている。メディアも学界も荒廃してる姿をさらした。

こういった戦後の国体をどうやって破壊するか。

各人が自らの命をかけても護るべきものを真に見出し、それを確信へと高めることができるなら知的・倫理的怠惰を燃料としている怪物的国体は変えることができるはずである。

- ・ 地震・津波と事故は、「戦後」というパンドラの箱を開けた。「平和と繁栄」の時代が完全に終わり、その逆の「戦争と衰退」の時代の幕開けを意味する。
- ・ 問題の本質は突き詰めれば常に、「対米従属」という構造に行き着く。
- ・ 「戦後」とはひとつの牢獄であったのだとすれば、それを破るには、自覚的で知的な努力が必要とされる。
- ・ 純然たる「敗戦」を「終戦」と呼びかえるという欺瞞によって戦後日本のレジームの根本が成り立っている。
- ・ 日本の本土こそ特殊であり、沖縄のケースこそ一般性を体現している。
- ・ 際限のない対米従属を続けていう限り、敗戦を否認し続けることができる。かかる状況を「永続敗戦」と呼ぶ。
- ・ 国内とアジアには敗戦を否認し「信念」を満足させ、自分たちの勢力を容認する米国に対しては卑屈な臣従を続ける、
- ・ 戦後とは、敗戦の事実を無意識の彼方に隠ぺいしつつ戦前の権力構造を相当程度温存したまま、近隣諸国との友好関係をカネで買いながら、「平和と安定」を享受してきた時代であった。
- ・ 日本国憲法に退廃を見いだす右派(占領軍の打算の理解ができない)も、反対に道義を見いだす左派(その打算が当然の国家行為と理解しない)も、いずれも欺瞞を抱えざるを得ない。
- ・ 米国のTPP戦略はリーマンショックの窮状からの脱出戦略である。保険・医療・金融・農業における米国主導のルール設定と日本市場の獲得という露骨な帝国主義的策動が含まれている。
- ・ TPPの標的は「非関税障壁」。それは独自の商慣行、安全基準、税制規制、製品規格などのローカル・ルールである。
- ・ 中国と日本が接近・協同し米国中心の世界秩序への挑戦を企てるのが最悪であり、常に両者に火種を残しておくことが重要な戦略である。
- ・ 日本の戦後民主主義は、冷戦の最前線を韓国・台湾等に担わせることによって生

じた地政学的余裕を基盤に犠牲的に成立可能となったのにすぎない。

- ・ 絶対的な平和主義を憲法上規定しながら、アジアでも戦争を経済発展の好機として利用、非核三原則を国是としながら米国の核の傘の存在を自明的な前提としてきたシニズムはいま清算を迫られている。
- ・ アジアにおける圧倒的な経済的優位にかげりが見える今、優位性の相対化に伴い、永続敗戦レジームは耐用年数を終えた。
- ・ 永続敗戦レジームの主導者たちは、新しい国体に深く依存しながら、再び「犠牲のシステム」を構築しようとしている。
- ・ 戦争終結の決断の本質は、革命よりは敗戦がましという選択だった。

高橋源一郎・SEALDs「民主主義ってなんだ？」(河出書房新社)

Sealds の中心メンバーの奥田愛基は、明治学院大学国際学部の4年生で、作家でもある高橋源一郎のゼミの聴講生である。経歴も興味深い。

父はキリスト教の牧師で貧困者の支援をしている有名な人である。

奥田は北九州にいた時は不登校でもあって、中学で家を出て

八重山群島の鳩間島で中学生生活を送る。鳩間島は周囲4キロの実に小さい島だ。私も大学の探検部時代にここで暮らしたことがあるので、親しみを持った。今は、人口は50人ほど。

卒業して、島根県の浅利町という人口1000人の町の全寮制高校に通う。

大学に入ってから、バックパッカーとしてカナダ、アイルランド、イギリス、ドイツなどを9ヶ月まわっている。

そして2013年秋から自由と民主主義のための学生緊急行動の運動を始める。

この奥田の発言を追ってみたい。色々な本からの引用も多いが考え深い人であることがわかる。

- ・ 怒りが込み上げてきた。
- ・ 各班のリーダーが副司令官。真の司令官は人民。
- ・ 次の参院選までを睨んでやります。
- ・ 言論を守れじゃなくて、言論を使え。
- ・ 運動では複数形を主語にはしない。
- ・ 民主主義は他者と生きるための共生の能力。どうやって意見の違う人と生きていくかという能力を高めていかないと。
- ・ 無知とはモノを知らないことではない。疑問を寄せられない状況のことだ。
- ・ 民主主義だけが永久革命という名で呼ばれるに値する。
- ・ 民主主義って誰も当事者になれる。あんたはどうするの？

「民主主義ってなんだ?」という問いかけを続けていくことが大事なことだ。
本のタイトルが結論になっている。